

平成17年度厚生労働科学研究
障害保健福祉総合研究成果発表会報告書

みて、きいて、はなしあおう、元気の出る話
地域移行・本人支援・地域生活支援東京国際フォーラム

主任研究者 河東田 博

財団法人日本障害者リハビリテーション協会

発表会： みて、きいて、はなしあおう、元気の出る話

地域移行・本人支援・地域生活支援東京国際フォーラム

日時： 平成17年11月3日（木） 9：30～15：00

場所： 立教大学池袋キャンパス8号館

目次

プログラム	1
開会のあいさつ	3
記念講演1「スウェーデンにおける本人活動と地域生活支援」	5
分科会1「本人活動とエンパワメント」	11
分科会2「地域で自立して生きていくために」	27
分科会3「本人活動の支援のあり方」	47
第1～第3合同分科会「話し合おう 私たちの夢と希望」	67
分科会4「地域移行と地域生活支援を考える」	73
記念講演2「オランダにおける本人活動と地域生活支援」	101
閉会のあいさつ	107

プログラム

(全体進行：小林幸恵、戸沢竜也)

(午前の部)

全体会 (9:30～10:00 会場：8202 教室)

記念講演 1：「スウェーデンにおける本人活動と地域生活支援」

(スウェーデン) イェテボリ・グルンデン協会
理事 マーリン・アシュテレイ
理事 ジェーン・ハルビ

分科会 1 (10:10～12:00)

★第 1 分科会：本人活動とエンパワメント (本人向け分科会 会場：8202 教室)
(本人たちの分科会・大阪「かえる会」を中心に企画)

講師・助言者：

マーリン・アシュテレイ (スウェーデン・グルンデン協会)
ヴィレム・クワッケル (オランダ・オンダリングシュタルク連盟)
(支援者：リッチェ・オーメン、オンダリングシュタルク連盟支援者)

★第 2 分科会：地域で自立して生きていくために (本人向け分科会 会場：8303 教室)
(本人たちの分科会・埼玉「わらじの会」を中心に企画)

講師・助言者：

ジェーン・ハルビ (スウェーデン・グルンデン協会)
ウィリアム・ヴェステヴェール (オランダ・オンダリングシュタルク連盟)
(支援者：アン・クリスティン・ハルト、グルンデン協会支援者)

★第 3 分科会：本人活動の支援のあり方 (支援者向け分科会 会場：8304 教室)
(企画者：花崎三千子、札幌みんなの会支援者)

コーディネーター：花崎三千子

発題者 1：アンデシュ・ベリストローム (グルンデン協会支援者)
発題者 2：ロール・コック (オンダリングシュタルク連盟支援者)
発題者 3：光増昌久 (札幌みんなの会支援者)
発題者 4：本田隆光 (ふれんずトロ支援者)

★第 4 分科会 (10:10～午後まで継続)：地域移行と地域生活支援を考える
(援助者・家族向け分科会 会場：8201 教室)

講演 1：レスリー・アイリーン・チェノウエス
(オーストラリア・クイーンズランド大学上級講師)

講演 2：小林繁市（伊達市地域生活支援センター所^{しよちやう}長）

（昼食・休憩） 12:00～13:00

（午後の部）

分科会 2（13:00～14:20）

★第 1～3 分科会（本人向け合同分科会 会場：8202 教室）

「話し合おうー私たちの夢と希望ー」

★第 4 分科会（援助者・家族向け分科会 会場：8201 教室）

研究報告：杉田穂子（立教女学院短期大学助教授）

シンポジウム：地域移行と地域生活支援を考える

シンポジスト：レスリー・アイリーン・チェノウエス（オーストラリア）

小林繁市（伊達市地域生活支援センター所長）

杉田穂子（立教女学院短期大学助教授）

コーディネーター：河東田博（立教大学）

全体会（14:30～15:00 会場：8202 教室）

記念講演 2：「オランダにおける本人活動と地域生活支援」

オランダ・オンダリングシュタルク連盟（L F B 本人全国自治組織）

所長 ウイリアム・ヴェステヴェル

北部地区所長 ヴイレム・クワッケル

開会のあいさつ

河東田 博

皆さん、おはようございます。朝早くからこんなに大勢の方に集まっていただき、本当に感謝を申し上げます。

3日前の10月31日、多くの障害者団体が、慎重審議、もしくは反対を求めているにもかかわらず、障害者自立支援法が可決されてしまいました。とても残念な出来事の一つになってしまいましたが、この障害者自立支援法は、来年4月から順次実施されていくことになります。この法律は、身体・知的・精神の障害ごとに異なる福祉サービスを一本化するとともに、利用者に原則1割の負担を求める内容となっています。またこの法律は、これまでの障害種別のサービスのあり方から、障害の程度別に変わるなど、大きな変化が伴ってきております。今後、各自治体でどのようにサービスの質を落とさずに取り組みがなされていくのかが求められていきます。その意味で、各自治体との連携や働きかけが今後とも求められていくと思います。

さて、このように福祉にかかわる大きな変化が起こってきておりますが、この間私たちは、地域移行と地域生活支援に関する研究に取り組んでまいりました。これらの結果はほぼ出そろいつつありますので、今回その結果をお示しするとともに、各方面から多くの方においでいただき、さまざまな論議をこの場で行っていきたいと思っております。このたび、スウェーデン、オランダ、オーストラリアからご本人を含む関係者を招聘し、先進事例を出していただきながら、私どもが行ってきた調査結果などとの突き合わせをさせていただこうと思っております。そのために今回は、大阪「かえる会」の皆さんや、埼玉「わらじの会」の皆さん、そして本人活動の支援を長年行ってこられました花崎三千子さんのお力添えをいただきながら、この国際フォーラムを企画させていただきました。地域移行だけではなく、本人支援のあり方などからも多くのことを学び、私たちの取り組み、または実践に生かしていきたいと思っております。

最後になりましたが、本国際フォーラムを企画するにあたりまして、日本障害者リハビリテーション協会の皆様方、そして立教大学の関係の皆様方に多大なお力添えをいただきました。心から感謝を申し上げたいと思います。

そして、突然のお願いにもかかわらず駆けつけてくださいました、光増様、本田様、山田様、花崎様、そして鈴木様、その他大勢の方々に心から感謝の意を表したいと思います。

この国際フォーラムは3時で終了いたしますが、一日楽しんでいただきたいと思います。

さあ、それでは、東京国際フォーラムの開会です！



記念講演 1

「スウェーデンにおける本人活動と地域生活支援」

スウェーデン・イエテボリ・グルンデン協会

理事 マーリン・アシュトレイ

理事 ジェーン・ハルビ

●記念講演1 マーリン・アシュトレイ、ジェーン・ハルビ

マーリン・アシュトレイ、ジェーン・ハルビと申します。スウェーデンのグルンデン協会からまいりました。今日は、グルンデン協会についてお話をいたします。

グルンデン協会は、FUBという親の会の一部としてスタートしましたが、2000年に独立いたしました。

私たちの活動は、幾つかの部分からなっていて、まず理事会、プロジェクト担当グループ、メディア、映画、ウェブサイトのデザイン作成、カフェ、レジャー、それから旅行などに分かれています。

事業を統括している執行部のメンバーは5人。2人のコーチもいます。

グルンデン協会には、ほかの組織と同じように規約があります。この規約の中にはグルンデン協会独特の内容も含まれています。みんなに自分たちの生活について決定や話し合いをする際にぜひ参加してほしい、ほかの人たちと同じようにみんなにも教育を受ける権利、働いたり同じような生活をするような権利を持ってほしい、差別と偏見と戦います、障害者に対するほかの人たちの態度を変えてほしいといった内容が、グルンデン協会独特の規約の中身です。

グルンデン協会のメディアのグループの活動内容ですが、新聞や雑誌をつくったり、ラジオ番組を製作したり、フィルムや映画を製作したり、情報提供をしたり、ウェブサイトをつくったり、ほかにもたくさんの活動をしています。

グルンデンのメンバーは、お昼を食べにいらっしゃるお客様のために、おいしい食事を用意しています。パンやペストリーをつくったり、夜になるとビンゴゲームをして楽しんだりする、そういうコーヒーショップを運営しています。このコーヒーショップは食べ物がとてもおいしくて、健康的な食事を提供するという事で特別賞を受賞しました。

それから映画やウェブサイトのデザインをやっているグループでは、映画の自主製作をやったり、あるいは私たちのため、またほかの人のためのウェブサイトづくりをやったりしています。私たちのウェブサイトのアドレスは、www.grunden.seです。

余暇活動のグループですが、1週間に2晩、オープンハウスという催しをやっています。例えばパンをつくったり、ペインティングをするような会をやったり、ダンスをしたり、映画を鑑賞したりしています。それからコンピューターとITの部屋を開放しています。また、1週間に2日乗馬も楽しんでいます。アイスランドの馬に乗って乗馬をしたり、またパーティーをするときもあります。

旅行の活動ですが、イエテボリというところにグルンデン協会がありますが、その町の人たち200人ぐらいがこの旅行に参加しています。普通の旅行の場合もありますし、女性のための旅行、釣り、音楽を楽しむための旅行など、特別なテーマごとの旅行もあります。だいたい出かけるときは、6人以上にならないような小さなグループで2人のガイド付きで出かけます。

プロジェクトにかかわる活動ですが、いろいろなプロジェクトがあります。インターネットにアクセスできるようにするためのITプロジェクト。それから人間関係や愛やセックスなどについて語り合うプロジェクト「クリック」というものがあります。それからまた、国政選挙をより投票がしやすいようにするための情報提供などの活動も含まれます。また本当の意味で、やりがいのある仕事を得るための就労、仕事、職業に関するプロジェクトもあります。

グルンデン協会はいろいろな賞を受賞していますが、その中には、EUの社会統合に関する活動に与えられた金メダル、それからイエテボリ市のアクセスの問題を取り上げたときにも表彰されました。また、スウェーデンの映画協会から、短編映画部門で2等賞をもらったこともあります。またローズ・マリー・デイビッド賞も受賞しました。

私どものグルンデン協会は、まず第一ステップとしてスウェーデン国内の団体としてスター

トしました。政府の資金を申請して、2006年1月から活動が開始できると期待しています。それから、障害者のグループとして、サービスの本部をイエテボリに置いて、自分たちの活動をし、2人のコーチに支えられながら進めていきたいと思っています。それからまた、地域のオフィスも5箇所設けました。東に1箇所、西に1箇所、北に2箇所、南に1箇所です。これら全部がうまく軌道に乗るのに3年ぐらいかかると思います。

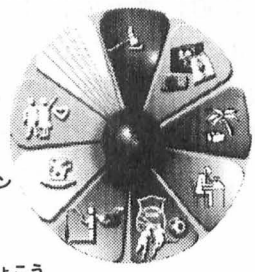
次に、国際的な活動ですが、グルンデン協会は世界じゅうにその名前を知られています。幾つかの国際会議やシンポジウムなどに参加しています。これは、オランダやヨーロッパのほかの国々と一緒に企画した会議などです。それからまた、日本とチリにおいても本人支援のための活動を行っています。以上です。ありがとうございました。(拍手)

グルンデンについて

2000ねん そうつ

いくつかに分かれて、仕事(しごと)をします。

たとえば:
りじかい
プロジェクト
メディア
えいが
ウェブ・デザイン
カフェ
よか
きゅうじつのりょう



わたしたちのりじかいです。
11にんのりじかいメンバーは、みんな、ちてきなしょうがいがあります。これがみんなのしゃしんです。



わたしたちのじむきょくは、5人からなり、2人のコーチもいます。

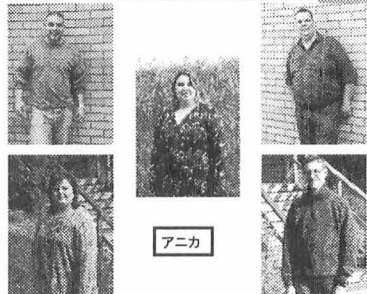
トミー

マーリン

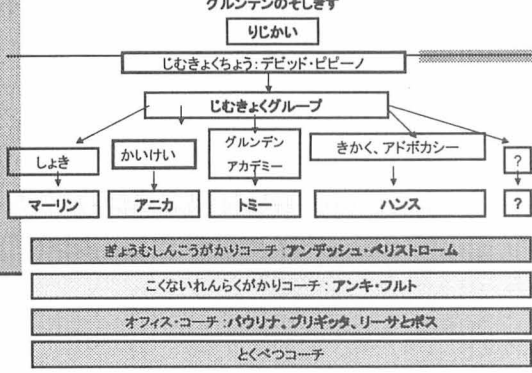
アニカ

ハンズ

デヴィッド



グルンデンのそしきず





グルンデンには憲章(けんしょう)があります。ほかのそしきでもおなじでしょう。憲章(けんしょう)のなかには、グルンデンにとってとくべつの意味(いみ)のあるものがあります。

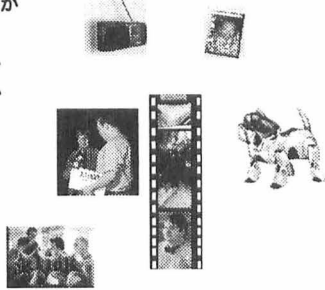


- わたしたちは、だれもがじぶんの人生(じんせい)にかんする決定(けつてい)にさんかすることぞみます。
- わたしたちは、ひとひとが、きょういく、しごと、にちじょうせいかつについて、ほかの人とおなじ権利(けんり)をもつことぞみます。
- わたしたちは、さべつやへんけんとたたかいます。
- わたしたちは、ひとひとのしょうがいしゃにたいする態度(たいど)をへんかさせることぞみます。

グルンデン メディア

グルンデンのなかまがつくっているのは、

- しんぶんやざっし
- ラジオプログラム
- えいが
- じょうほう
- ウェブサイト
- その他



コーヒーショップ



- グルンデンのメンバーは、ちゅうしょくのゲストのために、おいしい食事（しょくじ）をつくっています。パンやケーキもつくります。ビンゴゲームのときは、よるもひらいています。
- コーヒー・ショップは、おいしくてけんこうてきな食事（しょくじ）をだしていることで、とくべつ賞（しょう）をもらいました。



えいがとウェブサイト

- グルンデンでは、じぶんでえいがをつくっています。
- グルンデンのウェブサイトだけでなく、ほかのそしきのウェブサイトもつくりました。



メンバーのよかかつどう

わたしたちは、1しゅうかいに2かい、よるにオープンハウスをします。たとえば、パンをつくるとか、グラフィック・ペインティングをするとか、ダンスのゆうべをするとか、コンピューターやITルームもオープンにしています。

わたしたちは、ひるまは、1しゅうかんに2かい、アイランドのうまで、じょうばをします。パーティーをひらくときもあります。



きゅうかのりょうこう



わたしたちは、まいとし、イエテボリにすむ200にんぐらのひとのために、りょうこうをきかしています。

たいていは、ふつうのかんこうりょうですが、おんなだけのたび、つりのたび、おながくのたびなど、とくべつのテーマにあわせたりょうこうもあります。

わたしたちは、できるだけしょうにんずうでりょうこうすることになっています。メンバーは8にんをこえないようにし、ガイドもふたりまでです。



プロジェクト

- インターネットにしたむためのIT-プロジェクト
- ひとのかんけい、あい、セックスについての「クリック」プロジェクト
- ぎかい選挙（せんきょ）のじょうほうにかんする「やさしいとうひょう」プロジェクト
- ほんとうの仕事（しごと）につくための「しごと」プロジェクト
- グルンデンはかずかずの賞（しょう）をもらっています。
 - ♪ EUから、しゃかいとうごうのためのさいりょうの仕事（しごと）におくられる金（きん）メダル
 - ♪ イエテボリ市からはちかづきやすさ賞（しょう）。
 - ♪ スウェーデン・フィルム・インスティテュートから、短編映画部門（たんぺんえいがぶもん）の2とう賞（しょう）
 - ♪ ローズ・マリー・デイビット賞（しょう）

こくさいかつどう

- グルンデンは、せかいじゅうに知られています。わたしたちは、こくさいかいぎになんどもしゅっせきしています。またオランダやその他のヨーロッパのくにときょうりよくかんけいをもっています。
- わたしたちは、にほんやチリで、セルフ・アドボカシーのプロジェクトのしごとをしています。





分科会 1

「本人活動とエンパワメント」

講師・助言者

マーリン・アシュテレイ

(スウェーデン・グルンデン協会)

ヴィレム・クワッケル

(オランダ・L F B)

(支援者：リッチェ・オーメン、

オランダ・L F B)

(本人たちの分科会・大阪「かえる会」を中心に企画)

●午前の部

A そろそろ始めてもよろしいでしょうか。(拍手)

皆さん、おはようございます。今から『元氣のでる』話をしよう!という分科会を始めます。大阪から来ました、ミス日本のAです。(一同笑い)今日は司会をします。よろしくお願いします。この分科会は、『元氣のでる』話をしよう!という分科会です。元気に活動しているスウェーデン、オランダ、日本の「かえる会」の話を聞きます。参加をしている当事者の皆さんには、この話を聞いて元氣になってほしいと思います。また支援者の皆さんには、当事者が元氣に活動できるために、どのような支援をしたらいいのか考えてほしいと思います。

まず中身に入る前に、ここに集まった人たちはお互い知らない人ばかりだと思うので、自己紹介をしたいと思います。隣の人や前や後ろの人と自己紹介をします。名前やどこから来たか、生活のことや仕事のこと、趣味などを話すのもいいかもしれません。自己紹介をした後は、お互いに褒め合ってください。「あなたのその笑顔はすてきですね」「あなたのそのひとみ、すてきですね」などと、お互いのすてきなところを探して褒めてください。そして最後に握手をして別れます。終わったら、また後ろや前の人と自己紹介をして褒め合い、最後に握手をしてください。皆さん、わかりましたか。それでは始めましょう。

(会場内で参加者が互いに自己紹介しあう)

皆さん、たくさんの人とあいさつできましたか。そろそろ終わりなので、席についてください。

それでは、早速中身に入っていきたいと思います。まずは内容の確認をしましょう。まずは元氣の出る話を聞こうということで、スウェーデン、オランダ、日本の「かえる会」の当事者の話を聞きます。スウェーデン、オランダ、かえる会がどのような活動をしているか、自分たちと同じことをしているのか違うことをしているのか、元氣が出るということですが、本当に元氣が出るのでしょうか。楽しみです。その後に質問をする時間があります。ここまでが午前の部です。その後は、昼御飯のため、1時間休憩をします。午後からは、皆さんから意見を出してください。午前中に聞いたスウェーデン、オランダ、かえる会の活動の話を参考に、どうしたら元氣が出るかを話し合ってください。そして、最後に元氣が出る話をして、皆さんが元氣になったらこの分科会は終わりです。

それではまず、元氣の出る話を聞こうということで、スウェーデン、オランダ、日本の「かえる会」の話を順番に聞いてもらおうと思います。トップバッターは、スウェーデンの話です。スウェーデンのマーリンさんから話をしてもらいます。マーリンさん、それではよろしくお願いします。

マーリン では、始めます。私はエンパワメントについて感じることをお話しします。私のエンパワメントの道しるべとして、子どものころの話、学校のこと、アメリカでの経験、私生活、そして今についてお話しします。

私は1972年に生まれました。ですが、そのときお母さんは私の世話をすることができませんでした。そこで乳児院に移らなければならませんでした。その後、私をかわいがってくれる家族と一緒に住むことができました。そこに10カ月ぐらい住んでから、男の人と女の人がやってきて、自分たちの子どもになれる子どもがいなくて探しに来ました。それで、私がついていくことになって、その人たちと週末を一緒に過ごしました。その後で2人が私を気に入ってくれたので、乳児院に来て、「ぜひ、この子をください」と言いました。乳児院に私をくださいと言ってくれたので、私はこの2人と一緒に住むことになりました。2人は私を長女として迎えてくれました。その後、男の子や女の子のきょうだいできて、私のことをとてもかわいがっ

てくれました。

次に私の学校についてお話しします。4年生になったとき、先生たちは、なぜ私が学校の勉強についていけないだろうと頭をひねりました。「この子が怠け者だからなんだろうか」「それとも勉強の理解に問題があるからなんだろうか」「勉強がわからないんだろうか」と。それで、初めのうちは普通学校に通っていました。でも5年生になったとき、普通学校ではなくて養護学校に移りました。それは先生たちと私の両親が、私の問題を話し合って決めてくれたことです。新しい養護学校に移ってから、私は頭がいい子になりました。そこでは、ほかの子たちよりもちょっと進んでいたからです。でも、私はアメリカに住んだことがあります、アメリカでは知的障害がある人でも、知的障害のない人と同じクラスで勉強していました。それはとてもよいことだと思いました。

もう学校を出てからだいぶたちますけれども、その後の私生活についてお話ししたいと思います。私はとても幸せな私生活を送っています。つまり、結婚もしましたし子どもも生まれました。学校を出てから13年になりますが、ずっとグルンデン協会で働いています。初めはグルンデンの受付係で、電話に出たり人に伝言をしていました。やがてキッチンで働くようになって、それも10年間続けています。それからまたオフィスで働くようになりました。スターバックスでも働いていました。いろんな機会があるので、こういう仕事ができるのはとてもいいことだと思います。また理事会で書記をしています。世界のいろいろな場所の世界大会に出る場合、私たちが働きかけている問題について、世界ではどうなっているのかということを知るとは、とても大事なことだと思います。

私は5年前に母親になりました。男の子がいます。しかしそのことでいろんな出来事がありました。私は最初、妊娠していることをだれにも話さなかったのです。でもそれは、決していることではなかったと思います。自分の子を自分で育てるのではなく、里親に預けなければならないということが嫌だったので、妊娠していることをだれにも言いませんでした。私はそのときとても悲しくて、その1年は悲しい1年でした。生んでも自分の子どもと一緒に住むことができなかったからです。でも本当のことを言うと、それが一番よかったかもしれません。私のその男の子が、自分の人生をうまくスタートすることができたからです。今、その子が5歳になりました。現在は、私が選んだ家族と一緒にその男の子は暮らしています。でも私も、1週間に一度その子と会うことになっています。そのときが、1週間の中で一番楽しいときです。私は最近結婚しました。この結婚相手の男性はとてもすてきな人で、大好きです。

私は現在、グルンデン協会で働いています。これまでいいことも悪いことも経験しましたが、そのおかげでどんどん強くなったし、ひとりだちができるようになったと思います。私が仕事をするとき、コーチがいつもついていなければならないということも、今ではなくなりました。自分自身に自信が持てるようになりました。私と同じ状況に置かれた人たちにも、もっとひとりだちできるチャンスをあげることが大事だと思っています。こうして仕事を通じて強くなることができたのは、私の仕事にとってもいいことだと思います。

エンパワメントをどのように使うかについて考えていることは、知的障害のある人で親になりたい人や親になった人を助けることです。これからも知的障害のある人で親になりたい人、親になった人、いろいろな問題を抱える人がいると思いますが、そういった人たちを私は助けてあげることができると思います。そのようにして、エンパワメントを使っていくことができると思います。地域社会やソーシャルワーカーの人たちの、正しい情報や支援さえあれば、私たちは子どもの世話を手伝ってもらえることができるわけです。ですから、自分の子どもと無理やり別れるのではなくて、そのような支援を得て自分で育てることができるようになると思います。親になったり親になりたい人は、一緒になってもっと強くなり、お互いに助け合っ

自分たちの権利のために闘う必要があると思います。

私がエンパワメントを使って実現したいことは、「本当の仕事」をふやすことです。つまり、年金をもらいながらデイセンターで活動するというのではなくて、本当の給料をもらえる仕事をふやしたいのです。「あの人はきちんと仕事ができた」といった例や、「自分にもできた」といった経験のある人がたくさんいますから、デイセンターの活動をどうするか、そんな話し合いをするのが時間のむだに思えることがあります。私たちは、「本当の仕事」を実現するためのいろいろなやり方を学ぶ必要があります。「本当の仕事」、お給料をもらえる仕事を持った人たちに起きるいろいろなすばらしいことを、お互いに語っていく必要、話し合っていく必要があると思います。

もう一つ頑張ろうと思っているのは、女性の問題です。私たちのオフィスの仲間は、女性の問題に取り組むプロジェクトを立ち上げました。この問題は、私たちの組織にとって本当に大事なことだと思います。社会の中で差別されたり、性的に虐待されて、地域社会から何の支援も受けられない女性がたくさんいます。ですから、大変、急を要する、急いでやらなければならない仕事だと思います。その上、知的障害のある女性は、もっと難しい立場に置かれています。孤立していて助けを求める先がないという場合が多いからです。彼女たちが、社会の中で本当に差別されて、ひとりぼっちになっている場合が多いからです。グルンデン協会では、この問題やそのほかの問題に真剣に取り組んでいます。

私と一緒に働いてくれている仲間と、私たちは毎日いろんなことを学んでいます。新しい経験を積んで、その結果に基づいて先に進んでいきます。だんだん強くなっていきますし、また自分に対する自信も出てきます。それが私にとって大きな満足になっています。

それではこれで最後ですが、皆さんどうもありがとうございました。いつかスウェーデンでお会いしたいと思います。(拍手)

A ありがとうございました。

続いてオランダのヴィレムさんです。それではよろしくお願いします。(拍手)

ヴィレム おはようございます。ヴィレム・クワッケルと申します。オランダから来ました。エンパワメントの分科会に、皆さんようこそおいでくださいました。お互いに一緒に学び合いたいと思います。

雨が降った後には、太陽が輝きます。つまり、施設は曇りの状態ですが、ちゃんと太陽が輝くような組織になると確信しています。LFBという組織で働きながら、いつか太陽の輝くようなところで生活できるようにしたいと思っています。

私が話す内容は、私の生活について、エンパワメントについて、いろいろな発展についてです。

私と同じく私の両親も知的障害者でした。私のエンパワメントは、子どものころから始まっていました。私の里親の家族のところで、既に始まっていました。その家族とは2～3年一緒に住みました。

私たちは、学習する権利、発達する権利というものがあります。ほかの人たちより学習のスピードは遅いかもしれませんが、学習する権利というものが私たちにもあるのです。私が学校で勉強しなかったことを、今、LFBという組織の中で勉強しています。

私自身の経験についてお話しします。私は以前、ある施設にいました。そこでの経験は私にとっては全然エンパワメントできるものではありませんでした。24人の人と一緒に住まなければならなかったし、またそれは自分が選んだ人たちではなかったからです。そこで一緒に

暮らしている人たちは、別に友達だったわけではありませんでしたし、楽しいとは思いませんでした。ですから、こういう大勢の人が一緒に施設で暮らすというのは、私にとっては全然エンパワメントできるものではありませんでした。

私は、以前、腹話術をやっていたことがあります。それはどういう意味かと言いますと、要するに自分は口をあけているだけで、ほかの人が代わりにしゃべっていたからです。私は腹話術の人形にしかすぎなかったということです。ですからエンパワメントでも何でもなかったわけです。施設に住んでいる人というのは、自分が操り人形のように感じている場合が多いと思います。自分で動いているのではなくて、だれかに動かされているという感じです。それは決していいことではありません。それから、複数の障害を持っている人も、やはりエンパワメントを持つ権利があると思います。

家族についてお話しします。私には今、一緒に住んでいる女性（妻）がいます。そして猫も家族の一員として住んでいます。子どもは持たないことにしました。そのかわりに猫を飼っています。子どもを育てるのは、ちょっと無理があるだろうと思ったので、子どもは持たないことを自分で選びました。私自身が自分でそうしようと決めたのです。

次にセルフアドボカシーについて述べます。障害者という意識を持ったときに、本当に障害者という姿が見えてくると思います。自分自身が障害者意識を持って積極的に発言をしてこそ、初めてほかの人の支援ができるようになると思います。何か約束をするときも、自分で電話をかけて約束をします。約束をしたことは、きちんと約束どおりにやって責任を果たします。エンパワメントするということは、自分でやり、責任を果たすということです。そうすることが大事だと思います。

次に情報について。短く、はっきりと、思っていることを率直に言うということが大事だと思います。それがよいことだと思います。私たちがお互いに話をするということが大事なのであって、私たちのことを他の人にしゃべってもらおうということではありません。私たちこそが、専門家なのです。ですから、当事者として議会に対しても発言します。それこそがエンパワメントです。知的障害を持っている人たちのための、またそういう人たち自身によるワークショップが開催されています。過去においては、いろいろな会議やシンポジウムが行われました。知的障害についての会議やシンポジウムでしたが、それは知的障害者のための会議やシンポジウムではありませんでした。

次にノーマライゼーション、みんなで一緒になってという意味です。私たちにも、目や耳や鼻があります。手もあります。ですから、それを自分たち自身で使いたいわけです。何をするにしても、私たち自身が参加したいと思います。きちんと尊敬されたいと思います。何をするにしても参加したいですし、まただれからも、親からも支援者からもちゃんと尊敬されたいと思います。

みんなと同じように生きたい、私たちもまた一緒に生きたいということです。まさに、このエンパワメント、当事者が自分たちの力で決定するという権利こそ、私の人生になくてはならない考え方です。長い間、話を聞いていただいてありがとうございました。（拍手）

A ありがとうございました。猫と一緒に生活しているということですが、猫はかわいいですよ。私も猫になりたいです。（笑）

ここで少し休憩を取りたいと思います。11時10分まで休憩します。

【休 憩】

A では始めます。Bさん、緊張していませんか。大阪代表でっせ。がんばりや。よろしくお願いします。

B ではいきます。大阪の「パンジー」で、「かえる会」の活動をしているBです。これから「かえる会」の活動の報告をします。話を三つします。一つ目は、なぜ、「かえる会」をつくったのか。二つ目は、「かえる会」ではどんなことをしているのか。三つ目は、これから何をしたいのかです。

一つ目は、なぜ、「かえる会」をつくったのか話をします。今から5年前に、「パンジー」が大きな集会をしました。その集会で「パンジー」のことを振り返りました。「パンジー」は、まだまだ当事者が中心になっていませんでした。それで僕たち当事者は、その集会で、「職員だけで決めるな」という話を発表しました。その集会の後で、「パンジー」のこれからのことについて話し合いました。スウェーデンのグルンデン協会と「パンジー」を比べてみました。グルンデン協会では当事者が中心でした。「パンジー」では支援者が中心でした。それで、「パンジー」も当事者中心に変えていこうと思いました。

まず、会の名前も当事者で決め、「かえる会」という名前にしました。「パンジー」や社会を変えていきたいからです。夏休みに支援者と当事者で、グルンデン協会を見学に行きました。理事長のハンスや理事のアンナから、グルンデン協会の説明をしてもらいました。スウェーデンでは入所施設が解体されて、入所施設はありませんでした。日本でも入所施設はもう要らないと訴えていこうと思いました。グルンデン協会では、当事者がゆっくりしたペースで活動していました。それがすごくいいと思いました。

2002年4月に、念願の「ピープルファースト」の事務所をつくることができました。事務所の名前は、「はっしんきちザ☆ハート」にしました。心臓が血液を送り出すように、当事者の活動をここから大阪に発信していきたいと思ってつけました。こうやって、「かえる会」が始まっていきました。

次に、「かえる会」が今やっている活動について話をします。毎週1回、「かえる会」をしています。まず、「パンジー」や「パンジー2」、グループホームで起こったことを報告してもらいます。問題が起こったときは、みんなで考えています。この前は、アルバイトの介護者がしたらいけないことをしました。そういうことはやめてほしいと、1回注意しました。でも1カ月たって、また同じようなことをしてしまいました。それで、やめてもらうことに決めました。「かえる会」の会議が終わったら、当事者がパソコンで「かえる会新聞」をつくって、「パンジー」や「わくわく」に送っています。

次に職員の面接のことを話します。3年前に初めて面接をしました。初めてのことなので、支援者にも入ってもらいました。それでもとても緊張しました。全員面接するのに3日間かかりました。とても疲れました。去年は、失敗してもいいから当事者だけでやってみることにしました。質問をたくさんしました。職員は給料を幾らもらっているのか、働いていて楽しいときはどんなときか、しんどいときはどんなときか、当事者が理事長になることをどう思うか、何年働くつもりかなどの質問をしました。当事者だけで面接をやってよかったです。自信ができました。ちょっとふざけて答える職員もいました。ふざけたりうそを言う職員はだめだと思います。若い職員の中には、ひどい施設として問題になっている「カリタスの家」のことを知らない人もいました。もっと勉強してもらわないとだめだと思います。

次に、職員の勉強会の講師をした話をします。「職員に言いたいこと」という話をしました。僕は、こんな厳しいことを言ったら「やめる」と言う職員がいるかもしれないと思いました。

職員44人の前に立つと、ものすごく緊張して怖かったです。でも、話をしようと思ったことを言いました。「職員は偉そうにするな」「すぐに『待って』と言う。どのぐらい待たなあかんのか、不安になる」「きつい言い方や大きな声は嫌です」「職員は当事者の話を聞いてほしい」「『パンジー』の車がぼこぼこになっている。車の中もきれいにしてほしい。荒い運転はやめてほしい」「職員は会議が多すぎる」「当事者が知らないで職員だけが知っているのはおかしい」「困ったときや新しいことをするときは、『かえる会』で決めます」「今の『パンジー』では、まだまだ当事者の力が小さくて、職員の力が大きい」「当事者の力が大きくなるように、職員に助けてほしいです。いっぱいきついことを言ったけど乗り越えてほしい」と言いました。職員は真剣に聞いてくれました。僕とCさんと、講師料を3万円もらいました。

最後に、これから何をしたいのか話をします。新しい人にも「かえる会」の活動を覚えてほしいです。みんなすごく力を持っています。理事はずっと同じ人がやらなくても、交代したらいいと思います。僕とCさんは理事会に出ています。当事者の理事を、あと2人ぐらい増やしたほうがいいと思います。将来は当事者が理事長になると思っています。でも、赤字にならないようにうまくやれるかどうか心配です。

最後に僕の話を少しだけします。僕は1年前に結婚しました。(拍手)新婚旅行は鳥羽に行きました。台風に遭って帰ってこれませんでした。同じ旅館にもう1日泊まりました。忘れられない思い出になりました。僕の夢は、よくはやる場所で喫茶店をすることです。ぎょうさんお客さんが来る、はやる店にしたいです。家賃が高いからもうけるのは大変だと思います。でも、商売が好きだからやってみたいです。店長をしてみたいと思っています。皆さん、僕の話がわかってくれましたか。(拍手)これで僕の話が終わります。ありがとうございました。(拍手)

A Bさん、どうもありがとうございました。とてもすばらしい話をしてくれました。まいどおおきに。(笑)

スウェーデン、オランダ、日本の「かえる会」と三つの話を聞きましたが、どうでしたか。それぞれの活動の話が聞けて、私は感動しました。とてもハッピーな気分になりました。(拍手)

今から12時まで質問の時間です。3人に質問はありますか。質問がある人は手を挙げてください。はい、そこのベッカムに似ているDさん、どうぞ。(笑)

D よく言うわ。参ったよ。おれ、言おうと思ったのに変なこと言って。(笑)皆さん、こんにちは。僕は大阪の「パンジー」のDです。よろしくお願いします。外人の人、わかるかな、名前。真ん中はわかってるんだけど、一番最後、全然何だかわかんなくなっちゃって。最後わかんなくなっただけです。真ん中はわかってるんですよ。何だか最後がわかんなくなっただけ。あれは何？ 何ていう人？ あの人、一番向こうの。僕も子どものころ、僕は学校でもおくれちゃって、学校でも何にもできないで……何ていうかな……、ちょっとごめんなさい、変なこと言っちゃって。学校に1年おくれて2年から学校に行って、2年生から6年生まで行って、それでも学校で何にもできないで、ぶらぶら遊んでいて、それで何にもできないで……。それでとうとう、高校へ行っても1年しか行かなくて、もうやめちゃって、もうずっとあれだね……。今、言ったのはどうですか。感想何かありますか。僕の言っていることわかりましたか。

マーリン ちょっと今、英語の単語を探しているところなんです、なかなか思いつかない。でも、全部学校に通いきれなかったというのは本当に大変だったと思います。スウェーデンでは義務教育、15歳まではどんな人もみんなが学校に行くということになってるんですよね。本

当に大変だったろうとお察しいたします。(拍手)

D ありがとうございます。どうもすみませんでした。

マーリン 例え障害を持っても、やはりみんなと同じように学校に行って、それを終わらせようとするのは大事なことだと思います。それができなかったというのは、本当に大変だったと思いますし、ご苦労だったと思います。

D はい、どうもありがとうございました。(拍手)

A ほかに質問は。

ヴィレム 世界じゅうの人が、知的障害を持っている人の学習の仕方というものをちゃんと理解しなければいけないと思います。知的障害を持っている人でも学習ができます。でも、違いというのはあるわけで、知的障害者独特の違いというものを世界じゅうの人に理解してもらいたいと思います。私は今、LFBという団体に属して、そこで仕事をするようになってからも学習を続けています。大人になってからも勉強ができるということが、日本の人にとっても大切なことだと思います。(拍手)

D どうもありがとうございました。

A ありがとうございます。はい、クリントンに似ているEさん、どうぞ。

E Eです。国際フォーラムにB君のことが載っていないんですが……。この紙。私の発言は短いので、もう一つ何か質問するね。(東京に)泊まっている途中で……。ぎょうさん、泊まってるやんか。それで、熱出たら私を連れてきた人に責任持って、デコさわってもらっていいですか。

マーリン ちょっと意味がわからなかったんですけども、熱をはかってもらいたいんですか。(笑)まじめに答えますと、もちろん本当に熱が出たら大変ですから、そのときは絶対ちゃんと熱をはかってもらってください。

A ありがとうございます。

はい。藤井フミヤさんに似ているFさん、どうぞ。

F 給料は、なんぼもらっているんですか。

マーリン グルンデン協会ですけれども、ここでは給料という呼び方ではなくて、年金という呼び方をしています。ですから16歳以上になりますと、障害者年金という形で知的障害を持った人にお金を与えられますが、先ほどから「本当の仕事」が欲しいと、エンパワメントをやることによって「本当の仕事」につきたいと言っていたのは、そういう年金に頼るのではなくて、自分がした仕事に対する報酬として、自分が仕事をやったことに対してお給料としてお金が払ってもらえるような、そういう仕事があったという意味だったと思います。

す。今は年金という形でお金をもらっています。

ヴィレム オランダの場合は、デイケアセンターやワークショップで働いている人に対して、保証金みたいな形でお金が払われています。1 カ月 600 ユーロから 1,500 ユーロぐらいですね

B それでは、僕からちょっと答えさせていただきます。「ピープルファースト」の事務所で働いているんだけど、それはホームヘルパーとして使っています。2 時間半かな、2 人使っています。2 人かな。4 時間だな。給料は、事務所で 5,500 円と、あと年金と生活保護をもらって暮らしています。それで僕の仕事を頑張っています。

A あと 1 人、質問。はい、グレーの服の方、どうぞ。

G 最初から話を聞いていて、ちょっと理解できることがあって、自分も親が、小さいときに頭がおかしくなって自殺しちゃって、自分はおばあちゃんとおじいちゃんに引き取られました。小学校 3 年まで普通学級にいたけれど、どうも勉強というかそういうのがおくれたので、小学校 4 年から特殊学級に通っていました。だから、さっきの話じゃないんだけど、何ていうか、普通にやっていければいい。だから、全然困るというかそういうのがなくて。生かされてるって感じていたんですけど、7 年前にピープルファーストに出会って、こんなことしてはいけないと思い、今では町田で本人の会をつくり、少しでも仲間の悩みとかをわかっていけるように頑張っています。(拍手)

A これで質問を終わります。マーリンさん、ヴィレムさん、B さん、ありがとうございました。(拍手) 最後に一言ずつお願いします。

マーリン どうもありがとうございました。私、今日ここにこうして来られたことをとても誇りに思っています。皆さんも、一生懸命私たちの話を聞いてくださってありがとうございました。元気の出るアイデアをいろいろと出し合って交流できたと思います。それから、私の E-mail アドレスを先ほどお知らせしましたが、そこにアクセスしてくれば、私と今後も引き続き交流ができますので、以後もよろしくお願いいたします。本当にありがとうございました。すばらしいパーソナリティの皆さんにお目にかかることができました。(拍手)

ヴィレム エンパワメントということについて一言お話ししたいと思います。支援者の皆さんと政府に対して、それから自分自身に対して、自分が何をやりたいのか、自分がどういうことを決めたいのかということをしつかりと主張する、それこそがエンパワメントだと思います。今日は皆さん、おいでいただいてどうもありがとうございました。(拍手)

A B さん。

B 僕の話はどうでしたか。「かえる会」の話。聞いてくれました？ これからずっと何年も、こういうふうに行っていきたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

A これで午前の部を終わります。午後は、どうしたら元気になるかを、皆さんに考えて意見を発表してもらいます。それでは、昼御飯を食べてから 1 時にお会いしましょう。ありがと

うございました。(拍手)

●午後の部

A 前半に聞いたスウェーデン、オランダ、「かえる会」の話を参考に、どうしたら元気が出るか意見を出し合いましょう。スウェーデンのマーリンさんには、グルンデン協会の活動のこと、家族のこと、そして働いていて給料がもらえるようにしたいという話を、オランダのヴィレムさんには、施設にいたときは操り人形のように、今は自分で決めて生活しているという話を、「かえる会」のBさんには、職員に面接をしていること、「ザ☆ハート」という当事者の事務所をつくったという話をしてもらいました。会場にいる皆さんは、地元に戻ってどうしたら元気が出るようになると思いますか。意見のある方は手を挙げて言ってください。どうしたらいいか考えてください。支援者の方も考えてください。はい、男前のDさん、どうぞ。立ってください。

D 皆さん、大阪は大阪で、外人は外人で固まって、みんなで話をちゃんと言って、どんどん言ってゆっくりして……。みんなで外人だの大阪だの、二つに分かれて話そう。みんなで固まって話をすれば元気になって、もりもり元気で、負けないように頑張れると思います。(拍手)以上。

A ありがとうございます。笑顔がすてきなHさん、どうぞ。

H 私が元気が出るのは、「パンジー2」で朝の会をしているときに、「パンジー2」のみんなが話を聞いてくれたら元気が出ます。(拍手)

A キムタク似のFさん、どうぞ。

F 行政が、ガイドヘルパーとかホームヘルパーとか、ちゃんと使えるようにしてほしい。そうでないと、みんな出て行かれないから元気になるれないと思うから、みんなで頑張りましょう。(拍手)

A ありがとうございます。男前のIさん、どうぞ。立ってください。

I 僕は「パンジー」の「織田裕二」です。(拍手)入所施設から出てグループホームで生活できてよかったです。入所施設では時間が決められて、9時に電気を消され、外にも出られませんでした。お金も持たせてもらえませんでした。今は液晶テレビを買ってグループホームで見えています。これから、もし事件があったら、レインボーブリッジに行って封鎖してきます。(一同笑い)(拍手)

A ありがとうございます。あした新潟に行く男前のBさん、どうぞ。

B そんなの関係あらへんで。(笑)東大阪市でグループホームにおるんだけど、みんなと仲間同士で焼肉大会をやりたいです。それが元気になります。皆さん協力して、友達だと思って元気よく迎えることになります。すばらしいねえ。(拍手)

A ほかにありませんか。はい、あした東京でナンパするJさん、どうぞ。

J だれがナンパするって？ その通り。僕は、支援者は明るくなったら元気になれると思います。(拍手)

A ありがとうございます。ほかにありませんか。男前のヴィレムさん、どうぞ。

ヴィレム 差別がなくなって、生活の質がみんな同じように高くなって、そしてみんなと同じような生活ができれば、とってもハッピーになります。(拍手)

A ありがとうございます。ほかにありませんか。マーリンさん、どうぞ。

マーリン (静かに聞いて下さい！) 私が忘れてはならないと思うのは、知的障害者というのは、とっても大事な社会のメンバーです。大事な人たちなんだということです。障害があつて、いろいろ不利な面はありますけれども、でも、私たちもちゃんと自立しなければいけない。これがとっても大事なことだと思います。それができればハッピーだと思います。(拍手)

A ありがとうございます。どうぞ。

K 今、マーリンさんは自分が話しているときに皆さんがお話していたので、「静かに聞いて！」とおっしゃったんですよ。だから聞いてあげてください。やっぱり人のお話を聞くのが、元気が出ることの一つにもなるんじゃないかなと私は思います。やっぱり皆さんも、自分の話を人に聞いてほしいわけだから、皆さんもやっぱり、英語を聞いているときはちょっとわかりにくいかもしれないけれども、聞いてあげてください。お願いします。

A ありがとうございます。ほかにありませんか。はい、男前のLさん、どうぞ。

L やっぱりビールを飲んで家で寝てるのが、一番楽しいです。

A ありがとうございます。はい、「織田裕二」さん、どうぞ。

I 湾岸署の「青島」です。「パンジー」でマフィンをつくっているときが楽しいです。そして、たくさん売れたときが幸せです。(拍手)

A ありがとうございます。はい、Dさん、どうぞ。

D 外人の人、知ってるかなと思って。覚えてください。「パンジー」に、後でまた来てください。どういふのでもいいから、1回でもいつでもいいから来てください。泊まってください。「パンジー」は、おいしいパンだの、あんパンだの食パンだのいろいろありますから、今、ちょうどチョコレート売ってます。ポテトも売ってますから。外人の人、チョコレートだの、あんパンだの食パンだのいろいろ買ってください。おいしいと思いますから。で、1回、何とか泊まってください。お願いします。以上。(拍手)

A ありがとうございました。ほかにありませんか。どうぞ。

M 町田市では2年に1度コンサートをやったりしています。ミュージカルや歌を歌ったりしているときや、あとおなべの会とか、あと、ミュージカルのサークルに参加させてもらっているときに元気になれると思います。いろいろな人とコミュニケーションが取れるからです。
(拍手)

A ありがとうございました。そろそろ時間が来ましたので、あと1人で最後にしたいと思います。手を挙げてください。はい、「織田裕二」さん、どうぞ。

I 僕は入所施設にいたんだけど、入所施設の職員はとても厳しくて嫌でした。今はグループホームの「パンジー」に来て、「てくてく」でいつも介護者といろんな冗談を言ったりして遊んでいます。それが一番楽しいです。(拍手)

A ありがとうございました。たくさんの意見を出してくれてありがとうございます。ちなみに私は、だんなさんに優しく「おいで」と言われたとき、胸がキュンとなって元気が出ます。
(拍手)

それでは、最後はみんなで元気が出る話をして大いに盛り上がりましょう。「パンジー」のNさん、「パンジー2」のOさん、よろしくお願いします。(拍手)

O ハロー。(笑)大阪から来ましたOです。(拍手) 私は、「たんぼぼグループホーム」に住んでいます。元気が出る話は大好きです。意見を言う人は、手を挙げて言ってほしい。意見を言った人には大きな拍手をしてほしい。(拍手) みんなわかりましたか。わかった人は拍手。(拍手) 次は、Nくんの自己紹介です。どうぞよろしくお願いします。大きな声で言ってや。聞こえへんで、小さな声じゃ。

N (笑)ハロー。大阪から来たNです。(拍手) 最近、1人暮らしを始めました。マンションで気楽に暮らしています。買い物は介護者と一緒に行っています。メニューは自分で決めています。好きなことは、音楽を集めることです。わかった人は拍手してほしいです。(拍手)

O 前を見てください。まずNさんが言います。みんなも大きな声で言ってください。

N アイムハッピー。

会場 アイムハッピー。

N みんなに優しい。

会場 みんなに優しい。

N 何でもできる。

会場 何でもできる

N 自分で決める。

会場 自分で決める。

N たたかっている。

会場 たたかっている。

N 私はカッコいい。

会場 私はカッコいい。(笑)

O 拍手。(拍手) きょうは「アイムハッピー」と、「自分で決める」をします。みんないっぱい意見を言ってください。お願いします。せーの。せーの、元気が出る話を始めるぞ。(拍手)

N アイムハッピー。

会場 アイムハッピー。

N アイムハッピー。

会場 アイムハッピー。

N 拍手。(拍手) しんどくても頑張ってる 때가ハッピーです。(拍手) みんなはどんなときがハッピーですか、教えてください。

P 私は、阪神タイガースが勝った 때가ハッピーです。(拍手)

O どんどん言ってください。

F マフィンをつくるとか、いろんな人に支えてもらって、ここまでやっていけていることがハッピーです。(拍手)

O はい、どうぞ。

Q 私は、「福山雅治」と「佐藤寛之」を見たら、アイムハッピーです。(拍手)

O きれいな服、着ている人。

R 家の祭りが一番楽しいです。みこしをやっているのが一番楽しいです。(拍手)

O はい、どうぞ。立って言ってください。みんなに聞こえるように大きな声で言っ

さい。

D マイクが壊れるので、高くします。僕が一番楽しいのは、パン屋さんでパンをこしらえて配達に行ったり、……行かれないけれども、山の学校に行ったりいろいろ行くので、それが楽しいと思います。これから寒くなりますから頑張ってください。外人の人、頑張ってください。いえーい。終わり。以上。(拍手)

O 言いたいことないですか。Sさんは？ はい、どうぞ。Sさん、話したいことはありませんか。Sさん、どうぞ。

S 販売に行っているときです。(拍手)

O ありがとうございます。ほかにありませんか。

N ヴィレムさん、どうぞ。

ヴィレム 自由、それが私を一番幸せにします。自由なとき、とってもハッピーです。(拍手)

O ありがとうございます。

ヴィレム それから、支援者の方からとってもいいサポートを得られたときも、とってもハッピーです。(拍手)

O はい、Bさん、どうぞ。

B 私はスナック行くのが楽しいです。なぜかというと、給料をもらってスーッと走って、自転車もらってハッピーです。(拍手) 自転車を買ってハッピーです。

O はい、立って言ってよ。

L 家で寝ているのが一番ハッピーです。

O 何？ 何言うてるの？

L 家で寝ているのが一番ハッピーです。

O 何や、それ。(笑) 寝てばっかしか。(笑) 向こうの人、手を挙げて意見言ってください。お願いします。

T みんなで一緒に仕事をしているときと、配達に行っているときがハッピーです。(拍手)

O ありがとうございます。はい。Eくんですか、手を挙げています。

E セックスしているとき。

O 何？ 何を言ってるかさっぱりわからんもん。

E セールスの人なんかに、「お母さんいる？」って言ってくれたときです。(拍手)

N ヒントを言いました後で。(笑)

O 意見は？

N 僕の意見は、自分で決めるとハッピーな気持ちになるんです。しんどくてもがんばっているときハッピーです。(拍手) 次はOさんです。

O 自分で決める。

会場 自分で決める。

O 自分で決める。

会場 自分で決める。

O 自分で決めたことは何ですか。手を挙げて言ってください。自分で決めたこと。

P 「パンジー」のPといますが、私は服を買っているときがかっこいいです。(拍手)

O はい、どうぞ。何ですか。

U 自分で決めたことやろ。

O うん。

U この服は自分で決めました。(拍手)

O ほかにありませんか。はい、Dさん。マイクをお願いします。

D 僕のかっこいいのは、今日はかっこいいのがないのでごめんなさい。本当は……。今日は、かっこいいのを着てくるのを忘れました。今度行くのは、かっこいいの、N君と同じかっこいいのを着ていきますから、今日は許してください。本当は、N君とかっこいいのが似ているのを着てくるのを忘れました。それでも、これからN君と一緒に、Oちゃんとデートします。

O かっこいいやんかなあ。

D すいませんでした。今日は外人の人、すいませんでした。すいませんでした。これで今日は終わります。

O かつこいいと思う人。はい。みんなかつこいいって言ってくれてるで、Dさん。なあ。どうぞ。何を言うの？

E 私は、だれと結婚するかは無論自分で決めれるんやろ。だから、結婚でいいか。

O 結婚ね。私は知らない。(拍手) ほかにありませんか。はい、どうぞ。

I Iです。僕は自分で決めたことは、液晶テレビのシャープのアクオスの吉永早百合が宣伝しているテレビと、DVDの三菱のやつと、それから電化製品は部屋にたくさん集まっています。自分で決めたものは自分で買いたいと思っています。(拍手)

O どうぞ。

V 私は自分で決めたことは、2001 年に行ったときが自分で決めたということです。2001 年に船で一周をしてきたときは。そうそう、世界一周のことと、それともう一個決めるのは、毎週金曜日に、ここに今、Wさん、横に座っているおしゃれのWさんと一緒に買い物行くのが。Wちゃんと僕と2人で、毎週金曜日に買い物に行くのが。決めたことは世界一周に行ったときと、毎週金曜日に行っていることが。だから自分で決めるのは、前、一周行ったときと、あとWさんと僕と行ったの、買い物を決めたことが楽しいです。(拍手)

O あと1人、手を挙げてない人。はい、何ですか。Fさん。

F 私は髪の毛、染めたので楽しいです。僕は甲子園に行って野球を見に行ったのが楽しいです。(拍手)

O 私の意見を言います。私はきのう東京へ行くのに、ファッションショーで着ていた服を着てきました。(拍手) みんな、元気が出ましたか。(拍手)

N・O これで元気が出る話を終わります。ありがとうございました。(拍手)

A ありがとうございました。とっても盛り上がりましたね。分科会の全ての内容が終わりました。皆さんもまた地元に戻って、今日話したことを仲間に教えてあげてください。そしてスウェーデン、オランダに負けず、日本の当事者ももっともっと元気になっていきましょう。これで分科会「『元気がでる』話をしよう!」を終わります。司会をしました、元モー娘のAでした。来年ソロデビューします。皆さん、買ってください。ありがとうございました。(拍手)



分科会 2

「地域で自立して生きていくために」

講師・助言者

ジェーン・ハルビ

(スウェーデン・グルンデン協会)

ウィリアム・ヴェステヴェル

(オランダ・LFB)

(支援者：アンークリスティン・ハルト、
スウェーデン・グルンデン協会)

(本人たちの分科会・埼玉「わらじの会」を中心に企画)

●午前の部

A 司会をやりますAと……

B 「わらじの会」のBと申します。朝早い中、お疲れさまです。

A これから、第2分科会を始めさせていただきます。今日は遠いところからお越しいただきありがとうございました。

B 私たちは、埼玉にあります「わらじの会」というところのものです。本日の進行を務めさせていただきます。よろしくお願いします。今日のだいたいの流れですが、まずお迎えした方々からの話が午前中にあります。3グループあります。オランダの方とスウェーデンの方と、あと私たちの活動を紹介して、午後から地域でのプライバシーの問題といったあたりをディスカッションしていけたらいいなと思っています。時間毎に質問などをとりますので、会場の方も御遠慮なさらず、ご質問下さい。全員とまではいかないとは思いますが、ざっくばらんに話していけたらいいなと思っております。どうぞよろしくお願いします。

まずは、今日のはるばるお越しになっていただいている真ん中のピンクのニットを着ておられるジェーン・ハルビさん。スウェーデンのグルンデン協会からいらっしゃっています。ではまず、ジェーンさんの発表からお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

ジェーン ジェーン・ハルビと申します。スウェーデンからまいりました。グルンデン協会に働いています。協会ではテレビ番組、そしてラジオ番組をつくっています。雑誌を発行していますし、Web ページもつくっています。また、幾つかのプロジェクトを行っています。一つのプロジェクは恋愛、そしてセックスについて考えています。これは非常に重要な問題だと思います。そしてこの愛情、恋愛とセックスにつきましては映画もつくりました。養護学校に通っていますと、そのような重要なことについて教わる機会はありません、また、体がどのように動くのか、働くのかというようなことも知らされないことが多いです。

私はグルンデン協会のメンバーでありますし、また理事でもあります。理事会に所属しています。この協会におきましては、みずからの権利のためにいろいろと闘っています。障害があっても、私たちは一人ひとりみずからの意思、心というものを持っています。私たちは、何も異分子であるわけではありません。危険ではないのです。私たちは1人の人間なのです。

私は理事会の一員として活動をしています。これはとてもいいことだと思っています。というのは、私は理事会においていろいろな決断を下すこともできますし、発言をすることもできるからです。理事会におきましては、自分たちが何を求めているかということを明らかにして闘っています。力を合わせれば、私たちは強くなることができます。

今私は、自分の仕事に非常にやりがいを感じてとても幸せです。とてもすばらしい仕事仲間がいます。彼らは私と同じ立場にいます。そして、私たちは自らのことを見てほしい、私たちの意見を聞いてほしい、そしてまた敬意を払ってほしいと思っております。そのため、私たちは、たくさんの情報を伝えようといろいろな活動を行っています。グルンデンはそういう意味で、非常に活動的な団体です。私たちは自分たちの権利のために闘っているのです。

自分の人生ですから、人生を自分で決めていくということこそが大切だと思います。そして、何が正しいのか、何が間違っていると思うのか、自分の意見というものも表明していきたい、声に出していきたいと思っております。そして、何か手助けが必要なきには、声を出して頼んでいきたいと思っております。そして、私たちの権利を獲得していくために闘っていこうと思

っています。そのような形で、私たちは自分たちのことを理解してくれる人の輪というものを広げていきたいと考えています。

障害を持っていると、行政の人たちと衝突することがあります。ときには支援をしてもらうこともあります。しかしときには、支援を強制されることもあります。そんな時には強制されたくないと思います。自分でやりたいと思うこともあるわけですから。

私たちが願っているのは、本当に普通の生活を送りたいということです。仕事をする、学校に行く、生活をする、そしてお金を稼いで自分の家庭をつくる、自分たちの子どもの世話をする、そういうことを願っています。そう願っているのに、自分というのを見てももらえないのが私の直面している厳しい現実です。例えば行政の人たちのものの見方は、私個人を見るのではなくて、知的障害を持っている人、というふうにししか見てくれません。わかってもらおうとして、私は本当に声を大にして叫びますが、それは無視されてしまうことがあるわけです。私を知ろうとしない。私を知ろうとしないで支援をしてくれても、それは私にとっては状況を悪くするばかりです。

私はそのような状況の中で、自分を好きになることができないときもありました。自分を信じていることができないときもありました。自分のことを信じないで、他の人ばかりに頼るということもありました。でも、私は、何とかうまく克服してきました。今は、夫と息子と一緒に暮らしています。ただし生活は楽ではありません。いろいろなことが私の肩にかかっています。そして、周りの期待というものも大きいのです。そうした状況の中で頑張っている生きていかなくてはなりません。頑張っているしかなかったら、自分の価値がないように思われてしまうかもしれないからです。ごみのように捨てられてしまうかもしれないという恐れも持っています。

しかし、何かをしたいと思ったら、何かを望みたいと思ったら、自分に厳しく、強く生きていかなくてはなりません。そのような形で頑張って、努力して日々を送っていくのだと思います。私は悲しみも感じますし、喜びも感じますし、ときには怒り狂うこともあります。そして、恐ろしくて震えることもあります。これから自分に何が起ころう、自分の周りの人はどうなるんだろうということをよく考えます。そのように思いますと、人生はバラ色ばかりではなく、厳しいこともあると考えています。

今、私は自分が何をしたいかをわかっていますし、それを実行することに幸せを感じています。例えば買い物だって、行って自分で好きなものを買います。そして、好きな時間に起きるということを決めることもできます。または、外から帰ってきたら自分の好きな部屋の隅に座ったり、自分の部屋に閉じこもってしまうこともできます。つまり、何をしたいのか、何をするのかということを、自分で決定していくことが重要なのです。だれか他の人に押しつけられるということではいけないと思います。結婚はしていますけれども、私は自由を満喫しています。家族で買い物にも行きます。家具を買ったり、部屋の壁紙をどういうものにするかも自分たちで決めます。そういうところに自由を感じるのです。ときには1日じゅう寝巻きのままごろごろしていることもあります。自分が好きなときに起きる、そして好きなときに街に遊びに出かける、または1日じゅううちにいるということも選んでいくことができます。または、郵便受けに自分あての手紙を見つけるのも喜びの一つです。そのような日々の生活の中で、私は鳥のように自由を感じています。

私はグループホームで生活しようとは思いません。自分の足で立っていくことができ、自分の身の周りのことをすることができれば、グループホームは私には必要ないと思います。もちろん、いろいろな支援は必要に応じて受けていきます。ただ、支援者に、私の人生を左右してもらいたくはありません。私は何をしなくてはいけないか、または、私はどういうふうを考えなくてはいけないかということを目指されたくありません。人にそのようなことを指図される

のは、地獄のようなものだと思います。私たちは、一人ひとり大切な存在です。私たち一人ひとりが母親から生まれてきた。その誕生の瞬間から暖かさ、安心、愛を受けて育ってきたんです。一人ひとりが決定する力を持っているはずです。障害を持っているからといって、別の人がある人に対していろいろ判断をしてはいけないと思いますし、そんな権利はないと思います。みんな同じなんだと私は考えます。

自分が望んでいないのに、ほかの人から「何かをしよう」と強制されることがあります。いろいろな機構、組織、法律、ルールというものが、自分の代わりに何かを決めようとすることがあります。でも、それは人間の生活ではありません。それでは、かごの中、おりの中に閉じ込められた動物の生活と同じです。だからこそ、入所施設というものは閉鎖していかなくてはいいけない、解体していかなくてはいいけないと思います。私たち一人ひとりがユニークでかけがえのない人間なんです。小さなアリでさえ、強制されて何か施設、または巣の中に閉じ込められるということを、よいとは思わないでしょう。それだからこそ、私たちは施設を閉鎖し解体し、押しつぶしてしまうべきだと考えています。

私たちは、自分の人生をつくりあげていかなくてはいいけません。古い、悪しき慣習というものも壊していかなくてはいいけません。そのような昔のやり方、悪しき慣習というものを壊していくために、おのを使うこともあるかもしれない、道具を使うことがあるかもしれません。しかし何よりも一人ひとりが口を開き、声を上げていかなくてはいいけないと思っております。自分たちの生活、人生のために私たちは闘っていかなくてはいいけません。ほかの人が私の代わりに何らかの決定をするということはあってはいけないのです。

皆様、どうもありがとうございました。是非とも一緒に闘っていきましょう。(拍手)

A ジェーンさん、ありがとうございました。何か、質問等ありますか。

B もし何か質問がありましたら、是非とも。

C Cさんは、今日、Dさんと一緒に、「ピープルファースト」で会議をやるCです。よろしくお願いします。

B 今のは、あいさつでよかったですか。

C はい。

B はい、すみません。ありがとうございます。

E 自己紹介からやっていったほうがいいんでしょうか。今日横浜から来ましたEです。今日はありがとうございました。私の質問は、(スウェーデンやオランダでは) 障害年金とかはあるんでしょうか？日本は障害のある方は障害年金というのがありますよね。逆にあるのかなあということ、収入はどうなっているのか聞いてほしいです。

ジェーン 生活の資金ですけれども、おっしゃるような障害者年金を受けています。それと仕事もしていますので、そちらのほうから、わずかですけれどもお給料もいただいています。年金の額ですけれども、1万2千クロネで、ユーロに換算しますと、1,200 ユーロ。ですから16～17万円ぐらいですか、それぐらいになるかと思います。

B 結構、会場からも「おー」という声が出ましたけれども。ほかに質問ある方、いらっしゃいますか。あとおひとりということで、よろしいでしょうか。午後からお話していただける時間を取りますので。そちらの方、お願いします。お名前とどちらから来られたかと言って下さい。

F 名前はFといいます。よろしくお願いします。(手話を通訳)

B (通訳内容) 今、一番やりたいことは結婚ですが、相手がなかなか見つからないのです。それで、お相手とはどのように知り合って結婚することになったかを教えてほしいのです。

ジェーン 実は結婚は2回しています。1回目の夫は、とっても退屈な人だったので別れちゃいました。今の人はとってもすてきな人です。仕事場で出会いました。さっきも紹介の中で言ったんですけども、協会では映画をつくっています。恋愛ですとか結婚ですとかセックスについての映画をつくっておりまして、2回ほど映画フェスティバルにも出しています。

B 参考になりましたでしょうか。参考になったようです。ありがとうございます。では、午後からまた、ゆっくりお話をしたいと思います。

それでは次に、オランダのオンダリングシュタルク連盟でよろしいのでしょうか。ちょっと発音がうまいかもしれませんが、ウィリアム・ヴェステヴェルさんからお話しいただきたいと思います。よろしくお願いします。

ウィリアム 今日は分科会2に参加させていただきまして、また、皆様にお目にかかれてうれしく思っています。私はこれから、地域社会で生きる、ということについてお話をさせていただきます。今、まだホッチキスでとめていない資料を先ほど皆様にお配りしました。メモを書いていたところがありますので、何か参考になる話が聞けましたら、是非ともそちらにメモなど書いてください。そろそろトイレに行きたいという事情もありまして、私の説明は短くなるかもしれません。(冗談ですが)。(笑)

まず自己紹介をさせていただきます。ウィリアム・ヴェステヴェルといいます。結婚しておりまして、妻の名前がイルマ、そして2人の息子がいます。10歳のユーリと7歳のブライアンです。私は知的障害を持っていますが、オランダのオンダリングシュタルク連盟の代表(所長)をしております。また「ピープルファースト」、まず第一に人間だ、という名前のグループを率いています。

「地域で生きる」という話ですが、私自身の経験をお話ししたいと思います。どのような家で育ったのか、グループホームの経験について、また、アパート生活をしたことについて、そして、今の家族の生活について段階を追って紹介します。

私は両親に育ててもらいました。それはとってもラッキーなことだったと思います。というのは、ときには私のような立場にある子どもたちが、家族から見捨てられてしまっただけで育つというようなことが多々ありますので。生まれたのは別のところで、それから何度か引っ越しをしました。17歳で独立をするまで、両親とともに過ごしました。

17歳のときに母が死にました。家族とちょっともめたというようなこともありましたので、17歳で独立してグループホームで生活しようと決心しました。17歳で決断したときには、グループホーム、で自立して生活していくというのは悪くないアイデアだなと自分では思っていま

した。ただしそのグループホーム、24 人の人が共同生活をするんですが、そこに入りますと、自分の決断は誤っていたかなと思うようになりました。私の人生の最初の間違いというわけではないですし、これで最後の間違いだというわけでもないのですが。でも、やっぱりちょっと失敗したかなと思いました。施設には、プライバシーがなかったからです。施設では、私という人間を真剣に受けとめてくれなかったというか、むしろ軽んじられたんですね。つまり、自分の人生なのにいろいろなことを自分ではなくて他の人が決めていきました。そのように決められた生活というのは、非常に暗い、暗たんたるものでした。そのグループホームもその周りに建っていた幾つかの建物も今は壊されており、グループホームに住んでいた仲間も別のところに移っております。高齢になった人が住んでいるだけで、グループホームの機能はもう果たさなくなっています。

グループホームで生活したのはわずか6 カ月です。6 カ月過ぎたところで、自分で自立して生活するしかない決めて、ホームを出ました。アパートを借りて自立しました。支援スタッフがついてくれて生活をスタートさせました。グループホームとは違って、プライバシーは守られ、より自由な生活を楽しめるだろうと思ったのですが、これがまた違いました。支援スタッフが私を真剣に受けとめてくれなかったからです。サポートスタッフの派遣を要請したときに、「男性がいい」と私は言ったのですが、担当者からは女性を派遣されてしまいましたし、とにかく、「これをしなさい」「あれをしなさい」「あなたのためにこうやったほうがいいと思う」という形で、すべて指図されてしまいました。

この支援スタッフの女性ですが、「はい、今何時になったからお洗濯をしましょう」「そろそろトイレに行ったほうがいいんじゃない？」と、ありとあらゆる生活の局面で口を出してきました。自分が何をしなければいけないのか、それもまた、いつ、何時にしなければいけないかということまで指図をしてきました。プライバシーが欲しくてアパートに行ったのに、タンスの中はのぞかれるし、個室にも入ってきて、私がやってほしくないようなことをやってくれました。さらにはお金の管理までしようとしてしました。幾らぐらいのお金があるのか、こういうふうに使ったほうがいいというようなことまで言うてきました。つまり、自分の望まないようなことばかりをされました。つまり、私の言うことを全然聞いてくれなかったのです。

人生山あり谷ありと言いますけれども、何かこう、つらくて悲しくて嫌なことばかりが多かったように思っております。その中で私も荒れてちょっとぐれてしましまして、いろいろとお金の問題も起こしてしまいました。部屋代も払えなくなってしまうました。ガス、光熱費も支払いが滞ってしまい、最終的にこのアパートから追い出されてしまいました。そういうときに、幼なじみのイルマと再会しました。彼女とは8歳のころから知り合っていましたが、長いこと会っていませんでした。しかし、再会後、縁があって一緒に住むようになりました。彼女と一緒に生活をするようになって初めて、自分が自分である、そしてまた1人の人間として周りの人に敬意を持って接してもらっている、認められていると思うようになりました。一緒に1年半くらい暮らし、その後イルマと結婚しました。そしてユーリが生まれました。ユーリは男の子です。そしてブライアン、やはり男の子ですが彼も生まれました。

結婚して今は幸せに暮らしていますが、結婚当時は本当に大変で、すべてが望ましくない方向に動いていました。すべてが何かおかしい形になってしましまして、また失敗してしまったかなといろいろと後悔などもしました。しかし、時間がありませんので、今、こと細かくは説明いたしません。そういう大変な状況の中で結婚式当日を迎えました。いろいろなごたごたがありましたが、今となっては非常にいい決断をしたな、イルマと結婚してよかったなと思っております。今回は私一人で日本を訪問しておりますが、日本に滞在している間も、家族のことが懐かしくてたまりません。

今住んでいる家は、私の給料をためて買ったものです。非常にいい支援者を得て、その支援のもとに幸せに暮らしています。自分のプライバシーを守って、楽しみながら生活していくことができるようになりました。

最後のメッセージです。多くの人が私のことを見て、障害者だと言います。しかし、私はここに集まっていらっしゃる仲間、そして、支援者の方たちに言いたいのです。障害を持っているからといって人間は人間なんだと。私は私という個人であるんだということ、このことを声を大にして申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

A ウイリアムさんありがとうございました。今のウイリアムさんのお話に対して質問等ありますか。どうぞ。

F 私は、今日東京から来ましたFといいます。私も今、実はグループホームで生活をしています。私も、何かいろいろとそういう世話をしてくれる人に、言われなくていいことまでいろいろと言われてしまっているんですが、今のお話で、やっぱりみんな一緒だなあと思っていたんですね。だから自立も考えてはいるんですけど、まだそこまではいいいていません。皆さんの話をちょっと聞きながら勉強したいと思っています。

ウイリアム どうもありがとうございました。

A もうおひとり、どうですか。

G 川崎から来ましたGと申します。自分もグループホームで、現在5名ほどの人と一緒に生活しています。プライバシーのことで、ウイリアムさんがさっき言っていましたけれども、私は一戸建てのグループホームで個室を持って生活しています。ただ嫌なのは、しゃべり相手がなくなるということです。自分はいつもしゃべっていたいなと思っているんですけど、職員さんのほうが忙しくなっていて、特に朝が一番忙しくて、自分の言いたいことが言えない感じなんです。そういうことはありますか。お願いします。

ウイリアム 私も同じような思いをしたことがあります。これはグループホームを出てからの話ですが、だれも私の話を聞いてくれない、真剣に受けとめてくれないと思い、ぐれて問題を起こしてしまったことがあります。ですから、自分がどういうことを望んでいるのか、何をしてほしいと思っているかを言ったほうがいいと思います。その上で、どのように自分が生きていきたいのかということを考えていかれるのがいいかと思います。グループホームの中でも孤独を感じることがあると思います。自立して一人で生活するということになりますと、余計一人きりになるのではないかと思われるかもしれません。でも、人間って一人で生きているわけではありません。地域の人と何らかの結びつきをつくっていくということが、大切ではないかと思います。一緒に少しずつ輪を広げることによって共に生活し、町を暮らしやすいものにしていくことができるのではないかと考えます。一人で暮らすということではなく、お互いに手を差し伸べあっていけたらいいなと思っています。

B よろしいですか。

A ありがとうございました。ここでトイレ休憩に入りますけどよろしいですか。

B 先ほど、ウィリアムさんも「膀胱の調子が……」と言われました。(笑) 5分程度、トイレ休憩を取りたいと思います。

【休 憩】

A 始めさせていただきます。私たちは「わらじの会」です。障害のある人もない人も、共に地域で活動している障害者団体です。埼玉にあります。

B すみません。司会でありながら発表者で申しわけないんですけれども、「わらじの会」というのは、後からお配りした資料の中にあります。読んでいただければだいたいわかるかなと思います。とにかく障害のある人もない人も地域で共に活動しよう、一緒に生きていこう、暮らしていこうということをしている団体です。今日は、どちらかというと、知的の方たちが結構多いフォーラムだとは思いますが、「わらじの会」の中では障害の種別によって分けられたりはしていません。身体の方も、知的の方も一緒にプログラムとか活動をやっています。今、司会をやってくれていたAさん、それから私の右隣にいるHさん、青い紙と緑の紙は彼らの説明が書いてあるんですが、今日は、時間の都合などで詳しくは説明できませんが、本当はこのAさんもHさんも、「[ぽぽんた]」というグループに参加をし、自立生活のための体験プログラムで一緒に活動しております。

A 「[ぽぽんた]」という団体の活動をしていて、バザーなどをやっています。

B 知的の方も身体の方も職員もまじって、一緒にやっています。昔は、電車に乗ったことがない人がいるので一緒に電車に乗ろうとかという形でやってきたんですが、やっているうちにだんだんとやれることがたくさんになってきて、最近は、やりがいみたいなものを探したり、お互いの生活をお互いに助け合っていこうというような形のグループになっています。

今日は、最初にAさん、そのあとHさんと、順番にお話したいと思います。説明してくれるのは、同じ「[ぽぽんた]」のメンバーのIさんと、Aさんです。

Aさんの今の生活から始めたいと思います。「Aさんは、現在、生活ホーム「オエヴィス」で、親元を離れて介助者などを使いながら暮らしています。同じ「[ぽぽんた]」のメンバーでもあるJさんが団地に引っ越した後、「オエヴィス」の103号室に入居しました。ちなみに生活ホームは、埼玉県独自の制度で、4人以上の障害がある人が一緒に暮らすことで補助金が出ます。身体、知的などの区切りはありません。「オエヴィス」は、15年ほど前、今は亡くなったK・Kさん・K・Lさんという、その土地で暮らしていた姉妹が自立生活をしてみたいと家族と話す中で、分家として建てられました。分家というのがちょっとわからない方もいらっしゃると思いますが、農家などで子どもが大きくなってきて、独り立ちしたいというときに、本家から家を分けるという形で建てられた家です。「それまでのKさんたちの生活は、農家の一室に閉じこもり、Kさん、Lさん、おばあさん、おばさんが寄り添って、昼でも雨戸を閉めて暮らすというようなものでした。Kさんたちは、「わらじの会」の人たちと活動するようになってから、外でいろいろなものを見聞し、自分たちも外で、自分たちで考えて暮らしたいと考えるようになっていきました。かつてこの地域がまだ農家ばかりだった30年以上前、KさんやLさんが子どものころは、農家の暮らしの中で芋がらをむいたりといった仕事があり、それなりに農村社会の中で暮らしていました。その後、この地域に七千世帯を数える武里団地ができるととも

に、新住人がこの地域に大量にやってきました。当時の農家の人たちは、新住人に『みっともない』と思われぬように、障害を持つ人たちを家の奥に囲い込んで外に出さないということがあったのです。そのころの日本の福祉制度は、地域で暮らしていくためのものはほとんどなく、大概の重度の障害を持つ人たちは、家の中で過ごすか、遠い郊外に建てられた大きな施設で暮らすかしかなかった。Kさん、Lさんも就学免除という制度の中で、『地域の学校に来なくても、卒業したとみなしてあげますよ』と、体良く通学を断られて、学校には行っていませんでした」。

Aさんが暮らしている地域とか、どんなところや背景で暮らしているかということがわからないと、全体として見えないかなと思うのですが、もう少し続けさせてもらいます。

「さて、Aさんは『オエヴィス』で暮らすようになってから、約10年がたとうとしています。Aさんの前の住人のJさんは、『プライバシーがドア1枚でしか守られない暮らしは窮屈だ』と、団地での一人暮らしを決意しました。Aさんは、人と話したり人と一緒にいるのがとても好きな人です。ですから、Aさんは自分の部屋よりも『オエヴィス』の共有スペースにすることが多く、また、そんな状況ですから、『オエヴィス』にぶらりとやってきた人の話し相手や、なれていないほかの入居者についての介助者に、『オエヴィス』のいろいろなことを説明してくれたりということもやってくれています。

現在、日本の若者の中には両親と一緒に暮らしている人も多くいます。そんな状況もある中で、Aさんは、1人暮らしを念頭には置いているものの、はたしてAさん流の暮らしというものがあるべきなのかは、Aさんも含めて頭を悩ましています」。「悩ましている」で話が終わってしまっただけなのではないのですが、Aさんは、こんな感じで、夏はカエルがうるさいぐらいの田舎の風景の中で暮らしています。

Aさんについて、「オエヴィス」を含めて話をしました。「オエヴィス」がどんな感じでやっているかの話をしてもらっていいですか。

A 財布の中身はゼロです。お金は1週間ごとに職員のMさんが、1カ月分のお金を全額渡しているようです。それは、買い物とかお酒を買ったりとか……

B すみません、ちょっと補足させてもらいます。僕たちはきのうから池袋に来ているんですが、きのうの夜、コンビニで何か飲み物を買って帰ろうかなんていう話をして、Aさんの財布をあけたらお金が本当に1円も入ってなくてちょっとびっくりしたんです。話を聞いていくと、どうやらお金に関してのトラブルがずっとこのところ続いていて、とりあえず試しに、「半月分を渡すから自分で好きにやってみたらどう？」という話が職員との間でされたそうです。それで、次のお金が入る日は、11月11日らしいんですけども、もう既にすべて使い切ってしまった、もう全然なくなっていたんです……。今日は御飯はいただけるみたいなので何とかなんとはいいますが、はたしてこの1円もないという状況がいいのか悪いのかはちょっとわからないんですが、、、職員とAさんの間で、他に手もなかったんだろうと思いますが、ちょっと昨日びっくりしました。これはたぶん、本人の自己決定とかプライバシーの問題とかいろいろなことにかかわるだろうけど、話し合いの内容にも関係してくると思いますので、今話をさせてもらいました。Aさんの話は、また後で話ができると思いますので、次にHさんのお話をさせてもらいます。Hさんの代読はIさんがしてくれます。Hさん、自己紹介をお願いしていいですか。

H 編集長のHさんです。今日はNさんとOさん、組長さん、Pさんと来ました。よろしく

お願いします。

B Hさんは、今、私たちのグループでつくっている機関誌の編集長をやってくれています。

I 「ぼぼんた」で一緒に活動していますIです。今日はHさんの原稿を代読させていただきます。先ほど、Hさんが「組長さん」というように私のことを紹介してくれたんですが、それはあだ名です。よろしくお願いします。

Hさんについて、お母さんからいただいたものを読みます。

「Hは養護学校高等部を卒業してすぐ『わらじの会』に入り、間もなく始まった『ぼぼんた』の活動に最初から参加しています。二十歳になってすぐのころだったと思います。そのころは、今よりもっと右足が不自由で言葉もあまりしゃべれませんでした。外を歩くときは、いつも母親の私と一緒に、迷子にならないよう、けがをしないよう、私はいつも気をつけていました。買い物も店の人や周りの人に迷惑になると思って、1人でさせたことはありませんでした。

『ぼぼんた』の活動に参加するようになり、母親と離れて仲間の人たちと一緒に電車に乗ったり買い物をしたりさまざまな経験は、Hにとって本当にワクワクするようなことだったようです。そのころ、『別々です』が口癖になりました。自分と母親は別々だということを、私や周りの人に盛んにアピールしたかったのだと思います。私がHの世界に介入するのを嫌がるようになったり、『おあく』というお店でお給料としてもらったお金を、私に見せずに隠すようになりました。そしてそのお金を持って意気揚々と『ぼぼんた』へ出かけていくのです。

でも、自由に危険はつき物で、Hはよく迷子になりました。一番大きな迷子事件は、みんなで浦和に行くとき、乗り換えでHだけ電車をおりなかつたため起こりました。朝十時半から夜十時半ごろまで行方不明でした。JR武蔵野線で、終点から終点まで、電車に乗って一日うろうろしていたものと思われます。おなかをすかしトイレにも行けず疲れ果てているだろうと私は心配で本当に生きた心地もしませんでした。本人は意外に元気で、ちゃんとトイレにも行っていた様子ですし、びっくりしたことは、財布の中から新座にあるコンビニのレシートが出てきて、お昼にちゃんとお弁当と飲み物を買っているのがわかったことです。日ごろの『ぼぼんた』の活動のおかげだと心から思いました。

ところがその数カ月後、また同じところで行方不明になりました。こう何度もではたまらないので、もう『ぼぼんた』をやめさせたいと本気で思いましたが、本人のHは何が何でも出て行きました。そのころ、私を振り切って出て行くので後をつけたところ、1時間以上歩いてみんなの集まっている公民館に着きました。一生懸命歩いている後ろ姿を見ながら、こんなにHを駆り立てている『ぼぼんた』をやめさせることはできないと思いました。何度も迷子になるうち、もう迷子にならなくなりました。いろんな力を身につけたと思います」。

B ありがとうございます。今日は、Hさんだけではなく、Aさん、オレンジ色の車いすのJさん、赤い電動車椅子のQさんが「ぼぼんた」のメンバーとして来ています。Aさんの説明の中であった「オエヴィス」という生活ホーム、それからAさんの103号室というのは、前はJさんが住んでいた部屋です。Jさんは、「ぼぼんた」活動として、みんなで一緒に不動産回りをしていました。一人だと出足が鈍かったため、みんなに応援してもらって、不動産回りをしていたのです。その後にAさんが入ってきました。Qさんももうじき新しいアパートが決まりそうだと聞いています。「ぼぼんた」ではいつもは親にやってもらっていて乗り方がわからないので、電車に乗るのも自分たちでやっていこう、自分たちで失敗しながら覚えていこうじゃ

ないか、ということですずっと続けてきました。ほぼ同じメンバーで何ともう10年以上にもなりました。大体いろんなことをやりつくしてしまったようです。そこで今はやりがいを探すとか、仕事に近いことをやってみようとか、お互いに助け合う自助グループみたいなものになるなど、形が変わってきています。職員が入ったり、ボランティアが入るなど、いろんな立場の人がかわることで、「職員」と「職員が世話をする人」という関係だけで終わらないようになってきています。結構無責任な人がたくさんいることによって、ごちゃごちゃごちゃとやっています。

次に、「ぼぼんた」の説明をQさんにしてもらいます。

Q 先ほどから名前が出てきています、Qです。私も最初のころ、友達が「わらじの会」に入っていて、その友達の紹介で「わらじの会」を知りました。「わらじの会」の中でも自立体験プログラムをやるから参加しないかということがきっかけで今までやってきました。今度大袋のアパートがやっと決まって、これから引っ越しです。J君が、「ぼぼんた」の活動を通してアパートを探してもらったという話が出ましたが、私も「ぼぼんた」の人たちに手伝ってもらって探すことができました。今は越谷市の「くらしセンター・べじみ」の上にある、生活ホーム「もんてん」というところに住んでいます。そこを出て、今度大袋のほうに引っ越しをします。

R 僕は「わらじの会」で、「ぼぼんた」にある自立生活プログラムを、今から15年前に始めました。そのころはもう家庭訪問をしてメンバーを集めて、とにかく外に出かけることを目的に始めました。自分たちの生活を話し合ううちに、お互いの生活を共に考え合うグループになっていきました。そういうメンバーのグループですが、これから何をやっていくとか、こう動いたほうがいいのかは、メンバーだけでは出てきにくいところがあって、職員とか僕みたいなメンバーが参加することによって、「ぼぼんた」は活動をしてきています。

B 今、「ぼぼんた」にはいろいろな方が入っています。たぶん、それによってプライバシーが守られないこともあるだろうし、逆にいろいろな顔を持てたり楽になっているところもあるだろうと思います。そんなことも含めて話していけたらいいなと思います。

この後もう少し、質問をいただいて、お昼にしたいと思います。

A 質問はありますか。

C A君はお金がゼロに、Cさんと電車に乗って、A君はお金がゼロになりました。お願いします。A君は、「オエヴィス」で、Cさんと……、A君は「オエヴィス」に住んで、A君のお金がゼロ……。A君とお金がゼロ……。お願いします。

B CさんはA君と知り合いですね。

C 違う。

B 違うの? (笑) ひょっとしたら、帰り、電車賃の相談に乗るよという話ですか。違うんですか。

C A君……

B じゃあ、ごめんなさい。よろしいでしょうか。

C はい。

A ほかに質問ありますか。Tさん、お願いします。

T ありがとうございます。この「わらじの会」というのは、ちょっと聞いただけでよくわからないんですけど、「妖怪団」とか「パタパタ」とか、今、何名ぐらいの会員さんがいて、知的だけじゃなくて身体の方もいるということなんですけど、どういうメンバーなんですか。お願いします。

B 活動を始めてから28年目に入ります。「わらじの会」とはいうものの、会則とか会費とかが全くありません。来たときに会員みたいな形をとっています。「わらじの会」というのは28年前に、当時の住民運動みたいなことをしているグループとかボランティアグループみたいなのが一緒になってできました。例えばそれまではボランティアさんと障害を持つ人が土日に出かけたいみたいな話をしていたのが、やっぱり毎日みんなで集まれるところが欲しいなとか、「じゃあ、デイケアがあったらいいよね」といった流れで、デイケアができていったりしました。例えばAさんが住んでいる「オエヴィス」であれば、KさんとかLさんとの関係で生活ホームが分家として建てられていったという感じです。メンバー、職員、当事者、さまざまなスタッフを合わせるとだいたい150人ぐらいいるんじゃないでしょうか。当事者、健常者、ボランティアとかの割合というのは、ちょっと数えたことがないのでわからないんですけども、とにかくいろんな人がまじっている団体です。答えになったでしょうか。

T はい。では、かなり出入りは自由なんですね。

B そうです。何かほかにご質問ある方、いらっしゃいますか。

U わらじの家では、主に何の仕事をしていますか。

A 今は、バザーのビラ。今度、市役所の裏の第一公園でバザーがありますね。そのビラを春日部駅西口？ 東口？ どっち？ Iさん、どっち？ 西口と、それから武里駅東口、せんげん台西口で、ビラをまいているんですけど。補足をお願いします。

B 今、話を聞くと、年がら年じゅうバザーをやっている団体みたいなんですけど、そういうわけでもなくて、活動の拠点は、「べしみ」とか「パタパタ」とかいろいろありますが、Aさんは今、「わら細工」でも働いているんです。人材派遣の部署でちょっと働いたり、介助者を探す事業所で介助者を雇って一緒に仕事をしたりとかしています。通所の授産の施設みたいなところでは、パンを焼いたりとかもしています。

私たちは仕事中心というよりも、外に行ったり、人を前にしてこうやって迷ってみたり、そういうことの方が大事じゃないかなと考えています。なるべく外に出て、普通に社会の中に入って行って、トラブルに出会ったらどうしようか、みたいなことを主な活動としています。とにかく普通にまちに出て行くという活動です。ですから、仕事として持っている人もいますし持っていない人もいます。ちなみにIさんは、作業所のパート職員です。Hさんは、年金をもら

って親御さんと暮らしています。僕は職員なので、就労支援センターとか、「べしみ」という通所授産施設で仕事をしたりしていますが、そこで給料をもらっています。Aさんは？

A 生活保護で暮らしています。

B そんな感じで、とりあえずばらばらな感じです。

U この間自立支援法案が通りましたよね。授産所では給食は無料だったのですが、今度は5千円かかると言われています。少ないお金がまた少なくなっちゃって、給料がゼロになるんですね。このことをどういうふうに考えていますか。お願いします。難しいですか。

B すごく嫌な法律が通ってしまって……残念です。自立支援法案はすごく大事な法案ですが、内々であまりまじめに議論がされていません。昨日も学生さんから、「じゃあ今の時期、何をやっているんですか」と聞かれて困ってしまいました。そのときに話した内容というのは、どちらかという、社会の中で障害を持っている人と持っていない人がまじって暮らしていくときに、はじかれていく現場がたくさんあるということです。「あなたたちは養護学校へ行きなさい」とか、「作業所に行きなさい」と言われて地域から締め出されている現状があります。今はそういうところに出て行く活動を主にしていますので、そちらのほうが結構いっぱいいい感じです。確かに自立支援法はすごく大事なのですが、どちらかという今入れていないゾーンに入っていくことを仕事としていますので、残念ながら、まだ手つかずという感じです。これからたぶん困ると思います。逆に教えてもらったり、勉強させてもらいに行ったりすることがあると思いますが、よろしくお願いします。

U よろしくをお願いします。

B ほかにいらっしゃいませんか。そろそろ12時を回りましたので、昼食休憩ということにしましょう。なるべくたくさんの方とお話できたらいいなと思っています。午後は1時から、またこの会場で行いますのでよろしくお願いします。(拍手)

●午後の部

A それでは、午後の分科会を始めさせていただきます。午後は、地域でのプライバシーの話です。よろしいでしょうか。

B 午前中、ウィリアムさんから、プライバシーの問題などがあったという報告を受け取りましたが、そのあたりのことも含めて、地域におけるプライバシーに絞って話をしていけたらと思います。積極的にご質問、ご意見をいただきたいと思いますので、よろしくお願いします。ウィリアムさん、ご自分の体験などもふまえ、プライバシーのことについてお話いただけませんか。

ウィリアム 私が考えるには、プライバシーを守ることと地域で生きるということとを両立していかなければいけないと思います。私たちは、プライバシーを守ることと、自分のアパートを借りることは同じだという結論にたどり着きました。プライバシーというのは、自分の人生を自分で形づくっていく、自分で決断をするということが根本になると思います。例えば、自分が許可もしないのに、勝手にたんすの中をのぞき込まれたり、自分が留守にしている

ときに部屋の中に入られるのは、とても嫌だなと思います。そういう意味でのプライバシーというものを確保し、社会の中で生きていきたいと思います。

自分の家、自分の部屋であることを確実にするために、ドアのかぎは自分だけが持っていたいと思います。もちろん、支援者、スタッフ、世話をしてくれる人が、世話をするときに入ってこられるようにかぎを持っているという場合がありますが、自分の部屋ですから、支援者ですとか、世話をしてくれる人が来たときに自分がドアをあけるという形にすべきではないかと思っています。もしかしたらお金を払わなければいけないとか、煩雑なこともあるでしょうけれども、自前のかぎを持つということが大切で、そういうところから私はプライバシーを進めたいと思っています。

先ほどの「わらじの会」の皆さんがおっしゃっていましたように、やはりいろんな経験をして、ときには恥ずかしい思いをしてしまったり失敗することもあるけれども、そこから学ぶということが非常に重要だと私は考えます。先ほど、Aさんのお話がありましたよね。一文なしになってしまったと。お財布にお金がないということですが、そういうことから学ぶことがあります。コンビニでドリンクを買われたときには、お金が1円もなかったからたぶんほかの人が払ってくれたとは思いますが、厳しいことを言ってしまうと、お金がないときはものは買えないんだということをやはり体験する必要があると思います。私自身がそういうことを体験してきました。レストランに行って食事をして、財布をあけたらお金がありませんでした。このときは、レストランの人から厳しくしられました。アパートのお金を払えなくて追い出されたというような経験も持っています。

きつい思いも恥ずかしい思いもしますけれども、そういうことから、例えばお金の管理の必要性を学び、身につけることができると思うんです。ときとしてスタッフ、支援者、コーチ、仕事をしている皆さんですと、働き先の人がお金の管理を代わってやってくれているのではないかと思います。それは本当に便利で、ある意味ではありがたいんですけれども、自分で稼いだお金を自分で使い、自分で管理し、身につけていかなければいけないのではないかと思います。プライバシーもそうです。相当きついこともありますけれども、自分で勝ち取るためには、いろいろなものを学んで身につけていかなければいけないと思います。

プライバシーや自立ということを考えますと、自分でお金の管理をしていかななくてははいけないと思います。部屋代を払ったり、ガス、光熱費を払ったり、そういうことでは節約をしたり工夫したりするといったことも学んでいく必要があるかと思っています。支援者にすべてをお任せするということではなくて、そういうものも身につけていく必要があると実感しております。皆さんの話し合いを聞いた上で意見を述べさせていただきました。次はジェーンさんの話を聞きたいと思います。

ジェーン 私はちょっと視点を変えて、家族と一緒に住んでいる人、親御さんと住んでいる人の状況について考えたいと思います。子どもたちはだんだん大きくなっていきます。そして成人になります。成人になった子どもに対しての親の態度です。親子関係というものも変わっていかなくてははいけないと思います。お互いに大切に思っている親、子どもたちではありますが、成人した子どもには、それ相応の態度、接し方というものを、親御さんたちも考えていただきたいと思います。そうでないと、大人にはなれないのではないのでしょうか。子どもも、自分は成長したんだ、大人になっているんだということを認識し、親のほうも自分の子どもは成人なんだということを認めていかなければいけないと思います。こういうことを親離れ、子離れと言うんでしょうか。

そういう段階を経ていかないと、結局はお互いに依存し合いすぎてしまい、一個人としての

尊敬、敬意というものを、家族以外の人々から得るとするのがとても難しくなると思います。自分のやったことに対しては責任を持つことが必要です。これは、私たちも、親御さんたちもそうです。そしてその責任というのは、人から与えられたものではなく、自分のやったことに対してみずから責任をとることが必要だと思います。

それから先ほどのかぎのことですが、自分の部屋やアパートのかぎのことをウイリアムさんがおっしゃいました。私も自分の家や自分の個室と呼べるところに関しては、ドアのかぎは自分だけで持つべきだと思います。部屋はだれのものでもない自分の空間ですから、その出入りは私だけ、またはその本人だけであるべきです。本人だけがその中に入ってもいい人を選ぶことができるというようにするのがいいかと思います。

そして、お互いに、仲間同士で助け合う。お互いが何を思っているのか、何を願っているのかということに耳を傾ける。そして協力し合う。1人ではなくてみんなが力を合わせることで強くなれる、そして自由になれると考えることが大切だと思います。ありがとうございました。
(拍手)

B ありがとうございます。急にここの前に人が増えましたが、A君の補足と司会業で、ちょっといっぱいになってきましたので、Aさんのいる生活ホームの職員のSさんに上がってもらいました。Aさんのプライバシーの問題について少しいいのですか？

S グループホームの職員、埼玉県では生活ホームと言っていますが、Sです。私の働いている生活ホームには見学者がとても多くて、きのうもオランダやスウェーデンから皆さんに来ていただきました。私は案内するときに、基本的に「ドアが開いている部屋は見えていいですよ」というようにしていますが、閉まっているところをあえて開けて案内するということは自分ではやっていません。住んでいる人がどう思うかなということを考えるようにしています。グループホームの入居者のQさんが来ていますので、Qさんにも聞いてみたいと思います。プライバシーってわかる？

Q 今は特定の人しかかぎを渡されていません。今は生活ホームにいるので、直接来てもらうという形をとっています。今度大袋に引っ越しをするんですが、私の場合は自分でドアをあけるのが難しいところもあるので、介護に入ってもらう人には、かぎを渡すことがあるかもしれません。何かあったらちょっと困るなと思っているので、そうしようと思っています。

D きノウ海外から来られた方がみえたとき、ちょうどQさんのヘルパーさんが来てお掃除をしていたときでした。本人がいないときに、彼女が信頼している介助の人に日中お掃除をしてもらっていたときでした。でもいつもは、Qさんの部屋には、ほとんどいつもドアにかぎがかかっているんで、彼女がいないときにベランダ側からエアコンが回っている室外機の音が聞こえたりしても、私があけて入ってとめるということはしていません。でも、対応の仕方は人によって違います。私たちのところは身体障害の人が多く、言葉がうまくしゃべれない人が多いので、ベランダに洗濯物が出ていて雨が降ってきたりしたときは、その人の分は入れています。Qさんのものは雨ざらしのままです。その人によって対応は変わってきます。

B ありがとうございます。とりあえずお三方のお話を聞きました。プライバシーの問題がない人はだれもいないのではないのでしょうか。家族の中にもプライバシーの問題があると思います。プライバシーの問題に関してご意見や質問をいただければと思うのですが、いかがでし

ようか。

V グループホームというのは、必ず職員がついていて、何でもかんでもやらされているように思います。間違った方式だと思います。プライバシーに関しても、僕の部屋をのぞきにくる人がいます。毎回。でも職員も注意ができない状態です。だから自分としては、本当に仲間の関係でプライバシーが守られていないと思っています。

B ありがとうございます。他にはありませんか。では、お願いします。

R 最近、おもしろいというか変わったことがあったので発表します。うちは市営住宅に住んでいて、奥さんと子ども3人で住んでいます。僕が車いすで町を歩いているといろいろなうわさがたっていて、この間もうちに入っているヘルパーさんが、「あそこのうちは、年末に100万ぐらいお金がくるらしいよ」とかいううわさをしているのを（聞きました）。うそのことも本当のことも、結構周りに筒抜けです。一方で、どしゃ降りの日に、うちの前の公園で車いすがとまってしまって、自分で何とか帰ろうとしたのですが、結局周りの人が家まで送ってくれたということがありました。プライバシーの問題もあるとは思いますが、逆に町に暮らしていることを打ち明けて、気にしないで暮らしていくことも必要なと思っています。

B プライバシーという問題もあるんだけど、結構、Rさんが暮らしているあたりでは、知って知られて、そこから関係が始まっていくみたいなのところがあるということですかね。

R ええ。

ウィリアム 先ほどQさんのご意見を聞かせていただきましたが、私はちょっと強硬派で、プライバシーということを守るというんだったら、どんなに信頼のおける親しいスタッフの人でもかぎを渡すのはどうかなと考えます。例えばお部屋を掃除していただく、Qさんが外に出かけていられる時間にやってもらうというのは便利なようですが、やはり自分の家だったら、自分のいるときにスタッフの人に来てもらって、それで「来ました」と言われて、Qさんが「どうぞ入ってください」という形で掃除をしてもらうというようにしたほうがいいのではないのでしょうか。ただ、スタッフの人がスタッフの都合で、「今だと、ちょっと掃除しちゃったほうがいいわ」とか、そういう形で勝手に個室に入ってくるというようなことになってしまうとそれはいけないと思います。グループホームの部屋、それは自分の個室、つまり自分の家であり、自分の城であるということを考えたら、例えば、「ここでこういう支援が欲しい」「こういうことをしてほしい」ということを考えるのも本人でなければいけないし、「いつこういうことをお願いできますか」というようにお願いをするのも、やはり本人の意思、自由意思でやってもらう。そういうようにしてやっていかないといけないと考えます。プライバシーの問題を語るときに、家、または自分の空間を守っているかぎというのは、非常に重要なかぎになります。

B ありがとうございます。また家が変わりますからたぶん新しい展開があるかと思います。いろいろな工夫もできていくのではないかと思います。同じような悩みを持っておられたり気にされている方とか、いろいろ取り組んでいらっしゃる方とか、いっぱいいらっしゃると思いますが、どなたか。

W 今、グループホームでかぎをつけてプライバシーを守るんだというようなお話を聞いていたんですけど、それは本当のことですよ。私のところもグループホームですが、やはりスタッフが管理をしています。「この人たちを私が管理をするから、かぎなんていうのはとんでもないんだ」と言っているのにかぎはありません。でもそれでは、本当にそれをつけてもらうように制度を変えない限りできないのか、プライバシーもへったくれもないというようなことになってしまいます。私のところは、練馬にありますD園というところですけども、共同募金会で建ててくれた建物の2階を私たちが使っているのですがまだかぎはつけてもらえていません。もう十何年たっていますが、「そんなものはとんでもない」ということでつけてもらえないのです。だからそうすると、行政が制度を変えない限り難しいし、プライバシーもなくなるのかなという気がします。

B 貴重な御意見、ありがとうございます。かぎを自分で管理できるかどうかは、とても大切な問題だと思います。

W だから、私たちのところでいうと、かぎをつけてもらえない。だから皆さんの話を聞いていて、本当に我々のプライバシーはどうなるんだろうなと。部屋も入ってこられるし、それが当然という見方をされているというのも何かおかしいので、やはり、それはもう行政から率先して変えない限りはあり得ないのかなあと今、お話を聞いていて私はそう感じました。

B どうもありがとうございます。今、個室や家といったあたりのプライバシーの問題が出てきていましたが、もっと広い意味で、例えば地域、さっきBさんが話されたのは、地域の間関係における精神的なプライバシーのような部分もあったかと思います。先ほどのHさんの話の中で、Hさんは、自宅を開放してガレージセールをやっていると言われましたが、たぶん御近所には障害者がいるということをおそらく知られたくないということなのではないでしょうか。自宅を開放して取り組みを行うのは大変だなと感じました。その辺、Hさんにお話していただけたら思うんですがいかがでしょうか。プライバシーという部分だけにかかわらなくても結構ですので。

H (母) 私はずっと大阪に住んでいまして、埼玉に引っ越してきたのが17年前です。Hはすぐに養護学校の高等部に行きましたので、周りに知っている人が全然いませんでした。養護学校に行きましてもあまり外の世界は知らずに、卒業して「わらじの会」に行くようになって初めていろんな活動に参加させていただくようになりました。私も最初のうちはボランティアとか、もうどう見ても「わらじの会」は最初のころは人手が足りないというのがわかっていましたので、ボランティアとして一緒に活動していました。そのため、あまり家の周りに知っている人はいないままにずっときてしまいました。「地域で地域で」と言いながら、家の周りで知っている人もあまりいないというところで、Hはずっと「わらじの会」の活動に参加して来ました。歩いて1時間ぐらいかかるんですけども、そんな状態でしたので、これはやはり地元の家の周りで、いっぱい知っている人が必要だなということで、ガレージセールを始めました。でも月1回ですので、そんなにそれだから急に知っている人が増えたりとかということではあまりありませんが、でもこうやって地道にやっていくことが必要かなというように思います。

私は親なんですけど、今までおっしゃられた方などはかなり自分の考え方をきちんと持っていらっしゃるので、かぎも自分で持つてという考えはわかるのですが、障害の重い知的障害者

になると、プライバシーというのは本当に難しい問題ではないかなと思います。Hの場合は、先ほども「ぼぼんた」の活動のところで書きましたが、自分は母親とは別々だということを出しました。自分のお金も隠すようになったり、自分の部屋に私が少しでも入ると、見張っていて「早く出て行ってほしい」というような感じで嫌がるところがあるのです。かといってそのまま放っておきますと、部屋は掃除しないし、着る物の管理も自分では難しいですし、本当に難しいところだと思います。

B ありがとうございます。たぶん皆さんは、難しいなりにいろいろな取り組みをされていると思います。

ウィリアム お庭を開放されているというすばらしいコミュニティ活動を、非常にうれしく伺いました。ところで、プライバシーに関する今のご意見について、一言申し上げさせていたいただきたいと思います。

周りの人が考えている以上に、チャレンジする気持ちを持っていれば私たちは、できるものなんです。今、お母様が、お嬢さんがお部屋を掃除しないとおっしゃいましたが、たぶんそれも娘さんに、「自分でやれるわよ、やりましょう」と言ってあげたら、たぶんお母様が驚くぐらいできるはずだと考えています。と申しますのも、私の妹がダウン症ですが、現在自立してボーイフレンドと一緒に共同生活をしております。彼も妹よりもちょっと重い障害を持っているというカップルなんですけれども、日常生活をこの2人で助け合っていてやっています。このダウン症の妹は、知的レベルとしては6歳〜7歳ぐらいであると診断されています。ですから、この2人が独立して2人きりで生活するなんてしょせん無理だと、最初は周りの人たちから大反対されました。また悲観的に見ていました。しかし、私たちはできるはずだと考えて、本当に徹底的にトレーニングを妹にやってもらったんです。もちろん集中してやらなければいけないし、本当に長い時間がかかりましたけれども。「できないんじゃないか」というような思い込みではなくて、「できるんじゃないか、できるはずだ」というように意識を変えるべきだと思います。これは周りの人だけではなく本人もそうです。「自分はできるんだ。やりたいことがあるんだからするんだ」というように変えることで、思っている以上のことができます。

ジェーン 「できる」「できない」ということで、その可能性を閉ざすということではなく、心を開く、柔軟なとらえ方、考え方をすることが重要だと思います。

B ありがとうございます。だいたい時間が押してきましたが、もう少し会場の方のお話を聞きたいと思います。どうぞ。

X 大分県から来ましたXと申します。大分は日本の南の九州という島にあります。今、大変参考になるお話をいただきました。僕は建築学が専門です。そういう立場から意見を一つ言わせていただきたいと思います、手を挙げました。

今のプライバシーの問題ですが、専ら周りの方々のサポートの問題が取り上げられました。心構えの問題もありますが、空間の問題もプライバシーに大きく関係していると思います。ちょっと長くなるといけないんですが、皆さんご存じのように今、13万人の人が日本では入所施設にいるわけです。今度の自立支援法は、もしかしたらこの入所施設をこのまま残してもいいよという法律でもあるように考えられます。今のままの名前を変えて、今のが住まいだよということになる。それはもうとんでもないことだと思いますし、一方で十何万人分のグループホ

ームをつくりましょうというような動きがあって、これは大変結構ですが、その皆さんが描いているグループホームというのは、実は一つ屋根の下の一戸建ての家に4～5人で住んでいるという、例えば、私が入りなさいと言われたら決して入りたくない生活環境です。でもそれが当面の目標になっている。地域生活を実現しようというグループホーム。それが非常に問題だと思います。私は、生活環境を豊かにしていくという発想が必要だと思います。かぎがあって個室だけではなくて、少なくともおふろとトイレがあってキッチンがある。そうしたものが固定されて初めて自分の家と言えるのだと思います。自分の空間をサポートしてもらう必要性が高い人は、豊かな空間が用意された家をつくらないといけなと思います。今日大変おもしろかったのは、ウィリアムさんとジェーンさんが共に、「グループホームなんて嫌だ」と言われました。日本よりはるかに広くていいグループホームなのに、それでもやはり望ましくないという空間のイメージを持っていらっしゃるのを知って嬉しく思いました。お二人が言われたことを是非次の望ましい生活環境にしてもらいたいと思います。私自身、今日の日本的グループホームを目標としてはいけないと思っています。それについて、もし関係の方でご意見などがあつたら伺いたいし、一応建築の立場からそういうような見方をしている者がいるというのを知っていただきたいと思ひまして発言しました。以上です。

B ありがとうございました。

ウィリアム 貴重な情報をいただきありがとうございました。実はオランダも、皆様に思っていたほど状況はよくありません。本当にプライバシーがないような状況で、大部屋で10人12人の人が生活をしているというような状況も実はあります。ただし、そのような状況というものはよくないと、そういう状況は変えなければいけないということでいろいろな人々が働きかけております。私たちの団体もその一つです。何よりもいけないのは押しつけだと思っています。「これをしなさい」「あれをしなさい」「こういうふうに暮らしなさい」「こういうグループホームに入りなさい」「施設がいいですよ」ということではなくて、一人ひとりがみずから考えて、「こういうものをこういうふうにしたい」「自分にはこういうほうが便利だ」というように考える。つまり選択というもの、自分が選ぶという自由、これを私たちは獲得しなければいけないと思います。

ジェーン スウェーデンの状況は数年前までたぶん日本に非常に近かったのではないかと思います。だから、皆様の感じています問題もわかりますし、また恐れ、不安感というものも十分に理解できます。本人もそうだし、そしてまた介護、支援のスタッフの方々、または御家族の方々も、自立した生活というのは本当に成り立つかどうかと不安に思っていると思います。しかし、スウェーデンでは、すべての大規模施設は解体されました。もうなくなりました。みんな自立できるというような方向に変わっておりますし、グループホームというものも上限が5人です。5人以下のグループホームだけが許可されています。これは、スウェーデンの大きな変化です。ですから、日本でも現状を変えていくことができると思います。現状を越えたいろんな可能性があるんだ、変えていくことができるんだということを、スウェーデンの経験を通して申し上げたいと思います。

B ありがとうございました。

時間がなくなっていました。プライバシーの話は、それを支えている文化や、プライバシーが何を守っているのかということも含めての話だと思います。先ほどQさんの話がありま

したが、Qさんは、ヘルパーさんにつき合う時間よりも、勝手に出て行って自由に活動することを大事にしていると思います。プライバシーとは何か、何を大事にしているのかといった問題も含めて、もっともっと話が掘り下げられると思いますが、残念ながら時間がきてしまいました。お互いの日々の活動の中で引き続き考えていただくことにして、今日はこれで終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。(拍手)



分科会 3

「本人活動の支援のあり方」

- コーディネーター 花崎三千子 (「札幌みんなの会」支援者)
- 発題者 1 アンデシュ・ベリストローム
(スウェーデン・グルンデン協会支援者)
- 発題者 2 ロール・コック (オランダ・LFB支援者)
- 発題者 3 光増昌久 (「札幌みんなの会」支援者)
- 発題者 4 本田隆光 (「ふれんずトトロ」支援者)

(支援者向け分科会、企画者：花崎三千子、札幌みんなの会支援者)

●午前の部

花崎 日本で本人活動と言われるセルフアドボカシーの活動が始まったのは、今から 15 年ほど前になります。その中で、私は三つの大きな変化があったと考えております。第一の変化は、知的障害のある当事者の方たちが自分に自信を持って、仲間に勇気を与えたということです。第2の変化は、比較的身近な支援者に、支援のあり方のそれまでの誤りを教えてくれたということです。第3の変化は、社会全体に知的障害があるということはどういうことなのか、それまでは何もできない人たちという認識が一般的だったのを大きく変えました。今日の分科会は、この三つの大きな変化の中で、特に2番目に挙げました支援のあり方について、——これは本人たちが突きつけたことになりますが——その支援のあり方、どうあるべきなのかということを論議していきたいと思います。

午前と午後にわたりますが、午前は主に、4人の講師の方の時間です。それから午後は、皆さん方が発言をしていただく時間ですので、まず午前は聞いていただきたいと思います。

最初に、講師の方に簡単に自己紹介をしていただきます。その前に、通訳の方も自己紹介をお願いします。

山口 山口マサコと言います。今日の第3分科会の通訳を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

アンデシュ・ベリストローム 私はアンデシュ・ベリストロームと言います。スウェーデンのイエテボリにありますグルンデン協会です。そこでは当事者の人たちのリーダーグループというのがあります。自分たちで責任を持って自分たちで決めていこうというリーダーグループのコーチング、コーチ役として仕事をしています。リーダーグループの人たちがいろいろな活動を決めたり、あるいは資金をどう充てていくかということをお話する際、私はコーチングという役割を果たします。

ロール・コック 私の名前はロール・コックと言います。オランダのオンダリングシュタルク連盟で支援者として仕事をしています。私が仕事をしているのはオランダの南西部のほうです。そこを拠点としてあちこち移動し、旅をして仕事をしています。私はコーチとして仕事をするわけで、その仕事はすばらしいものだと思います。

花崎 先ほど、アンデシュさんのグルンデン協会については、マーリンさんとジェーンさんのお二人の方が説明をされました。けれども、オンダリングシュタルクについてはまだ説明をしていただいていないので、今簡単に説明していただければと思います。

ロール・コック 私の所属していますオランダのオンダリングシュタルク連盟というのは、オランダ全土をカバーしている全国的な組織です。オランダの中に四つのオフィスがあります。それからサービスについてはオランダの中心部にサービスセンターというものを置いています。私が所属しております団体は、オランダの全国的な組織であるということをお話させていただきます。

我々の考えというのは、当事者の人たちはみんなが思っている以上にいろいろなことができる、それを支援していく、コーチングということで我々が支援していくという考え方です。このコーチングをどういう形でやるかというのは、後でお話をします。

オンダリングシュタルク連盟という組織は、既に 20 年の歴史を持っています。1985 年に組

織の活動がスタートしました。すべての障害者の人たちを支援していくことが我々の仕事であると考えて、いろいろな活動を行っています。

光増 おはようございます。私は北海道小樽から来ました光増と申します。「札幌みんなの会」という本人のグループの支援を十数年しています。今日は、「札幌みんなの会」のことではなくて、「人権セミナー」という札幌で行っている市民運動的な本人活動、その主体は本人がやっているということを紹介しながら、本人の支援というものを考えてみたいと思います。よろしくお願いします。

本田 おはようございます。私は、福島県のいわき市にいます本人活動の「ふれんずトトロ」というところの支援を10年近くやってきている本田と申します。よろしくお願いいたします。今日は、「ふれんずトトロ」とのかかわり、全国の仲間も含めた動きの中で、支援ということが私自身もどう変わってきたかということを紹介しながら本人活動支援のことを考えてみたいと思います。よろしくお願いします。

花崎 それでは、これから、順番にお話をさせていただきます。まずアンデシュさん、お願いします。

アンデシュ こんにちは。今、ここに座って話すということに自分自身で違和感を覚えています。と言いますのも、ある特定のグループを知的障害があるとか、あるいは精神的な障害があるとか、あるいは特定の診断名をつける、それについて話すということに対して自分の気持ちの中で違和感があります。

私がお話できることは、私自身が世界の、あるいはヨーロッパの人たちとやってきた、People firstの人たちやあるいはほかのスウェーデンの友人と語ってきたこと、それを伝えることが、私の今日できることだと思っています。

私はコーチです。そして私は社会学者でもあります。そしてまたセラピストでもあります。一部の人は私のことを専門家だと思っています。スタッフコーチもやります。

基本的に私は一人の人間です。人間としてののを持って生まれてきました。そして、それを持ってコミュニティの中で生き、友達やほかの人とともに生きていくことをやります。私が持っている機能の中には、だんだん年を取ってきて時が経過して、前よりも悪くなったというところもあるし、前よりもよくなったというところもあります。

私の名前は、アンデシュ・ベリストロームです。これから皆さんにお話することは、私がグルンデンの仲間たちと一緒に話し合ってきたこと、そしてその話を通してどういう結論に至ったかということをお話していきたいと思います。

このグルンデン協会というのは、最初はFUBという親の会の一部門として始まりました。この部門が独立してグルンデン協会という形になったのが2000年。そして当事者たちといろいろな立場の支援者たちとの協力の中でずっとやってきました。そういう経過の中で、幾つかの言葉が頻繁に使われてきました。そして、その言葉の意味というものを深く論議するようになっていきました。例えば影響(influence)という言葉がどうして重要なのだろうかというようなことです。このような話し合いを通して、いくつかのキーワードがグルンデンにとってとても大事だということに気づいていきました。

そして、「影響」「自己決定」「参加」「信頼」「尊重」という5つのキーワードが浮かび上がってきました。この5つのキーワードは、一人ひとりの社会生活にとって欠くことのできない根本的な事柄であると考えられるようになりました。

私たちはまた、コーチングということから得られた経験についても話し合いを持ちました。生活のいろいろな場面、自宅で、あるいは職場で、あるいは余暇時間において、コーチングについて話し合いをしました。メンバーの人たちは、コーチをされたときのよい経験、それからどのようなコーチングは嫌だったのかという経験についても話し合いをしました。そして、ある経験がよかったのに、別の経験が嫌だったのはなぜだろうかということについても考えました。私たちは、組織の構造やモデル、規則についても話し合い、こういったことが障害を持つ人たちとどう関連するのだろうかということも話し合ってきました。そしてまた、排除されること(exclusion)、あるいは排除されたという感覚について話し合いました。それを自分の人生について大きな意味を持つインクルージョン(inclusion)と比較しながら考えていきました。

グルンデンが独立した組織になってからは、グルンデンのメンバーとコーチたちの関係を検討することがさらに前よりも大切になりました。グルンデンは、その時から今も、コーチたちの雇用主というわけですから、一緒に協力していくための最善のあり方とはどういうものかと考えていく必要がありました。つまりメンバーたちが自分の置かれた状況について、パワー(力)とコントロールを持っていると感じることができているかどうかについて話し合いをしました。

やがて私たちは、「これこそが正しい」と信じることができるメンバーとコーチの関係のあり方を見つけることができるようになりました。そしてその関係のあり方を説明できるような方法も見つけました。グルンデンのメンバーたちやコーチたちは、今、コーチということについての説明、発表というものをいろいろな機会で行っています。教育プログラムの学生やあるいはスウェーデン国内の職員、ソーシャルワーカーに対して説明を行ったり、あるいは会議や大会の場においても説明をしています。

グルンデンのキーワードというのは、いかなる人の人生においても最も重要な言葉であり、表現方法です。ましてノーマルなことから排除されてきた人々の身に立ってみれば、そのようなキーワードはさらに重要性を増します。コーチになるための訓練プログラムにおいて、こうしたキーワードについて深く検討し、議論することが基本的な要素であると考えています。このようなキーワードが、自分の人生にどういう影響を与えていたか、どういう衝撃を与えてきたか、それをきちんと考えることができれば、ほかの人に対してもグルンデンのキーワードが同じような影響を持っているに違いないということが理解できます。このことは、私たちに「障害者」というレッテルを張ってきた相手の人たちにとっても同じことだと思います。

コーチをすることで、一番大事なことは、人と人との関係を問われますから、我々がそこに一緒にいるんだ、共にいるのだということが非常に大事です。同じ状況の中において同じ時間を共有し、その状況の持つ意味や目的を共有すること。よい形で同じ状況の持つ意味・目的を共有するためには、私たちは個人として、グループとして、チームとして、相手にお互いに依存し合っているのだということを理解する必要があります。

メンバーとのいろいろな話し合いの中で、さまざまな状況に置かれた人たちのとの関係に役立つ幾つかの要素を選んできました。コーチをするということは職業です。仕事です。この仕事をするために雇われて、そして使われているのです。従って、大切なことは、持てる力量、自分が持つすべてのリソース、力をフルに発揮して、その場において話を聞き、出会い、話をし、信頼し、見守り、理解することです。ここから人間関係が生まれます。私たちは、お互いが相手の持つ力量を引き出して使うということについても話をしてきました。

よく言うのですが、人間にはだれでも一人ひとりの物語があるということを忘れてはならないでしょう。だれもが持っている一人ひとりの歴史というものが、一緒に話したり討議したり行動するときにあらわれてくるのです。真剣な会話をすることの価値を見つけ、活用で

きるようその機会をとらえていく必要があります。

ミッション（伝えたいもの）は何かということを知っておく必要があります。ミッションを知らなければ、何かをする際に意見を一致させることが難しくなります。何を期待されているのかを検討する必要があります。雇い主はだれで、依頼した人はだれなのか、そのミッションを出しているのはだれか、出したミッションの責任を取るのはだれなのか、出されたミッションは可能か不可能か、そしてそれをだれが決めるのか、などを検討していく必要があります。

人間としての価値を認めるということ。コーチはほかの人たちの人間としての価値を認めていく必要があります。ほかの人たちの中に物理的、心理的、社会的な能力があるということ認識することが必要です。そうして初めて適切な形の出会いが可能となります。その理由は簡単です。私たちは、生まれながらにしてほかの人とのやりとり、接触のために使えるように備わった物理的な、心理的な、あるいは社会的な能力があるからです。私たちは自分の経験、あるいは周りの例から知っていることですが、すぐレッテルを張ったり、すぐ診断しがちです。あるいは施設のこれまでのやり方・伝統などに影響されてしまいがちです。そうすることによって人間関係を発展させることが難しくなり、むしろ距離を置いてしまうということがあります。今でもこのような距離の取り方を、専門的な対応だと呼ばれることがあります。しかし私たちは、グルンデンの経験からこれほど間違ったことはないということに気づきました。

私たちは、親しくなること、あるいは感情ということに「Yes」と言い続けています。そしてそれは我々の現実の一部なので、その対応の仕方を学習していきます。私たちは、出会う相手や自分が見たり聞いたり感じた対象に対して自分を出し、さらけ出すことが大切だと説いています。現実を理解し、受け入れるためには、自分に対して正直であることが必要です。私たちは時間をかけて、自分が理解したことをよく考察して、その考えた結果をどうするのかということについてもさらに考えを深める必要があります。要は、現実そのものをどう理解するかということです。私たちはよく言います。「施設を壊してしまえ、ぶち破れ、現実には『ようこそ』」と。

コーチングは、今後もどんどん進んでいくプロセスの一つの過程に過ぎません。その出発点は人間であり、個人であり、ミッションや目的であり、もちろん環境でもあります。このプロセスでは、引き続きコーチの役割や位置づけを探し求め決定します。それによって人と人との結びつき、段階が深まったり、さらには意見の一致、不一致を求めて葛藤も続きます。このプロセスは、考え、討論し、決定する、そして行動することを伴って進んでいきます。そしてそれは、結果、経験、知識、技能をもたらすことになり、再びそこからプロセスが出発します。しかしそのときには、今までよりも一層大きな自尊心、自信、コントロールとエンパワーメントを持って再出発することになるのです。そうすれば、私たちは新しい挑戦に挑む用意ができていきます。

やっとのことで私たちは、仕事の上で使うことのできる指針となる幾つかの言葉を見出しました。私たちが確実だと言えることが一つあります。それは今、私たちはここにいる、しかし同時に、いつでもそこから逃れられるということです。現実の中に踏みとどまって、本物で生き生きとしたやり方で他人と出会っていくということは、大きな挑戦なのです。

以上です。ご静聴ありがとうございました。皆さんのコーチングがご成功することをお祈りします。（拍手）

花崎 アンデシュさん、ありがとうございました。もう、しょっぱなからいきなり、私たちが支援と言う言葉を使いながら普段考えていることがいかに幅が狭かったのかということ、感じさせられながらお話を伺っていました。人間と人間とのものすごく深くて広い関係のつけ

かたから始まるのだということを、今お話されたと思います。中に「コーチ」という言葉が出てきましたが、日本では初めて聞く言葉ではないかと思います。後ほど改めて、「コーチ」ということの意味を、お聞きしたいと思います。ありがとうございました。

それでは次に、オランダのオランダリングシュタルク連盟のロール・コックさん、お願いいたします。

ロール・コック 皆さんに先ほど申しましたように、私は以前も今もコーチです。当事者活動の中におけるコーチングということについて、今日はお話をしたいと思います。

これまでコーチングということについて本を書いたり、いろいろな活動の中で考えてきました。コーチングというのを人に話すときには、まず「皆さんは、コーチングというのはどういうことだと思いますか」ということを聞いてきました。そして私が今から説明するコーチングの考えの中には、私の問いに答えてくれた人たちからの意見も含まれています。コーチということに対して、私がこういうことがコーチングですよということを説明して、皆さんにもご賛同いただけたらと思います。

いくつか大事なことを確認しておきたいと思います。1、コーチというのは、自分自身であるということです。そうでなければこの仕事をすることはできません。2、コーチというのは人を変えるということが仕事ではありません。3、コーチというのは人をどう扱うか、人にどう対処するかという例を示すことではありません。4、コーチというのはテンポ、ペースをきちんと意識しないとイケません。5、コーチというのは抑えることができる、ということが必要です。

当事者活動の中でコーチングを行う際、まず、客観的になれるということが大事です。グルンデンの人たちも、そして我々の組織でもそう信じています。また、コーチというのは、彼自身、あるいは彼女自身の可能性ということ信じることができる人間でなければいけないということです。さらに、コーチというのは「受け身的になれる」、「何か起こったときに反応できる」、「積極的にかかわることができる」、それから「創造的になれる」ことが大事です。そして、コーチというのは、彼自身を、あるいは彼女自身を実際にきちんと見つめることができません。また、非常に大事なことは、コーチというのはユーモアが必要です。みんな嫌な状況よりは、とてもいい状況のほうを好むでしょうし、笑いがあるということは非常に大事なことです。そしてともに一緒に笑うということも大事です。今それをここでやってみることもできますが、それは後回しにいたしましょう。

コーチングを当事者活動でやるときに大事なことは、コントロールするのではない、調整する、合わせる、相手に合わせて調整していくということです。入所施設には、非常にがっちりとした構造があります。私の同僚のアンデシュも私も、もうそういう施設は要らないと言っています。

我々の人生の歩みの中で、重要なシグナルというものがあります。コーチ、あるいはコーチの周りで仕事をする人たちにも、それぞれにプロセスを持っています。構造よりもプロセスが大事なのです。プロセスというのは、流れる川のようなものだと考えます。水が流れています。冬には水位が上がります。夏には下がります。それはプロセスです。自分たちがそれを高くしたり低くしたりするものではありません。それは自然が自然にやっていることです。構造というのはいつでも構造です。

グルンデンの人たちも、それからLFBの人たちも、いつも言っていることは、皆さん自身が経験から学ぶことができる専門家だということです。皆さん自身が皆さんの経験から学べる専門家なのです。自分の経験から多くを学ぶことができます。また、私たちは私たち自身のコーチングできる能力を信じる必要があります。そうすることで、信頼に満ちた関係というもの

をすることができるのです。

一人ひとりの中にいろいろな資質を見出すことが大事です。多くの資質は表に出ず、隠れているのが実態です。このことは、だれにとっても大事なことです。なぜ大事かという、自分の資質を使ってみずからをコントロールしていくことができるからです。当事者活動のコーチングにおいて一番大事なことは、あなた自身の生活の質ということです。あなたたち自身が自分の人生というものをつくっていくのであり、それをうまくやっていけるように自分でつくっていくのです。ノーマライゼーションや解放するというのが、だれにとっても非常に重要です。それからインクルージョン（包み込む）ということも大事です。

最後に、自分自身の生活や人生の中で、経験をするということが大事です。ご静聴ありがとうございました。（拍手）

花崎 ロール・コックさん、どうもありがとうございました。先ほどアンデシュさんが出された「コーチ」という言葉について、さらに具体的な内容が示されたように思います。

花崎 それでは、今度は2人の日本のスピーカーにお願いしたいと思います。

今のお話の中にも出てきましたが、支援というがっちりした構造の中に自分たちを閉じこめてしまってきたのではないかという反省が私の中にとっても強くあるのですが、それをどうやって壊そうとしてきたのかということについて、たぶん日本の2人の方が話してくださると思います。

最初に光増さんお願いします。

光増 こんにちは。私は、本人活動の支援というよりも、札幌で行われている「人権セミナー」というものが、最初は支援者から始まり、それが今本人に代わってどんどん発展しているということをお話します。

1991年から1993年まで知的障害者の権利擁護に関する調査研究を北海道でしました。そのとき入所施設の権利侵害の実態が非常に問題になりました。この実態を社会に訴えようということで、関係者が集まって最初の「知的障害者人権セミナー」を開催しました。まずその発展過程を説明します。最初1回目は関係者中心のセミナーでした。2回目はシンポジウムで当事者2名が参加しました。そのときに札幌市の障害福祉課長も参加して、当事者の人たちから療育手帳をもう少し使いやすく小さくしてほしいという要望が出されて、翌年から小さくなった経過がありました。

次の年の企画をするときに、当事者のことを関係者だけが企画して運営するのはおかしいのではないかとということで、本人の分科会、あるいは本人のシンポジウムは、本人が企画する「ふれあい実行委員会」をつくって、本人が運営するようにしていこうと少し中身を変えました。次の年は、「ふれあい実行委員会」が企画を立てて全体の実行委員会に投げかけるという形になりました。

翌年からは、本人が分科会やシンポジウムの企画だけだったのが、今度は逆転して本人たちがセミナー全体の実行委員になりました。当初は、自分たちの非常にプライベートなことを話す分科会で一般参加者は聞けなかったんですが、分科会によっては一般の方にも公開するようになりました。今までは、分科会は本人中心で、一般の人は講演などの別プログラムでしたが、やがて午前中は、すべてのプログラムに一般参加者が参加できるように変えていくようになりました。

今までは会則も何もしないでやっていましたが、決まりをつくらうと本人の声が上がって、会

則をつくるようになりました。

北海道や札幌市の行政の関係者にも、助言者として参加してもらうようになりました。翌年からは、実行委員会で行ったセミナーの報告集をみずから編集して発行するようになりました。また支援費制度が始まるということで、支援費制度の分科会だとか、そういう取り組みも始まりました。

今までは、知的障害という障害名を掲げたセミナーでした。しかし、権利侵害や人権に関する問題は決して知的障害だけではなく、身体障害や精神障害のことも含んでいるので、あえて知的障害という言葉は使わないで、もっと幅広く障害の垣根を取っ払う論議をしようということでセミナー自体の名前も「人権セミナー」という名称に変更になりました。ちょうど10年を過ぎてどんどん進んでいって、今年2月に行った討論会では、私たちが地域で暮らすためにはという形で、3障害の代表の人がシンポジストとして参加しております。

1年に1回行われるセミナーですが、毎年10月ごろから実行委員会が開始されます。約2カ月ぐらいかけて開催要綱を完成させ、1月に入って資料づくりをします。2月に行われるセミナーの前日は、交流会をして、北海道各地から来るメンバーと一緒に交流を深めます。そして開催当日を迎えます。大会が終わった後、じっくりとゆっくりしたペースで報告集の編集をして、秋口に報告集を完成するというパターンがここ数年続いております。

セミナーの様子を簡単にご紹介しますと、まず事前に当日の資料を実行委員のメンバーが作ります。前日には居酒屋などで交流会を開きます。夜の交流会でつながりができます。仲間もできます。このことをすごく重要視しております。

当日の受付は分科会ごとに色の違う名札を用意して、当事者の方が受付を行います。

例えば数年前の分科会では、福祉サービスについて、恋愛・結婚について、いじめられた体験について、趣味とスポーツについて、私たちの人権について、ガイドヘルパーについて、支援のあり方について、支援費制度について……、だれでも参加できる趣味とスポーツというレベルの話し合いから、少し深く突っ込んだ問題、あるいは権利侵害にかかわる分科会等を企画しています。

各分科会では討議や質疑応答が活発に行われます。話し合いだけでは疲れてしまうので、当日の昼休みはアトラクションをします。音楽のアトラクション、昔遊びのアトラクション、こうしたことは地域のボランティアがかかわります。昼休みはちょっとリフレッシュします。

およそ400～500名の参加者となり、それぞれ午前中行った分科会の報告を司会者が行います。討論会では司会もすべて北海道のいろいろな各地の本人たちが集まって行っています。

そして最後にはみんなで「ご苦労さん」と言って終わります。

では、支援者の意識がどう変わってきたかということの後半整理してお話をします。当事者のグループの支援をしている人は、支援のあり方を絶えず考えていますが、関係者、例えば行政の人とか、親の会の人とか学校の教職員は、今までどちらかというと知的障害の支援に関しては、十分理解できていなかった側面がありました。しかしこういうセミナーを十数年行う中で、関係者の意識も変わってきました。実行委員会に本人にかかわることで、本人たちの実態を知ることができるようになってきました。現在は、当事者から支援を求められたときのみの支援に変わってきています。

このセミナーではリピーターが増えてきています。市民も本人も、このセミナーを楽しむということでリピーターが増えてきています。当事者の発言で多くを学ぶ経験をすることが出来ます。当事者が段階的に力をつけてくる様子もわかってきます。

行政関係者も、当事者がこれだけ話せるという状況を把握して、北海道や札幌市のいろいろな会議に知的障害の代表のだれを委員にしようとか、行政のいろいろな施策へのかかわりも

できてきています。

知的障害だけではなく、D P I 北海道ブロック会議の委員として代表が参加するだとか、D P I 世界大会のときに、初日の司会の1人を知的障害の代表の方がするだとか、ほかの障害者団体も、この「人権セミナー」を評価して当事者が多く参加するようになってきています。

では、参加する当事者はどうだったのでしょうか。毎年参加するリピーターが多くなってきています。道内の本人の会のメンバーの参加が増えます。それはなぜかという、夏は育成会の全道大会で本人大会というのをやっています。秋は、「このゆびとまれ」という本人活動の交流会のようなことをしています。冬は雪祭りが終わった後、「人権セミナー」をやって、当事者の会の連携ができてきています。合わせていろいろなグループの方たちが北海道当事者活動連絡協議会、「北風の会」を組織して、代表がいることで、行政も何かあったときは当事者団体の代表に意見を聞くようにと変わってきています。

この「人権セミナー」は、セミナーを開催するだけではなく、積極的に海外の人との交流も行ってきました。北欧知的障害者会議に参加したり、インクルージョン・インターナショナルの会議に参加したり、あるいはNHK厚生文化事業団の研修でスウェーデンやアメリカに行ったりするようになりました。そのような経験を通して、視野を広める取り組みを行ってきました。スウェーデンのオーケ・ヨハンソンさん、オーストラリアのロバート・マーチンさん、ピープル・ファースト運動を行っているティア・ネリスさんたちの国際交流も行われるようになりました。

当事者が中心になる運営が進んでくると、支援者による実務的な支援は非常に少なくなってきました。質の高い支援が逆に当事者から要求されるようになります。ここ数年、支援費や自立支援法も含めて制度改革が進む中、ともに学習していく姿勢が非常に重要になってきています。ですから、さらなる情報提供が、逆に支援者にも要求されています。

そういう意味では、このセミナーを通して当事者が力をつけてきた、そして参加者の意識も変わってきた。多くの支援者の意識も変わってきた。行政も当事者への理解が増してきた。そして、北海道全体の本人の会の広がりにも貢献しています。

これが札幌の「人権セミナー」の事例報告です。細かい論議はまた午後にしたいと思います。以上です。(拍手)

花崎 光増さん、ありがとうございます。私も札幌におりまして、この「人権セミナー」を最初からずっと見てきていますが、「人権セミナー」は2月、札幌で一番寒い時期にそこを選んだような形で行われています。そのころ雪祭りもあるんですが、寒いからあまりセミナーみたいなものではなくて、会場も取れるし有利な点もあります。吹雪のような日もあります。でも、「今日は参加者が少ないかな」と心配するんですが、吹雪について朝早くからたくさんの当事者や家族、例えば民生委員さんのような方、とても幅広く集まってこられる、ものすごく楽しいイベントを毎年やっています。このごろは、どうせなら雪祭りも見えてお帰りになりませんかということで、雪祭りに引っかけてやったりもしていますが、光増さん、来年はいつか決まっていますか？

光増 第2日曜日です。

花崎 2月の第2日曜日ですので、お金もかかりますが、ぜひ足を延ばしてみてください。では今度は、いわきの本田さん、お願いいたします。

本田　本田です。よろしくお願いいたします。スウェーデンとオランダの話を聞いて、今日は少し安心して話ができるかと思っています。というのは、最近、今回の自立支援法でも、「支援」という言葉がたくさん言われていて、教育の分野でも特別支援プログラムなどいろいろ出て、「支援」という言葉が先に勝手に歩いて、何でもかんでも「支援」という言葉で世の中が動いてきていて、おかしいと思っていたところです。

先に支援について話をしていきたい思います。私がかかわってきた本人活動の「ふれんずトトロ」は、仲間と一緒に歩みながら変わってきつつある過程にあるということをまず伝えておきたいと思います。

いわきは福島の前田舎にある人口36万人ぐらいの中核市です。

いわきには、知的障害と言われる方が1,600人ぐらいいます。

いわきの駅のすぐ近くに、今私が勤めているセンターがあります。このセンターができたいきさつも後でお話ししていきたいと思います。

まず、「弱い」という言葉が気になっていました。「弱い」ということがどういうことなのかと。障害を持っている方と私たちが一緒に暮らしていくことは全然悪いことではなくて、むしろとても大切なことなのではないか、そこから何かが見えてくるのではないかという思いが基本的に私の中にあります。逆に社会が強さを求めているときに、本当に人間らしさが現れてくるのは、その弱さの中に見えてくるのではないかと思っています。しつこく「支援」ということを考えていく中で、まず私たち、そして、私がどんなことをしてきたかということです。

私は、入所施設に3年間いて、それからずっと二十年以上知的障害を中心にした障害を持っている方の生活支援をしてきました。始めは箱から出発しました。入所施設という箱の中でやってきて、そこから脱却していくにはかなりの時間がかかっています。始めから私が、そこが最高のところとは思っていたわけではないのですが、その中で仕事をしてきたという現実があります。

働く場での関わりも、「指導・訓練」から「支援」というものになりました。何が変わってきたかといいますと、施設では100%、自己完結的にその人の人生を握ってしまっていたが、お互いに関係し合って、頼り合って生きていく関係に変わってきたように思います。

支援費制度が始まる時に、「consumer（消費者）」という言葉が使われました。今でも使われていると思います。それが単に、私たちのサービスを買って消費していく相手でいいのかということなんですね。そうではなくてむしろ、大切なお客様としての「customer（お客）」という言葉のほうがいいのではないかと、いうことを、いわきに在住しているあるノルウェーの宣教師さんに教えてもらって、それから「customer（大切なお客さん）」なんだなということで、私の中では整理することができるようになりました。

そういう意味では、一方的に上からどんどん押しつけるということを彼らは求めているわけではなくて、お互いに関係しあいながら、交わり合って援助し合うということを求めているわけです。これは口で言ってもなかなか分かるものではなく、私もかなり苦労しました。特に相互作用ということと、無条件ということがどういうことかと。本当にどんなに大変な方でも、相手がとても大切な方として無条件に自分の中で受け入れていくことができるかということがかなり重要な問題で、私自身はかなり苦労して、一時的に悩んだ時期がありました。

そういうものが基本的に変わってきたのは、「ふれんずトトロ」という本人活動における彼らとのふれあいを通してでした。支えるということは一方的なことではなくて、相互に関係しあいながら行われるものです。その基本的な条件としては無条件に相手を認めていくことができるかということです。今までは、「できない」というレッテルを張って、「だからだめだ」と言ってきたと思います。「できない」ことを見るのではなくて、むしろ今持っている可能性、でき

ることへと視点を変えていくということがとても大切だと思えるようになりました。マイナスという発想から解放されていく自分を感じるようになりました。

その過程で、「愛すること」「信じること」「待つこと」という3つの言葉を教わりました。これは北海道家庭学校の谷先生の言葉です。もうお亡くなりになりましたが、谷先生がいつも色紙にサインをするときに書いていた言葉でした。これは私にとってとても大切な言葉です。どんな人でも相手を認め、愛していくということができると問いかけています。愛するためにはどうしたらよいのでしょうか。まず相手の可能性を信じることができるとかが問われてきます。そのためには、相手がどんなことでも変わっていくと希望を持って待つということが問われてきます。この三つの言葉を常に自問自答しながら動いています。どんな人でも愛して、相手が変わっていくことを信じて待つ。私から一方的にかかわっていくのではなくて、見守ってただ待つ、ということです。そのことが関わりの原点になると思います。そのような関わりへの努力をすることで、今盛んに言われている対等な関係が出て来るわけです。対等な関係はただ契約しただけで終わるのではなくて、相手が大切な存在として受け入れられているかどうか問われる、それが原点になるのだと思います。

そういう意味で、一番大切なのは、「本人支援」です。いつも本人の声を聞いているか。ともにいることができているか。ともに生きるということが言葉だけで終わっていないかどうかということです。自分の思い込みだけで共生という言葉を使うのではなくて、本当に一緒に歩んでいるのかということが問われているのだと思います。そういう意味で、「本人支援」とは何かを考えていく必要があると思います。まず本人の本当の声を聴き、自分の中で確認をしていくということがとても大切だと思います。その声を聞きながら、彼らの希望とか夢とか願いを実現していくために、支援者としてどうしていくかを考えていく必要があると思います。

はっきりしているのは、彼らの時間と支えている私たちの時間の速さが全然違うということです。私たちの時間に合わせていくのではなくて、彼らの時間に合わせて、私たちが待つということが必要だと思います。

そういう意味では、ロバート・マーチンさんを支援していた支援者の方も言っていますが、No. 2であることがとても大切だということが身にしみてわかります。だれが主役か。決めるのはだれか。私たちの支援は、本人がどうしていきたいのかの支援です。支援する側が先に動くのではなく、「寄り添っていく」ということが大切です。この言葉は、グループホーム学会でも去年盛んに出されていました。障害が重い人たちとのかかわりの中で、本人がどうしたいのか、どう考えているのか、それを見きわめていくのには「寄り添うこと」「寄り添い続けること」がとても大切だと思います。本人の必要性を見きわめ、考え、支える。このような支援者の支援のあり方を本人活動支援を通して教えられました。

では、いわきでどんな実践をしていたかということですが、いわきでは、「ふれんずトトロ」という会ができました。この会は、通勤寮OBが集まってできた会です。情報は提供しても、本人たちが手を挙げてやるというときまで何年かじっと待ちました。会ができてからは、全国の仲間と積極的に交流しました。仲間がどんどん発言しているのを見て、自分で自分の意見を言ってもいいという環境がトトロの仲間にもわかってきました。嫌なものは嫌と言うことができるようになってきたというのが、一番初めの大きな変化でした。

自分たちで行事などを考えて交流するということから、トトロの仲間の意識が変化し始めました。特に今は、トトロの仲間がリーダーシップを取って、県内の本人活動をあちこちつくるのを手伝っています。去年から今年にかけて3箇所ぐらい本人活動が立ち上がりました。それをトトロの仲間が交流を通して支えています。ただ単に楽しいことばかりではなくて、仲間を助けて連帯していくということを考えはじめる時期になっています。仲間からいろいろな

相談を受け、ピア・カウンセリング的な対応も行えるようになりました。

自分たちの活動体験から、自分たちの地域生活のありようを自信を持ってどんどん伝え始めています。そういう姿を見ていると、一人の人間として自分の人生を生き生きと生きていくことがどんなに素晴らしいことかを伝える伝道者のように思えます。彼らもそういう意識の中で今、動き始めています。

1995年にトトロができてから、いわき市内で障害を持つ人たちを雇っている職親会主催の「支援セミナー」でずっと発表を続けてきています。グループホームの世話人研修で、全国の本人が来て交流をしたり、「札幌仲間の会」とか、東京の「さくら会」とも交流しています。代表の佐藤君がスウェーデンに研修に行ったり、本人たちは海外旅行へ行ったりしました。1998年には、「全日本手をつなぐ育成会」北海道大会の本人部会に、初めて本人たちが参加しました。この頃から急激に変わり始めています。メンバーの一人が全日本の代表になったり、スウェーデンの本人2名との交流を行ったりしました。2002年にはサイパンに行きましたし、「トトロ」主催の本人向けの支援費の勉強会も行いました。2003年には、「いわき市の障害福祉計画への意見」をまとめて出したりもしています。そのほか、市内の福祉関係者への意見発表や、私が今勤めている法人の職員向けの意見発表など、いろいろと動き始めています。

今申し上げた「いわき市の障害福祉計画への意見」は、全国の育成会の国への本人意見を参考にして本人たちがまとめたものです。意見書には、私たちの意見をちゃんと聞いてください、地域で暮らしていると困ったことがたくさんあるので、地域生活支援センターをたくさん町の中につくってください、などが入っています。この意見書が出されることにより、私の法人に去年の4月から、今私が所属している「ふくいん」という生活支援センターが駅前につくられるようになったといういきさつがあります。また、ヘルパーさんや世話人さんがいろいろやってくれるけれども、自分たちのできないことを支えてほしい、プライバシーを守ってほしいということがあります。さらに、入所施設を出て私たちがみんな地域で暮らせるようにしてくださいというようなことも、一昨年11月に障害福祉計画をつくる前にトトロとして伝えさせてもらいました。家賃補助制度も彼らの声を聞いて作られるなど、確実に力をつけています。

今までのことを含めて、これからの問題として何が必要かということですが、本人の自己決定を支えるために「支援」というのは絶対に必要だと思っています。ただ問題としては、支える側が片手間でやっていくことができない状態になってきています。本人活動の支援は、仕事の片手間でやれるものではありません。そういう意味では、トトロばかりではなくて県内の仲間も含めて、NPO法人化を図り、本人・支援者とも専属スタッフを置くことを考える時期になってきました。今このことをトトロの仲間と話し合いをしている最中です。福島県では、障害者自立センターに対しての補助金が今の知事の才覚で出来上がっていますので、トトロのNPO法人化を念頭においた検討ができないものかと思案中です。

このように、きちんと支える手立てをつくっておかないと、かなりの問題が出てくるのではないかと考えています。本人がどんどん力をつけていって、さらなる発展をしていくときに、支える私たち支援者の力量が問われてくるからです。そういう意味で、本人活動支援が支援ということの本質を教えてくれていると私は思っています。そこを原点としてほかの生活や就労など、いろいろな場での支援ということを模索していくことが大切だと思っています。また、如何に実践していくかということが問題になってくると思います。以上です。

花崎 本田さん、ありがとうございました。本田さんは一方で、障害者支援センター「ふくいん」という、これはサービスを提供される事業所でしょうか。そこで仕事をされながら、また一方で「ふれんずトトロ」という、いわき市を中心とした本人活動グループの支援も続け

てこられたわけです。その中で、ご自分がつかんでこられた支援の本質のようなことを、今話してくださいました。本人活動の中でわかってくることを、サービス提供のあらゆる場面で行って生かしていくか、変えていくかということをお話されたと思います。

あと15分ほど時間があります。皆さんからのご質問とかご意見は午後に出していただきます。この15分の間に、4人の発言者の方相互に、今お互いの発言を聞かれて確かめたいこととか、あるいは自分が言い足りなかったこととかがあれば出していただきたいと思います。

では本田さんから。

本田 先ほど花崎さんからも出ましたけれど、スウェーデンもオランダも「コーチ」という言葉を使っています。「コーチ」というのは私たちのイメージでは、何かどんどん訓練して教育していくというイメージがとても強いのですが、「コーチ」という言葉を使う由来をお話いただければありがたいと思います。

アンデシュ 支援を提供する中で、いろいろな言葉が使われてきています。私が仕事をしているスウェーデンのイェテボリでは、こういうレッテルを張るような言葉はやめてほしい、レッテルは嫌だという気持ちが出されました。支援をする人たちに対してもいろいろなレッテルが張られてきました。そうしたいろいろなレッテル張りは、もうやめたいと考えています。何年もいろいろそういう形での規則やルールに伝統的にしばられてきました。それから先ほど「どんどん教育して」ということをおっしゃいましたが、「教育」という言葉もうやめたいと考えています。というのも、当事者活動をしている本人自身も教育者であるからです。教育者として私たちにいろいろなことを教えることもできるわけです。ですから、そういう意味でコーチの役割というのは、いろいろな人が持っている資源や可能性は何か、それを最大限に生かすにはどういうことをしたらいいか、それを最大限に生かせるように促進していくことがコーチの役割であるということで考えています。

ロール 「ミッション（伝えたいもの）」という言葉の説明の中で使いました。そのミッションというのは、私のミッションではありません。相手のミッションということです。相手のミッションは何かということを中心に理解して、それを受け入れていくことが大事であると考えています。例えば、そのコーチという言葉がスポーツなどでよく使われます。アイスホッケーの例を考えてみたいと思います。アイスホッケーの試合で、コーチというのは氷の上にはいません。コーチ自身はゲームをしていません。コーチがやるのは試合の状況をよく見て、休憩の時に「こういうふうにしたらどうだ」とか、あるいは「相手はこうだからこう調整したらどうか」とか、そういうアドバイスをして、それによってよりよい形でゴールを達成するということをする人です。コーチ自身がゲームをしているわけではありません。

「コーチ」という言葉は確かにスポーツでよく使われる言葉ですがLFBではそのような意味では使っていません。私たちコーチは障害を持つ人たちと同列の仲間ではありません。本人たちの思いを実現するために、さまざまなことを伝え支援していく時に、一緒に仕事をし共に楽しむ「仲間」という感じで一緒にやっていこうとすることもコーチのとるべきスタンスの一つなのではないかと考えています。

花崎 本田さん、今答えていただいたのでよろしいでしょうか。

では、光増さん。

光増 「コーチ」というのは表面的意味合いよりも、「支援からコーチへ」という質的变化を求めてきていることはよく理解できましたが、しかし、例えばスウェーデンでもオランダでも、「コーチング、コーチ」という言葉が、いつごろから「支援」から切りかわっていったのか。それはどうしてなのかというのをもう少し詳しく教えていただけませんか。

ロール うそを言わなければいけないと今思っています。(笑) どうしてかということとははっきりはわかりません。(いつごろからかという) アンデシュさんが私の人生にかかわるようになってから、たぶんそのとき初めて「コーチング、コーチ」という言葉を聞いたと思います。彼のほうがよく知っていると思います。

アンデシュ 私もわかりません。もうお互いに長く知っていて、最初にどうだったかということは私は全然覚えていません。いつからというのはあまり大事ではありませんが、でもどういう言葉を使うかということはとても考えます。これについての話し合いを何時間も、何日も、何カ月も、何年もやってきました。どういうふうにして呼べばいいのか、レッテルはとにかく嫌だという気持ちがあります。

既に「コーチング、コーチ」という言葉さえも、私たちの世界の中では古い言葉になっていると思います。とにかく「レッテルをやめたい。施設をおちこわせ」ということがあります。でも私たちの気持ちの中では、まだそういう施設からの従来の、伝統的な考え方にとらわれているところがあります。大事なものは、そこで何が起きているかということです。そこを見ていく必要があります。コーチでも何でも呼び方はいいんですが、人と人との関係の中で、何が起きているのか、それを見る必要があると思っています。そこで起きていることをどういう言葉で表現できるか。それが表現できる言葉ならば何でもいいわけです。我々はそこにともに生き、状況を共有し、同じ空気を吸って、目と目を見つめ合う。そこで何かが起きているわけです。そこでは、そういうことをフォーカスして考えるのであって、それが例えばスタッフと呼ぶとか、援助者または支援者と呼ぶとか、そこでのレッテルは重要ではありません。そこで何が起きているのかということが大事なことです。

我々はまだそういう施設の中のこと、従来の施設的な考え方にとらわれていますが、自分たちのハートで、それから自分たちの頭の中で何が起きているかをきっちりと見ていく必要がありますし、100%脱施設化ということを行っていく必要があります。

例えばだれかの家に行ってお風呂に入ったとします。その人がシャワーを浴びるのを手伝う。手伝う方法は何通りもあると思います。それをどう呼ぶかということは大事ではありません。私にとって大事なものは、自分は何のためにそこにいるのかということを理解して、「私だったらこうやってもらったらうれしい」ということを考えながら、そこでその人のシャワーをするのを手伝うということです。

花崎 「コーチ」という言葉をめぐって、結局人と人との関係のつけ方、あり方のようなところに話が深まってきていると思います。今時間がありませんので、その点については午後に回すとして、「仲間」という言葉ですね。その言葉にいろいろな議論がありながら、全体の流れの中で、仲間という自然な関係が必要なんだという認識ができてきたというお話がありました。それらについても午後、また皆さんが参加する形で討論を深めていきたいと思っています。

午前中のご参加ありがとうございました。

● 午後の部

花崎 では、午後の部を始めます。午後は皆さんからのご質問にお答えしていきたいと思います。その前に海外からのお二人の所属なさっている組織とそこでのお仕事について簡単にお話ししたいかと思います。最初にグルンデン協会のアンデシュさんからお願いします。

アンデシュ 私は、以前は所長という立場で仕事をしておりましたが、今はそうではありません。今ここのグルンデンのトップというのは、マネジメントグループという形で、当事者自身がやっています。私は、そういう人たちをコーチするというのが今の仕事です。今、当事者たちのマネジメントグループ、経営グループというか、実際の理事に当たる人たちがいろいろな仕事や調整ということをやっています。以前は私がそういうことをしていましたが、今は当事者たちがやっています。その仕事の中には、例えば雇用をどうするかとか、あるいはどういう政策でどういう考え方でやっていくのか、教育、情報、財政面などにわたってやっています。私自身はこのマネジメントチームに対してのコーチングと、ほかのコーチへのコーチングをやっています。

花崎 オンダリングシュタルクという組織ですが、サービスを提供する事業者という組織もありますし、あるいはピープル・ファーストのように当事者の運動体の中核をなす組織とかがありますが、どういう組織かももう少し話してください。

ロール まず最初に、私自身はフリーランスで仕事をしています。特にどこの所属というきっちりした立場ではなくて、フリーでの仕事をしています。ですから、アンデシュさんと一緒にスウェーデンで仕事をしたり、あるいはドイツやベルギーで仕事をすることもあります。でもほとんどはオランダで仕事をしています。私がオランダで仕事をするときは、今回日本と一緒に来ているLFBのディレクターから予算が私のところに割り当てられます。私はその予算の範囲内で必要に応じてそこでの仕事をしていくということです。現在私がオランダでかかわっているのは、36人の人たちです。ところで、オンダリングシュタルク連盟を略して本人たちはLFBと呼んでいます。

花崎 わかりました。ありがとうございました。

皆さんから出たご質問を大きく分けると、午前中のお話に関連したこと、スウェーデンやオランダの福祉全般のことに分かれていますが、最初に、午前中のお話をもう少し突っ込んだ形の質問から入っていきます。

ロール・コックさんに質問です。「コーチについて」ということです。コーチにとって大切なことの中で、「コーチは自分自身でなければならない、あるいはコーチは抑えることができないなければならない」と話されましたが、もう少し詳しく説明してほしいということです。それに関連して、コーチにとって大切なことをたくさん挙げられていましたが、一番大切なことを挙げるとしたらどれでしょうか。

ロール 私のいろいろな仕事の経験の中で、間違っただけにいる人をよく見てきました。私自身も自分のやってきたことを振り返ってみて、そういう間違っただけにいたということもあります。いつでも礼儀正しくきっちり仕事をするのは、決して不快なことではありません。

私は長い間施設で働いていろいろな人を見てきました。その人たちには進歩がありません。何もありません。兄弟のように、そういう人たちの言うことを聞く。「こうしたい」「OK、い

いですよ」「大丈夫ですよ」「できますよ」「どうもありがとう」という会話がずっと続いてきました。そういう人たちをずっと見てきて、私のほうからそういう人たちのところへ行って、「お名前は?」「何歳ですか?」「何かしてほしいですか?」「何ですか?」ということを行います。相手からは、「こういうことがしたい」と言われます。でもそれは、その施設ではできない。私は、そういう施設で仕事をしていて、そこに住む人から多くのことを学びました。そこにいる人たちに対してだれも何も言わない。グループで動く。それも違ったことをしている。だから、私としては、そこで仕事をしている中で、一体ここでは何が起きているのだろうか、自分自身で探すというか、模索する必要がありました。

あるとき大学で、こういう施設に住んでいる障害者の人たちのためのプログラムがありました。そこで言われたことは、「皆さんこういうことを知っていますか? 15 人の人たちが暮らす施設がありました。その人たちは1人1分、あるいは59秒だけソーシャルワーカーに対して何かを言うことができました。皆さんはこのことをどう思いますか?」私はそれを聞いて、とても動揺して衝撃を受けました。これはひどいこと、1日1分しか自分のことを言えないのか。それを聞いて私の気持ちが変わり、もう施設からは出ようと決心しました。ここは私のやり方ではできないと思いました。

1985年に、私は仕事で関わっていたグループホームの人たちと一緒にイギリスに行きました。一緒に行った人たちは6人でした。いろいろな作業所に行って仕事をしている人たちでした。イギリスでの状況を見て帰ってきたときには、もういっぱい資料がありました。イギリスに行って学んできた6人の人たちは非常に興奮していたというか、士気が高揚していました。「今の状況を私たちは何とかしなければいけない。手を貸してくれませんか?」と言われました。私も「手を貸します。一緒にやりましょう」と言いました。

この6人の人たちが70の質問をつくりました。その70の質問に対する答えを探そうと、半年間一緒に作業をしました。6人以外の人たちが一緒にやりたいとその輪が広がり、みんなと一緒にやっていました。6人がそれぞれ自分の人生を切り開くということで仕事をしてきました。そういうことについて仕事を終えてからの夕方6時半から8時半までずっと作業をしました。半年後、自分たちはもっとできる、自分たちのクラブをつくりたい、グループとしていろいろな作業をやっていききたい、ほかの人を助けるということもしたいという意見が出されました。この70の質問項目というのは、彼らにとって非常に興味のあることだったのです。地方自治体からの資金援助も得て、私の出身の州の郊外に行き、いろいろなアイデアについて検討しました。

2000年までの間に40の当事者活動をするグループがどんどんつくられていきました。2001年には、16年間で初めて自分たちのお金というものを手にしました。自分たちが使えるお金、今までもあちこちからお金を集めてきましたが、2001年には初めてそういうお金を手にして、こういうことが自分たちでできるんだと思いましたし、もっと多くのことができるんだということを感じました。これは非常に大事なことだったと思います。そしてオランダ全体でネットワークをつくり、オフィスもつくって、もっと多くのことを自分たちでできるし、自分たちでやりたいと思うようになりました。そして、実際にやってきました。

その結果、現在の組織であるLFB、オランダリングシュタルク連盟というのができていきました。全オランダで四つの支部がありますし、オランダの中心部に本部事務所があります。LFBの活動は、とてもワクワクするもので、施設で住むということよりも、ずっといい方法だと思っています。

花崎 ありがとうございました。

次の質問は、アンデシュさんとロール・コックさんお二人に向けての質問ですが、アンデシュさんにお答えいただきたいと思います。「コーチの手法について」です。例えば、「彼はこんなやつだ」「またかよ」などの思い込みを、「違うかもしれないな」と思いとどまるためのよい方法はありますか。それから、自分自身が不安定なときに、どう対応したらいいんでしょう。

アンデシュ　私は、はっきりこうだという答えを持ち合わせているわけではありませんが、今私が考えられる範囲で一応答えてみたいと思います。ただ、答えというのは自分で見つけるものですので、私としてはアイデアを提供することだけです。前にも言いましたが、人と対話をするときに、私たちは名前をつけたがります。「こういう人だ」という。こういう名前やレッテルを張ることによって、自分たちはこうしなければいけないのではないか、自分たちの役割はこうではないかというような、過小評価につながるような固定化された役割意識ができてしまいます。

そうした状況の中で、例えば「この人は精神的な障害を負っている」とか、そういう形でそこに名前をつけて、それに基づいて行動して、そしてそういう状況に対して自分がそれをコントロールしようというか、自分のものにしてしまおうとします。そういう考えに基づいて、そこで何とか解決しようとするわけですが、そのときの自分は、当事者本人ではありません。自分自身が一番楽というか、快適に感じる形で解決してしまおうとします。そうしますと、現実を拒否したり、否定してしまいます。そうすると、現実が歪められたり偽物になってしまいます。そこでよく起こされる過ちというのは、私たちが特別な人たちと呼んでいる、そういう人たちに対して特別な対応をしなければいけないと考えて非常に苦労します。

しかし、グループホームや職場などの自由時間の中にはごく当たり前の気楽さがあるはずです。私たち専門家はそうした当たり前のことを忘れがちです。私が仕事をする時、職場で満足感を高めるにはどうするか、そこで何が必要かというような状況で仕事をするようにしています。何が必要とされているか、どういうことを人々が求めているかを考えながらそうしますとそこで働いている本人たちはその仕事における意思決定に自分も参加したい、そして自分は尊敬されたい、自分の信頼性を高めたい、自分の仕事と環境の接点が欲しいということを考えていくようになります。そういうことを職場に対して求めていくわけです。それは普通に職場に人が何を求めるのかということと全く同じです。当事者も、例えばデイセンターでの作業や自分がやろうとする仕事に対して同じようなことを求めます。それが満たされればそれが満足というところにつながっていきます。

そういうことが普通のことなわけです。ノーマルなことを求められているのに、それをノーマルとはみんなが考えないで、特別な人のための特別なニーズというふうにとらえてしまうということです。それは私たちがある人たちを特別な人たちと呼ぶことに関連しています。例えば先ほどのシャワーの例ですと、私がだれかがシャワーを浴びるのを助ける。自分自身の経験として、自分がシャワーを浴びるととても気持ちがいいなという経験を持っています。しかしもしかすると、相手は、施設でずっとシャワーを浴びてきて、そこではコーチングとかヘルプということではなくて、「扱われる」とか、「こういう対応をさせられている」とか、そういう経験をしているかもしれません。こういう状況において私たちがすべきことは、私自身のシャワーは楽しいという経験を踏まえた上で自分に何ができるかを提供していく。自分でそういう状況をつくれると信じてやっていく、それがコーチングということだと思います。

花崎　ありがとうございました。時間が少々になってしまいました。あと二つぐらいで終わってしまうかと思いますが、手短かに答えてください。「仲間」ということを言いましたが、当事

者とコーチの給料に違いはあるのですか。

ロール 私は、この質問についてはわかりません。先ほど言ったように、私は連盟から予算をもらってその予算の中で動いているので、その中でコーチがどうか、当事者がどうかということで、どのくらいの給料の差があるか私は知りません。

アンデシュ 私から言いますと、障害者というか当事者たちは年金の手当をもらっています。ですから彼らが給料をもらっているということではないわけです。この年金手当ということからもっとサラリーという形で当事者たちがお金を受け取れるようにということで運動はしていますが、それは非常に難しい状況です。この質問にあった「仲間」ということと、給料は違うのではないかと思います。お金ということではなくて一緒にやっていくんだという気持ちを表すために「仲間」という言葉を使いした。例えばいろいろな仕事の中で、教員でも工場で働く労働者でも、オフィスで仕事をする人たちでも、給料は違っています。給料はそれぞれの立場や役割、どういう仕事をしているかによって違います。しかし給料が違って、お互いに「仲間」という呼び方をしています。それは一緒に仕事をする一員としての「仲間」だということでご理解ください。

花崎 ありがとうございます。今度、日本のお二人の方をお願いします。これは「花崎も答えろ」と書いてありますが、時間がありません。「花崎と光増さん、本田さんは、日本では本人活動が周りの人を変えたと言っていた」、確かに言っていました。「自分もそう思います。でも自分の周りを見た範囲では、例えば親の会などはそんなに変わっていないと感じています。」親の会とありますが、親の会も含めて「まわりをどうかえていったらよいのか」について、では光増さん。

光増 日本の本人活動が活発化したのは十数年前からですが、本人活動が活発になることによって変わったものもあり変わってないものもあります。変わってない一つの理由は依然としてとして入所施設が圧倒的に多く、入所施設からの地域移行が遅れているからだと思います。もう一つの理由は親が支援の輪に入ってくるために当事者の人たちを管理し、枠にはめてしまうということです。親が関与する事にいろいろな問題があるのではないかと思います。だから、「支援」とか、「コーチ」という言葉を聞いてすごく思いましたが、支援の質の問題とか、思想性の問題があります。そういう意味でいくと、まだまだ自立支援法の問題にしても、施設のあり方にしても、親の会の活動にしても、本人活動の支援というスローガンは掲げているけれども、実際は乖離しているとか違うのではないかと思います。個人的にもその辺が今の日本の現状かと思います。

本田 親の会にははっきり言って期待はしています。圧力団体として、国内でそれなりの圧力を持って本人を支援していく立場にあると思いますから。しかし、なかなかそれがうまくいかない。というのは、光増さんの言ったように、やはり支援の質をどこでどのように高めて行くか、ただ会があればいいというわけではありません。それぞれの会がどういう支えの中で動いているかということがとても大切なことではないでしょうか。どうすればいいかというよりは、その地域を変えていく活動をきちんとやっていくのが、一番遠いようで一番近いかもしれないと思っています。そういう意味では、福島では本人たちの仲間の輪を、「トトロ」だけではなくて県内を同じ意識で支えていくシステムをつくれないうちかと思って今動いているわけです。

そうした中で、親の会と一緒にリンクしていく可能性はたくさんあると思います。ただ単に本人の意見が大切だとかと言って支援者が表立って動くのではなくて、草の根的にやっていくのが一番近道であるかと思っています。

花崎 ありがとうございました。まだまだ紹介できないご質問がたくさんありましたが、次のセッションの時間が迫っておりますので、この分科会をこの辺で閉じたいと思います。

。私たちは、今日、「自分はあまり偏見を持っていないんだ」と思ってきた自分が、もう一度根本的なところから掘り起こされたように思います。「こういう人たちなんだから、こういう支援がいいんだろう」と一生懸命探っていたそのこと自身を壊してゆかなければならないということ強く感じました。そして、「現実を見なさい」とおっしゃっているその現実を、私たちはやはり見ていない。やはり色眼鏡で見てしまっているのだなとつくづく思いました。

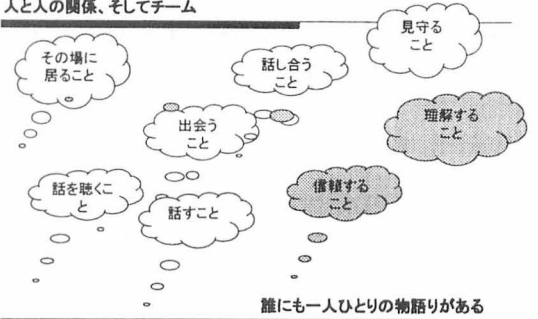
それでは、今日頑張ってくださったこの4人の講師の方と、それから大変わかりやすい通訳をしてくださった山口さんに、皆さんどうぞ拍手をお願いします。(拍手) どうもありがとうございました。

重要なキーワード

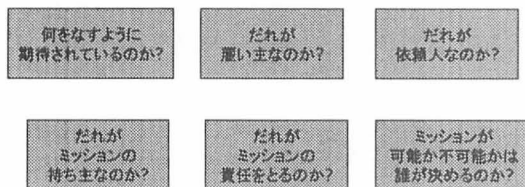
- 影響
- 自己決定
- 参画
- 信頼
- 尊重...

コーチということ

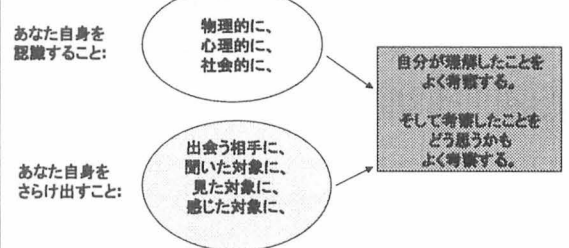
人と人の関係、そしてチーム



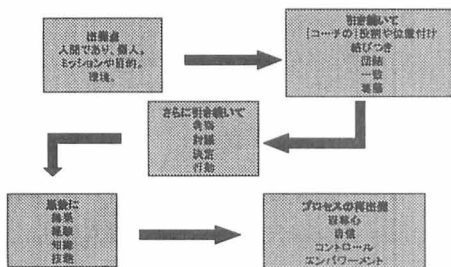
ミッションということ



認識ということ



プロセス



私たちが確実だと思えるただ一つのこととは、
私たちは、今ここにいたっているが、同時に、
いつも、そこから逃れたいと思ってしまう。
現在の中にふみとどまり、[借り物でなく]
ほんもので生き生きとしたやり方で他人と出会う
ということは、本当に大きな挑戦なのだ。



第1～第3 合同分科会

「話し合おう 私たちの夢と希望」

(企画者：花崎三千子、札幌みんなの会支援者)

(司会者：A、C)

A 司会をします。

B 大阪から来ました「パンジー」2」のBです。よろしくお願いします。(拍手)「パンジー2」の仕事をしています。マフィンの液をカップ、オーブンに入れて、オーブン番をしています。営業電話をしています。グループホームで、電動車いすで行っています。グループホームでは、プールとかテレビを見えています。僕の夢は、これからもグループホームに住みたいと思います。「ピープルファースト」に行ったら、たくさんの友達に出会います。たくさんの友達に出会うと、うれしい気持ちになります。これからもたくさん友達をつくっていきたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

C はい、ありがとうございました。大阪で「ピープルファースト」の会で、仲間と一緒に楽しんでいるということですね。はい、ありがとうございました。では、次に、Dさん、お願いいたします。

D 外人の人も日本の人も会っています。僕の夢の話をします。僕の夢は、「パンジー」、今、言ったから名前を言わなくてもわかりますよね、「パンジー」で、いつも電車とバスに乗って行っています。「パンジー」ではパン屋さんをやって、もう一個は、僕は1人でアパートに住んでいます。あともう一個は、皆さん、外人の人でも日本の人でもいいから、僕のアパートに来てください。ギョウザでもビールでも何でも腹いっぱい、冷蔵庫に入れておきます！ ちょっとごめんなさい。すみません、外人の人も日本の人もすみません。おれ、たばこ、いっぱい、苦しくなるまでたばこ吸いますが、いいですかね。いいと思う人、拍手してください。あれ？ これ、あかんわ。ごめんなさい。外人の人も日本の人も頑張って。ごめんなさいね。頑張って。たばこ吸いますから、ごめんなさいーい！

いつも「パンジー」のみなんで、いつもニコニコ頑張っています。仲よく頑張っています。あともう一個。いつも「わくわく」で、今はここにいないけど、EちゃんとFちゃんと頑張って、EちゃんとFちゃんとボウリングに行ったりパチンコに行ったり……。あ、パチンコは行かない。ごめん。(笑) ボウリング行ったり歌ったりやっているの。あとはボウリングは、Eちゃんは元気なのに、Fちゃんはぼんぼんぼんぼんストライク、15個もストライクを取られて、おれ、負けました。それでも、EちゃんとFちゃんは仲よく、おしりぶたれたり、頭ぶたれたり、毎日やっています。きょうは「EちゃんとFちゃん、行ってきます。東京に行ってきます」と言って、「行ってらっしゃーい」と、おしりぶたれました。これで僕の話が終わります。以上。終わりましたー！

C 大変元気で、先輩ですから、たばこが好きでお酒が好きで、パチンコが好きで歌うのが好きで、それは全部私もそうですから大丈夫ですよ。それでは次は、Aさんです。お願いいたします。

A Aさんです。きょうはGさんとAさんをよろしくお願いします！(拍手)お仕事は、「わくわく」の店もやります。よろしくお願いします！ 夢は、トラをやります。よろしくお願いします！

C トラになりたいんですか。

A はい。(笑)

C トラになって何をやるの？

A けんか。けんかをトラは、やります。よろしくお願いします！

C だれとけんかするんですか。

A キリン。キリンさんがけんかをして、トラさんがけんかをしました。

C トラとキリンはどちらが強いんですか。

A トラ。(笑)

C みんな、笑っていますけど。

A 皆さん、聞いてくださーい！ 今日トラさんがけんかをして、けがをしました。

C まだいっぱい時間があるけど、しゃべりたいことをどうぞ。

A どうしよう。「かつぼ」のヘルパーさんと、Hちゃんとヘルパー、足にけが……、「かつぼ」に、ヘルパーさんと電車に乗って、ヘルパーさんと一緒に、浦和の県庁に行きました。よろしくお願いします！（拍手）

C 「「かつぼ」というのは、埼玉県庁の中にある障害者団体が運営しているお店ですね。そこで働いている話をしたんだよね。どんなことをしているんですか。

A 「かつぼ」のレジで、ヘルパーさんと一緒にアイスとジュースを売りました。弁当のピラまきに行きました。

C いろんな人が交代で行っている中で、彼女のときが一番売り上げがいいんです。このノリでやっているの。ですよね。(拍手) あとはいいですか。「もんてん」の話を。

A 「もんてん」には、IさんとJさんと、IさんとKちゃんが住んでいる家だから、203の部屋に泊まりました。よろしくお願いします！

C 「「もんてん」というのはグループホームですね。Aさんはグループホームで生活していて、今、入居者の人の名前を挙げました。

A 「ぶあく」は店番をして、HちゃんとLさんと、M君の母さんと店番します。よろしくお願いします！ いいですか。いい？ (拍手)

C よろしいですか。看板娘でいろいろなところで販売しているそうですので。あと、何かすごい楽しそうですね。毎日がね。よろしいな。何か皆さん明るくて、大阪のおじさんも盛んに喜んでらっしゃいますけど。続きまして、Nさんから一言お願いいたします。

N はい。「わらじの会」のNです。私は1人暮らしは20年なんだけど、やってみたいのは世界一周をしたいな。それで、それぞれのドレスを着てみたいなのということと、あともう一つは、Aさんも私も、そこにいる車いすの男性も、埼玉の武里団地に住んでいる。それで、団地周辺や近くの住宅に住みたい、なれたらいいな。その後、私は社長のオーナーで、左うちわでやってみたいと思います。以上です。(拍手)

C Nさんでした。世界旅行に行つてドレスアップして、すばらしいですね。それでは最後になりました。Oさんから。国立（くにたち）からいらっしゃってくださいました。どうぞ。

O きょうは国立（くにたち）から来ました。国立（くにたち）から来ましたOです。国立市では、障害者の福祉計画を見直すという策定委員がありまして、その中の委員になって、この立教大学の河東田先生が部会長になってくれてやっている会であります。

自分の夢は、子どもが大好きなので保育園の保育士になりたいと思っています。昔から子どもが大好きなので、その子どもが大好きなのを自分の仕事にできたらいいなと思っています。今は、国立市の中で障害も問わないで、いろんなところに子どもがいれば子どもと遊んで、帰りに子どもに「またね」って言われて、それがやっていて楽しいです。そういうのもあるんですけど、昔、おれが小さいころにうちの隣にいたお兄ちゃんがよくおれの面倒を見てくれたので、おれもそれを見て子どもが大好きになって、子どもの何か役に立てたらいいなと思って、今は介護福祉士アンド保育士を目指しています。以上です。(拍手)

C すごいですね。小さいころお兄ちゃんが面倒を見てくれて、それが今の夢につながっているってすばらしいなあとと思います。きょうは急遽だったので、あんまり皆さんもお話できないで、「やってね」と言っても、こんなに話してくださる皆さんなので、すごいなあとしました。時間的に、もうちょっとあるんですが、Pさんはヘルパー2級を持ってらっしゃって、頑張つてらっしゃるんですよ。こういう会に出てきたりしてお話もなさるんで、一言だけちょっとお願いします。

P はい、Pです。すみません、突然振られたんですが、ちょっと1人ずつ質問をしていいですか。Bさーん、聞こえてます？ ちょっと質問します。Bさんは、「パンジー」で一番好きな場所はどこですか。仲間といるところかもしれないけど、仲間と何をして楽しいですか。

B 「パンジー2」で、いろんな営業に行ったりとか、マフィンを販売に行っているところとかが楽しいです。

P はい、ありがとうございます。次、Dさんが、何かすごい、さっきから笑わせてくれたんですが、Dさん、質問していいですか。

D はい。

P Dさんは、ちなみに、いろんな趣味がありますね。一人暮らしで一番よかったことを教えてもらっていいですか。

D 今言ったのと同じように、僕はアパートで一人で寂しいんですよ。夜はあんまりいないんだよ。寂しいんだよ。だから、外人の人でも日本人でもいいから、もし来る気があったら、男でも女でもいいから。

P はい、それじゃあ、Dさんと、ぜひ友達になってください。この機会に。

D 寂しいんですよ。来てくださいよ。一緒にビール飲んで、一緒に寝ましょうか。(笑)

P はい。だれでもいいので、ここで……

D だれでもいいよ、本当に。今日も帰っていったら、おれ一人になっちゃうんだよ、本当に。寂しいんだよ。どうもすみません。

P ありがとうございます。Dさんと個人的に友達になってくれる人は、後で個人的にDさんを探してなってあげてください。お願いします。(拍手) 次、Aさんに聞いてもいいですか。元気なAさん。トラさんになりたい。私、ちなみに豚になりたいんです。Aさんはどうしてトラさんになろうと思ったんですか。

A Aさんは、キリンさんと一緒にけんかしたいです。

P どうしてけんかしたいんですか。

A Aさんとトラさんがけんかをして、キリンさんが首を切っちゃった。

P はい、わかりました。ある意味、いじめに近いという。はい、ありがとうございます。皆さん、怖い話なので、いじめたんですね。早く言えば。それじゃあ、次の質問いいですか。Nさんに聞いてもいいですか。

N はい。

P 何か一瞬、動物の話になっちゃったから、動物の話から飛んで。Nさんに質問します。Nさんは世界一周に行きたいって、私もそれは同じなんですが、ちなみに飛行機で行きたいですか。船で行きたいですか。

N 飛行機です。飛行機なんですけど、私はカナダとオランダに行ったんですけど、オランダはチューリップと風車を見たくて行ったんですけど、ちょっとその場でトラブルにあって、一人で帰ってきて苦い経験にあったんです。

P はい、ありがとうございます。すごいですね。次、Oさん。何かすごい現実の将来の

夢で、保育さんになりたいと。男性の。保育さんだっけ。

O 保育士。

P 保育士になりたい。子どもが好きなんですか。

O はい。

P ちなみに、今まで子どもさんと何をして遊びました？

O 子どもとはいろんなことをして遊んで、例えば鬼ごっこだったり、今風の遊びなんで、おれは知らないの子どもに教えてもらって、そればかりの遊びをしています。

P はい、すごいですね。何か皆さん、将来がいっぱい。今、ありがとうございました。会場の方でちょっと質問したいという人、いますか。この中で。いませんか、だれか。あ、手を挙げた。はい、では、彼女に。今、私がおりて。

C トラさんとキリンさんは、なぜけんかしたいんですか。

A トラさんがキリンさんとけんかをして、もうだめ。(笑)

C トラって強い？

A トラは強いよ。

C Aは今、強いのか？

A トラさんがキリンさんの足を投げた。(笑)

C はい、ありがとうございます。そろそろ時間になりました。活発な意見が出され、ゆかいな仲間たちと話ができました。25分間ですけれども、本人の声を聞くということもなかなかないので、こういうように楽しい人ばかりです。でも、保育士になりたいという方もいらっしゃる。皆さんで暖かい拍手をよろしく願いいたします。(拍手) ありがとうございました。では、終わります。

●

分科会 4

「地域移行と地域生活支援を考える」

- 1 部 講演 1 : レスリー・アイリーン・チェノウエス
(オーストラリア・クイーンズランド大学上級講師)
講演 2 : 小林繁市 (伊達市地域生活支援センター所長)
- 2 部 研究報告 : 杉田穂子 (立教女学院短期大学助教授)
シンポジウム
シンポジスト : レスリー・アイリーン・チェノウエス
小林繁市
杉田穂子
コーディネーター : 河東田博 (立教大学教授)

●午前の部

河東田 この分科会には日本の地域移行に大きな影響を与えてこられた北海道伊達市の小林繁一さんにおいでいただき、新しい伊達での動きを報告いただきます。そしてオーストラリアにおける地域移行と比べながら今後の日本における地域移行の問題を一緒に考えてみたいと思います。

では、まず最初に、オーストラリアからおいでくださいましたレスリー・アイリーン・チェノウエスさんに、オーストラリアの脱施設化の様子をお伺いしたいと思います。その後で、小林さんにお話をいただきます。午前中は、このお二人のお話の内容に関するやりとりをさせていただいて、午前中を終えようと思っています。昼食後は、私どもが行ってきた研究の一端を杉田さんから報告させていただき、ディスカッションを行っていききたいと思います。

それでは、レスリーさんから、オーストラリアにおける地域移行と地域生活支援の実態についてお話していただきたいと思います。それでは、よろしくお願いいたします。

レスリー こんにちは。日本語ができませんので、通訳を介してお話をさせていただきます。まず、話に入ります前に河東田先生にお礼を申し上げたいと思います。今回私を日本に呼んでいただきましてまことにありがとうございます。実際日本に来るのは私は今回が初めてでございます。日本の印象としましては、非常に心の行き届いたおもてなしをしていただける国だと、しかし人口は多いなという感じがいたしました。この後、障害者に対する支援ということで、日本ではどのようなになっているのかをいろいろ議論をさせていただくことになっておりますが、それを楽しみにしています。

オーストラリアのブリスベンという所に、クイーンズランド大学というものがございまして、ここで私と河東田先生とともに研究をいたしました。内容は、脱施設化、そしてコミュニティでの生活というものでした。私の場合、日頃研究調査を行っている地域は、僻地とか農村と呼ばれるようなところが多いのですが。もちろん、ワニを相手に調査をしているわけではありませんが。(笑)

私が今日お話いたします内容は、オーストラリアにおけます施設の歴史ということ。それから、どのような形で施設を閉鎖するようになってきたのかということ。さらに、コミュニティでの生活の現状はどうなっているか。最後にコミュニティへの地域移行の中で私どもが学んだ教訓をお話したいと思います。

私どもの施設の歴史を振り返ってみてみますと、そこには英国の、かつての英国の植民地であった地域で行われたことと類似点がたくさんございます。やり方としては、非常に巨大な施設や病院をつくるということを19世紀にやりました。そこでチャリティーに基づいて、人を管理するような形の施設をつくってきたわけです。こうした施設には、知的障害の方々、そのほかの障害を持つ方たちが、精神病を患っている人たちと一緒に生活をしていました。それから、多くのチャリティー組織がつくった施設にも知的障害者がおりました。チャリティー団体は、ほかに脳性麻痺の人たち、多発性硬化症などの障害を持った人たち、病気を持った人たちの施設を作っていました。こうした施設は非常に大きく、都市から離れた遠隔地につくられ、運営の仕方が極めて管理的でした。多くの障害を持つ人たちが、家族とずいぶん離れたところで生活することになり、そこで働く医師やスタッフたちも人里離れた施設で仕事をするようになりました。

オーストラリアにおいて、脱施設化、コミュニティでの生活が始められたのは1970年代です。脱施設化をもたらした要因は、いろいろありますが、これについてはこの後述べていきたいと思っています。当時は、暴露記事とか、スキャンダルと呼ばれることがたくさん発生し、施設に収

容されている人たちが虐待を受けたり、無視をされたり、顧みられないという状態が明るみになってきました。一般の人々の目にもとまるようになってきました。オーストラリアの脱施設化に大きな影響を与えたのは、スウェーデンのベンクト・ニエリの考え方、特にノーマライゼーションという考え方、それからヴォルフエンズベルガーの考え方でした。

ノーマライゼーションの考え方、そして、脱施設化という考え方は、人権にかかわる問題だと考えられるようになってきました。言い換えれば、施設にいるということは、非人間的な行為であり、コミュニティの中で生活することがより人道的で、人間にふさわしい生き方であるということになったわけです。そして、大きな社会的な圧力も働くようになりました。それが親の会でした。親の会は、強力なロビー活動、議員とか政府といったところに圧力をかけるというようなこともやりました。しかし親だけではありません。それ以外にも、スキャンダルや暴露内容に怒りを持った人たちがおり、施設変革とコミュニティへの生活の移行をと大きな圧力をかける人たちが出て来ました。

それから、ここでぜひ申し上げておきたいのは、1986年に成立いたしました障害者サービス法についてです。この法律は、ケアは個人のニーズに合わせて行われなければならないということ、発達の保障ということ、コミュニティでの生活支援といったものを柱にしております。障害者サービス法は極めて重要な法律です。この法律ができたことによって、政府からの資金を受けているサービスというものは、すべてコミュニティをベースとしたものでなければならないという義務が発生したということです。もちろん、この法律制定以前にも脱施設化の動きは一部ございましたが、この法律ができたことによって大きく前進をしました。

それ以外にもいろいろなことがありました。虐待に関する政府の調査も行われました。それからサポートの状態がどうなっているのかという政府の報告書も出されました。それに加え、知的障害者が収容されている施設で、大きな火災が発生するという悲劇的な出来事がありました。

ぜひ念頭に置いていただきたいのは、オーストラリアにおける脱施設化は、25年以上前に始まって、現在でも継続中のものであるということです。そして、実行されたり停滞したり、また実行したりということを繰り返しているものだということです。今、申し上げましたように、脱施設化は長年にわたって実行されてきましたが、活発な時期、停滞の時期があるということから、私は、歯磨きチューブのような実行の仕方と申し上げております。すなわち、歯磨きのチューブから歯磨き粉が出て、とまってまた出てくるように、非常に盛り上がる時期があったかと思うとまた停滞する時期があると、そういう例えをしております。

現在政府が考えております施設というものは、次のように定義されております。つまり、長期定住型で、大きな土地の上に立てられ、24時間サービスが提供され、ベッド数でいうと20もしくは20以上ある、そういったものを指して施設と呼んでいます。知的障害者の総数は4万人。そのうち施設に収容されている人たちは5,000人を切っています。統計上の問題はありますが、今申し上げたようなこの数値が現時点で最も正しい推計値と言われております。

各地域を見てもみると、タスマニア、西オーストラリア、それからノザンテリトリーと呼ばれる北部地域、そして首都地域のあたりには全く施設はありません。それからビクトリア州、クイーンズランド州はほぼないと言っていいぐらいです。クイーンズランドで施設に住んでいる知的障害者の数は150人です。あとの州を見てもみると、ニューサウスウェールズ州ではほかの州とは若干状況が違います。こちらでは施設を全部閉鎖するということをこれまで過去に何回か試みましたが、まだ施設に残っている人たちがかなりおります。そのため、ニューサウスウェールズ州政府としては、2010年までに全施設を閉鎖しようという計画を立てて取り組みを行っております。

では話をコミュニティでの生活に移したいと思います。現在のオーストラリアの状況はどう

かということでお話いたします。オーストラリアでの地域でのサポートの仕方ですが、住宅を変えるというよりもむしろその障害者の周りに支援を提供するという形で進んでおります。現在の状況ですが、普通の家に住んでいるという割合が多くなっています。公共住宅を賃貸で借りている人もいますし、自分で家を購入したという人もいます。ただスケールメリットを生かすという意味から、何人かが共同で住宅に住む、いわゆるシェアをしてそれによって一緒にサポートを受けようという形もたくさんあります。

現在のコミュニティでの生活の主流はどうなっているかということ、やはりグループホームという形になります。クイーンズランドで見えますと、グループホームの人数は3～4人ぐらいが最高。そのぐらいの人数で住んでいます。一人暮らしをしている人もいます。家が2軒続きになっているところに住んで一緒にサポートを受けている人たちも見られます。

私どもは何回もいろいろな調査研究をやっております。コミュニティに生活することによってどういう結果が出ているのかを整理してみました。私の同僚の1人でありますルイジオンという人が最近行った調査によりますと、やはりコミュニティで生活をする方が、施設で生活するより優れた結果が出ています。適応行動の点でも選択肢が増えるという点でも優れています。生活の質といった点から見ても、コミュニティで生活するほうがよりよい生活になっているということが結果でわかっております。多くの人たちが、よりフォーマルなサポートを受けています。有料のサポートを受けている人もいれば、インフォーマル、家族も参加するような形でのサポートを受けている人もいます。長年施設で暮らしてきたため、家族とは全然接触がないという方もたくさんいます。そういった方々は、有料のサポートを受けていることが多いようです。

いろいろな障害を持った人たちがコミュニティで生活をするようになってきましたので、それに伴うサポートの需要が非常に高まってきています。

オーストラリアでは、コミュニティでの生活をいろいろと支援をしてきましたが、コミュニティでの生活をサポートするには何が必要かということでの教訓も学びました。そのプロセスの中でいろいろな失敗をし、それによる教訓も得てきましたので、そのお話をしたいと思います。最近では、当事者を中心に据えたアプローチへのニーズが高まってきております。これはサービスの計画段階においても、提供する段階においても当事者を中心に据えたアプローチでなければいけないということです。ご承知のとおり、当事者中心型のアプローチというのは北米に端を発しており、この考え方が普及したのは80年代の後半でした。いろいろな考え方があるとは思いますが、サービスの計画実施にあたっては、当事者を真ん中に据えて行うという基本路線があります。

イギリスの研究結果を見ても、当事者中心のアプローチが、コミュニティでの生活を行っていく際極めて効果が大きい優れた方法であるということが証明されております。当事者中心の考え方というのは、障害者自身が自分たちがどうしたいか、選択肢は何かをきちんと言えるということが大事ですので、そういった観点から見ても、コミュニケーションということが当事者中心のアプローチの中では大きな意味合いを持ってくると思いますし、とても重要です。

計画をつくるという段階においても、できる限り家族が関与することが必要です。社会的なネットワークも用意することや当人をよく知っているスタッフも計画に深くかかわることが重要です。家族に計画の段階に参画してもらうことも極めて重要です。

私どもが調べましたところ、多くの親御さんたちが最初はコミュニティで生活することに対して疑念を持ったり、不安を持ったりするわけですが、だんだんコミュニティでの生活が行われ、慣れてくる中で、そのよさに気づいていただけるようになってきます。私がかかわ

っていたある施設でも、コミュニティ生活に移行することになっていました。そのとき施設を出て行きたいと願った人たちが150人おりました。最初、地域移行を求めたところ、親御さんの90%が地域での生活はできないとおっしゃいましたが、実際に地域移行が始まって2年位たちますと、やはり施設のほうがいいと言っているのは28家族だけになりました。このような気持ちの変容は、ニュージーランド、カナダ、米国の研究結果でも明らかになっております。従いまして、やはり、両親と私どもが手を携えてコミュニティでの生活の計画を一緒になって練り上げていくことがとても重要だということです。

次に考えなくてはいけない問題は、資源を施設で使うという形態から、コミュニティでの生活のサービスにどう移管していくかということです。地域移行・移管というのが極めて複雑で難しく注意深く慎重にやらないといけません。地域移行を実行していく過程では矛盾したことも起こってきます。在籍人数は少なくなっても、依然として施設という巨大な建物を運営していくのには、ものすごいコストがかかっているわけです。ですから、ごくわずかな施設に住む人たちに対して、膨大なコストを一方でかけながら、なおかつ限られた資源を、コミュニティでの生活や地域移行のほうに割り振っていくということをやらなくてはならないわけです。

このようなときに必要となってくるのは、二重の資金の裏付けがなければいけないということになります。二つのモデルに対して同時に予算をつけてくれということを政府に説得するのはなかなか困難で、場合によっては政府をうまく説得して予算をつけてもらったこともありますし、説得したけれどだめだったという事例もあります。それからもう一つ、資源が足りないということから、バックフィリングという現象が起きてきます。これは親とかそのほかの人たちからの圧力で、施設から人が出た後、空いたところにまた新しい人を入れてしまうということをやることがありますが、そうすることによって、施設の閉鎖が難しくなります。実際にニューサウスウェールズ州で、バックフィリングが起きました。そのために施設の閉鎖が難しく、今でも施設が残っています。

それからもう一つの問題点は、これも私どもは苦勞しているわけですが、単に地域社会に障害者が存在するというのではなくて、地域社会に参加をしているということを確実にしなければいけないということです。単に地域社会に住んでいるだけではなくて、障害者が地域に積極的にかかわっていかれるようにするためにはどうするかということです。私どもがいろいろと調べてみてよくわかったことは、障害者は単に物理的に地域社会に統合されたり、地域社会に存在するということは極めて簡単で、社会的な意味で地域社会に溶け込んでいくというほうがはるかに難しいということに気づきました。それから、二つ目の問題点は、時間がかかるということです。政治家は何とか早く結果を出せと言います。きちんとした関係をつくっていくということになると時間がかかるということです。

この意味するところは、コミュニティでの生活ということになりますと、コミュニティの側の参画も必要になるということです。コミュニティ側の姿勢も変わらなければいけないし、アクセスもきちんと確保されなければいけないということです。そして障害というものは優れて人権の問題であるという認識を持ってもらうことが必要になってきます。それからもう一つ申し上げておきたいのは、スタッフの教育訓練の問題です。施設でこれまで働いてきた方というのは、持っている技能や知識というのが、障害者のコミュニティでの生活を支援する上であまり役に立たないということです。コミュニティでの生活を支援するために、スタッフに教育訓練を施すか、全く新しい人を雇ってくるということが必要になってきます。

オーストラリアで施設を閉鎖するというに関して調査をしてわかったのですが、専門職グループからの反対、場合によっては労働組合からの反対が強いということがわかりました。自分たちの将来の雇用がどうなるかという懸念がありますから、この点を乗り越えるのもなか

なか難しい問題です。また、技能・スキルというのは大変重要ですが、最も重要なのはやはりスタッフの価値観や態度、心の中で障害というものについてどう考えているかということだと思います。従って、こういった心のありよう、あるいは態度というものがしっかりしている人であれば、技能は後から身につけることができると思います。

まとめに入りたいと思います。この問題は二つの次元で考える必要があるのではないかと思います。一つは個人のレベルです。どういったニーズがあって、どういったサービス組織があって、どのようなスタッフの教育訓練をやらなければいけないのかという個人のレベルでの対応です。もう一つはコミュニティやシステムの次元でどう考えるのかということです。これはコミュニティの側の障害に対する態度といったものやサービスの組織全体をどうしていくか、アクセスをどのようにしていくか、障害を人権の問題としてどうとらえていくのか、差別をしてはいけないという次元でどうとらえていくのかということです。

さらに2、3点つけ加えさせてください。コミュニティでの生活や地域移行を進めるときに注意しなくてはならない点が幾つかあります。一つは、施設を閉鎖したけれども、また別の施設をつくってしまうことにならないかということです。コミュニティで生活をするといった場合に、生活の形態、サポートの形態というのはさまざま考えられます。そういう状況の中で考えられることを二つ申し上げたいと思います。一つは、形を変えた施設化です。すなわち施設文化がそのままグループホームに移行してしまうという形で、これでは十分な変革が行われたとは言いがたいわけです。

次なる問題は再施設収容で、施設を出た、ところが地域社会で十分な支援が得られないといったような場合に、特に軽度の知的障害を持った人たちが、支援がないがゆえに刑務所暮らしをしてしまうというようなことになりかねないということです。この問題が起きているのは、特に早い段階で施設から出て行き、障害自体は軽かったけれども、家族と離れて暮らしていたがゆえに十分なサポートが得られなかった、ゆえにそういうことになってしまったという人です。

最後に申し上げておきたいことですが、施設を閉鎖し、地域社会の生活に移行する際、さまざまな意見の相違が見られ、対立を生みかねないということです。いろいろな思惑がそこに入り込むため、スタッフや労働組合がそれに対してどう対応するのか、コミュニティの側がそれをどう受けとめるのか、政治家がそれに対してどう反応するのか、立場や考え方によって賛成、反対に分かれがちな問題です。既にクイーンズランドでも、圧力が発生しておりまして、小さなセンターのようなところに人を収容したほうがいいのではないか、特に強度行動障害のある人たちは、センターのようなところに収容したほうがいいのではないかという働きかけが既になされています。

それから、地域の生活に移行するいうときに、私どもが教訓として学んだことは、権利擁護が必要だということです。これは本人の権利主張による場合もあるでしょうし、ほかの人が当事者の権利を擁護するという形もあるでしょう。そういった点ではオーストラリアでは一部進歩は見られましたけれど、まだまだ課題をたくさん抱えているという状態です。特に、私どもが大きな問題を抱えている分野を二つ挙げるとしますと、一つは、非常に重度の障害を抱えた人たち、それから問題行動のある人たちをどうサポートしていくのかという課題があります。それからもう一つは、非常に重篤なというか、複雑な医学上のニーズを抱えたような人たちにどう対処をしていくのか、身体障害であれ、知的な障害であれ、例えば食事の援助といったようなことについても多くの援助を必要としたり、あるいは医学的にもさまざまな援助を必要とする人たちへのサポートをどうしていくかという問題が残っています。

全体をまとめますと、オーストラリアにおける地域移行は、しっかり根づいているとまとめ

ることができます。ただ進歩があったと言っても、まだ問題を抱えているので慎重な姿勢は必要だと考えております。そして、皆さん方もそれぞれの分野で頑張っていただきたいと思います。そして、地域社会への移行、地域移行というのはほんの小さな一歩から始まるんだということも申し上げておきます。ありがとうございました。(拍手)

河東田 とてもわかりやすいお話をしていただきました。どうもありがとうございました。地域移行に関する実態と課題の整理をきちんとして下さいました。また、地域移行をした後に見られるさまざまな問題について具体的に指摘していただきました。形を変えた再施設化の問題、再入所化の問題も指摘されました。本人支援の大切さや権利擁護の問題も指摘され、とても共感を持ってお話を伺うことができました。

それでは、レスリーさんにもう少し聞いてみたいことがございましたら、質問なさって下さい。

A 国立の「NPO法人くじら雲」というところで、グループホームと地域での活動の支援を行っているAと申します。日本の場合は年齢が高くなった家族と年齢が高くなった当事者が一緒に暮らしている状態から抜け出せないという現状がありますが、オーストラリアではどうでしょうか。

レスリー オーストラリアでもそれは大問題です。特に、高齢の親御さんが自分の子供たちの将来についていろいろと心配をなさっています。正直言いまして、私どもはこのことに対して十分に対処してこなかったのではないかと反省しております。ただ高齢の親御さんのためにさまざまな支援体制を用意しようと検討をし始めました。新しいプログラムが作られようとしておりまして、将来への道を拓く重要な指針になるのではないかと思います。このように、親御さんと協力をして子供のためのコミュニティライフについての計画を立てていくことになりましたが、この取り組みの中で、いわゆる建物自体をつくることよりも、地域との関係をつくっていくということのほうが重要であるということに気がつき始めました。特に、年齢が高くなった知的障害者に対して多くのスタッフたちがどのように対処をしていけばいいかということを考えるようになってきました。高齢の知的障害者たちは、実はまだ施設に住んでいる人が多いのです。

河東田 ではもうお一人。この方でレスリーさんへの質問を終了させていただきます。

B 浦和大学のBと言います。アメリカとオーストラリアは先進国の中でも訴訟社会だと言われております。日本とその辺が違うのではないかと思います。先ほどの脱施設化を進めた力の中に、そういった訴訟社会という影響はあるのでしょうか。

レスリー 正直言って、オーストラリアはアメリカほど訴訟好きな国ではないと私は思います。確かに地域社会でサービスを提供するということになりますと、やはりリスクから自分の身を守らなくてははいけません。そのため、訴訟されないようにしなくてははいけないという意識が出てきます。ですからコミュニティサービスを提供している側でも、いろいろと訴訟の問題というのは考えなくてははいけないということは確かです。私も、その件に関して調査研究を開始したばかりです。コミュニティでの生活というのはもろにリスクを負う行為ですから、訴えられるということとのリスクは当然考えていかなければはいけないわけです。でもオーストラリア

では、アメリカほど訴訟が頻繁にあるわけではありません。ただ、今後訴訟が増えていくだろうとは思いますが。

B 米国の訴訟にかかる費用は実際とても多いのです。10%以上あります。オーストラリアもよく似たものです。けれども日本はほとんどない。ですからそういう訴訟社会が脱施設化に大きな影響を与えているのではないかと考えました。いかがでしょうか？

レスリー そのとおりだと思います。おっしゃるようにオーストラリアでも訴訟費用は高まっておりその影響は大きいと思います。

河東田 この問題につきましては彼女もその研究を始めたというところのようですから、別途個別的にやりとりしていただければと思います。

それでは時間がまいりましたので、小林さんから北海道伊達での取り組みの様子を、お話しいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

小林 ご紹介いただきました小林です。今、お聞きしたレスリーさんのお話によりますと、オーストラリアでは知的障害のある人たちが4万人ぐらいて、そのうち入所施設に暮らしている人が5,000人ぐらいいるということです。8分の1ぐらいいの人が施設で暮らしていることになります。日本では、知的障害のある大人の人達は30万1,000人いると言われており、そのうち入所施設で暮らしている人は11万7,700人、34.7%。約3分の1の人達が入所施設で暮らしているということになります。

オーストラリアでは、1970年ぐらいいから入所施設を削減するという方向を打ち出してきたということですが、日本では、国はもう新たな入所施設はつくらないと言っていますが、減らすという方向を明確に打ち出してはいません。ただ、宮城県や長野県など幾つかの県で施設を減らしていくという方向を明確にしているところもありますが、国としてはまだそういう方針が出されていないのです。オーストラリアと比べて、30年遅れで日本は、やっとう新たな施設をつくらない、これからは減らしていこうという、やっとうそんな段階に入ったのかなと、お話を聞いて感じました。

私がいただいたテーマは、「地域移行と地域生活支援を考える」ということです。日本全体のことについては午後から杉田さんがお話しをするということで、河東田さんからは伊達市の実践について話してくれといわれています。それで、北海道の伊達市という人口3万6,000人の小さな町の実践ですが、テーマに沿ってお話をさせていただきたいと思います。

私が住んでいる伊達市は、人口3万6,000人の農業や漁業を基幹産業とした小さな田舎町です。この小さな町に、知的な障害のある人たちが現在390人暮らしています。これらの人たちは市内の101戸の家に住んでいますが、それは全部民間の住宅です。1人でアパートで暮らしたり、結婚してカップルで暮らしたり、4、5人の仲間とグループホームなどで暮らしています。障害のある人たちとない人たちが、隣り合い支え合って生きる町というので、「ノーマライゼーションの町」と評されています。今年の4月に開設されたグループホームが6箇所あります。この10月にさらに2箇所のグループホームを開設しました。12月には重症心身障害の人と行動障害のある人たちのグループホームを1箇所開設する予定です。このように、障害のある人たちの「ホーム」が次々に増えていっています。

また、施設から地域に移行するための「サテライト」というトレーニングホームが3箇所あり、計35名の人達が入居しています。これは北海道独自の制度で、施設から地域に移行するに

あたって、いきなりグループホームに移行することが困難な人達に対して、施設に籍を置いたまま地域の中の「サテライトホーム」で実際的なトレーニングをし、3年以内に必ず地域に移行するというものです。

伊達市における地域移行の基本的なスタンスは、施設解体が先にあるのではなくて、受け皿となる地域支援の基盤整備を整えることが先だと考えています。障害のある人たちにとって一番大切なことは、一生涯にわたる人生の「安心」と「安全」が保障されることです。どこで暮らすかは、最終的には本人が選択するということになりますが、地域の中で生きていけるような仕組みが整っていきまると、多くの人たちは、施設よりも地域生活を選ぶことになると思います。ですから基盤整備が整っていくに従って地域移行が進み、最終的には施設は消えていくことになると考えています。こうした考えのもとに、まず地域の受け皿づくりに一生懸命取り組んでいます。

何でこんなに伊達の町に障害のある人たちがたくさん集まったのかという理由として、「北海道立太陽の園」という施設の存在が挙げられます。これは、1968年の欧米で施設解体が始まったころに、日本で初めての「公立コロニー」として誕生しました。入所定員400名の大きな施設です。このころ日本では、親たちの強い願いによって、こうした公立のコロニーが都道府県に1箇所位の割合で作られていきました。群馬県の高崎市に国立のコロニーも1箇所ありますが、これら公立コロニーの先駆けとして、北海道伊達市に「太陽の園」が誕生したのです。

私はたまたま学生時代に、卒論の調査の関係で、開設されて間もないころの太陽の園に3カ月間実習に入りました。その期間入所者本人や家族、それから職員の方々に聞き取り調査を行いました。当時の太陽の園は、コロニーの先駆けとして、二つのポリシーがありました。一つは「一生涯にわたる支援」ということです。もう一つは、「ともに生きる」ということです。太陽の園は100ヘクタールという広大な敷地があり、この広大な山を切り開いて、障害のある人となない人がともに生きる「小さな村づくり」をしようというのが基本的な構想でした。ですから職員も、入所者と一緒にその敷地内に住むということが原則でした。

聞き取り調査の中で、多くの親たちは、一生涯にわたって太陽の園で面倒を見てもらえるようになったので、これでこの子を残して安心して死ねると喜んでいましたし、職員もそれを受けて、「お父さん、お母さん任せてください。これからは私たちがお父さんお母さんに代わって一生涯面倒を見ますから」と胸を張って答えていました。しかし、本人達は違いました。今は障害の重い人たちばかりになっていますが、その当時は比較的障害の軽い人たちもたくさん入所していました。そうした人達の多くから、「こんな施設で一生暮らしたくはない。一日も早く町に出て普通の暮らしがしたい。施設を出て、町で働らき、町の中に住み、将来は結婚もしたい」という声が多く聞かれました。たまたま私は、学校卒業後この施設に勤めることになりましたが、その頃には、開設当時の「終生保護論」に疑問をもち、本人の願いを聞いて、地域移行を進めようじゃないかという職員の声も強くなっていました。

こうした状況の中で「太陽の園」は地域移行に取り組んでいくわけですが、このとき大反対したのが親たちでした。もうほとんど100%と言われるぐらい、「この子を施設に預けることができて、これで安心して死ねると思っていたのに、施設から出て失敗したらと考えるとおちおち寝てもいられない。もし失敗したら、だれが責任を取るのか」と私たちに詰め寄るという状態でした。こうした親たちの不安を受けて、私たちは親たちに三つの約束をしました。一つは、「施設を出てからも、ずっと継続してお世話します」ということです。施設に籍があるかないかに関係なく、伊達の町にいる限り、一生涯にわたってお世話しましょうということを約束しました。二つ目は、施設から出ることによって親元に帰されるのではないかという心配をする人が多かったので、本人や家族が望む場合を別として、「親元に帰すということを地域移行の原

則にしない」ということにしました。三つ目は、失敗したら再び施設に戻れるのかということ。が親の一番の不安でしたので、「失敗したらいつでも受け入れる」ということを約束しました。たとえ施設に空きが無くても、いろいろな創意工夫の中で必ず施設に戻れるようにしますと言うことを約束しました。

この三つの約束をすることによって、親たちの中から、「そこまで言うのなら、本人が望むように地域移行を進めてくれ」という人が多くなりました。こうした経過の中で地域移行への取り組みが始まります。それから36年がたちました。この間約800名の人たちが、施設から退所していきしましたが、その際できれば出身市町村に帰ることが原則でした。3分の2くらいの人たちは出身市町村に帰ることができましたが、3分の1の人たちは、出身市町村に帰ることはできませんでした。小さな町や村にはグループホームや日中活動の場が無いというところが多くありましたので、これらの人達は、施設所在地の伊達市に住むことになりました。こうした経過の中で、伊達の町は、人口の1%を超えるたくさんの障害者が住む町になっていきました。

伊達市が「ノーマライゼーションの町」と標榜されるきっかけは、コロニーという大きな400人の入所施設をつくったことによるボタンのかけ違いによるものです。一度集めた人たちをまた地域に分散していくというのは、とても難しいことです。ですから、結果的には、施設の近くの伊達の町に移り住むということになります。今も積極的に地域移行が進められていますが、中にはもう30年を超える長い期間施設に入所している人もいます。これらの人達の中には、出身市町村にはもう身寄りがいない人もいます。そうしますと今さら身寄りや友達もない、ただ生まれ育ったところということだけでは、本人も出身地に戻るということを望みません。これからは伊達で暮らしていきたい、施設から出ても伊達の町で暮らしていきたいと言います。

現在「太陽の園」は、開設時の入所定員400名を320名に減らしています。一昨年から新規入所を制限しています。それまでは、移行した分だけ新しい人が入って来ますので、ずっと定員400名の状態が続いていましたが、今は320名になっています。今後も地域移行が進むにつれて、施設の定員を減らしていくことになりますが、今課題になっているのは、どこに移行するかということです。出身地に戻ることが望ましいとは思いますが、多くの人達はこれまで慣れ親しんで来た伊達の市民として、一生涯を終えることになるのではないかという感じを持っています。

これらの人たちの日中活動ですが、約200人の人達が60カ所の一般企業で働いています。伊達は小さな町で、雇用保険適用事業所は60箇所ぐらいしかありませんので、約1割の企業で働いていることになります。働き方は多様な形態で、個別に雇用されている場合がほとんどですが、中にはグループで就労している人たちもいます。一般企業での就労困難な約半数の人たちについては、地域共同作業所や通所施設などの福祉的就労の場が6箇所あり、そこで働いています。

私たちが支援の基本としているのは、一生涯にわたる切れ目のない支援をするということです。一般企業で働いている人が失業した、しかし次の日からは地域共同作業所に通うことになります。地域共同作業所で日中活動をしなが、求人があればまた企業就労に移っていきます。企業就労と福祉的就労の強力な連携によって、支援の切れ目を無くしているのです。

地域生活を推進するためには、地域支援の3点セットが必要だといわれています。一つ目は「住まい」をどう確保していくかということです。二つ目は、「日中活動の場」が必要です。そして三つ目としてこれら生活の場や日中活動の場が地域の中に点在しますので、これらの総合的に支援する「支援センター」が必要となります。一人一人のニーズに合わせてさまざまな相談を受けつけ、それに合わせた支援計画をつくり、具体的なサービスの調整をしていくという

支援センターの役割です。「住まい」と「日中活動」そして「支援センター」の3つを、わたしたちは地域生活支援の3点セットといっています。

わたしが勤務する「伊達市地域生活支援センター」には、二つの機能があります。一つは「地域生活者支援機能」、本人への直接支援の役割です。地域に暮らしている人たちのタイプは、1人でアパートで暮らす、結婚してカップルで暮らす、4、5人の仲間とグループホームで暮らす、そして家族と暮らす、の4種類があり、地域以外の選択肢として、先程から話題になっている入所施設があります。

今の日本では、入所施設が一番ケアが手厚く、次がグループホーム、単身者や結婚生活者と自立が進むにつれてケアが薄くなっていきます。そして家族と一緒に暮らしている場合は、すべて家族が面倒をみなさいといった雰囲気があります。私たちの支援のスタンスはそうではなくて、どこに暮らしても安心安全が担保されるように、必要なサービスはきちんと届けるということを目標にしています。

もう一つの役割は、「支援ネットワーク推進機能」で、これは「まちづくり」という間接支援です。障害のある人たちが安心して地域の中で暮らしていくためには、本人だけに視点を合わせるのではなく、障害のある人達の暮らしの条件を整えていくということも重要です。そのため、行政や家族や学校や施設など、あらゆる関係者が力を合わせて、支援のネットワークづくりを進めています。このため支援センターは、いろいろな団体を組織し、「事務局」として活動しており、現在八つの事務局を担って、あらゆる関係者をつないでいくための活動を展開しています。支援センターの仕事の6割ぐらゐは本人たちへの直接支援、4割ぐらゐがまちづくりという間接支援で、この2つが車の両輪として活動を進めています。

伊達市における地域住居ですが、昭和53年の「栄寮」が第一号です。まだ日本でグループホームの制度がないころに開設し、その後このタイプの専用下宿が次々とつくられていきました。最近も平成16年度1年間の間に全部で11戸の住居が開設されています。このように伊達市では月に約1戸の割合で障害のある人たちの住まいが増えていっています。最近の開設住居の特徴ですが、単身生活や結婚生活者の割合が多く、グループホームから自立生活へと移行する人たちが多くなっています。

住居の支援形態ですが、グループホームの中には比較的障害の軽い人たちを対象にした、世話人さんが食事を中心とした朝夕だけケアするという通勤タイプもありますが、今伊達で増えているのは、24時間型、つまり世話人さんが24時間ホームに常駐するという形態のホームです。1ホームに1人世話人さんが常駐する訳ですから、そういった面では、入所施設よりもケアが手厚いことになります。入所施設だと20人に1人とか、50人に2人位の宿直となりますが、4～7人のグループホームに1人の世話人さんが24時間いる訳ですから、圧倒的に手厚いということです。それから、13組26人の結婚カップルを支援していますが、ほとんどの人達は食事づくりが苦手です。それで家事援助としてホームヘルプを使ったり、お金にゆとりのある人たちは自分たちでお金を出しあって世話人さんを雇ったりしています。

時間が来てしまいました、最後に北海道の地域移行の取り組みですが、これまで北海道では、養護学校等を卒業して毎年100人ぐらゐの人が新たに入所施設に入っていました。この受け入れのために、入所施設から100人ぐらゐの人がグループホームに移行します。こうした流れの中で、北海道では毎年100人分ぐらゐのグループホームを新たに開設していました。100人がグループホームに移行して100人を新たに受け入れるということですから、入所施設はいつもいっぱい状態でした。このようにいつも満杯ですと、本人や家族のほうでは1回施設から出るともう戻れないのではないかと行った不安や、今は家族と暮らしているが年を取ったら不安だから、施設の籍が空いたときに早めに入所しようと言った雰囲気があって、まさに身動きの取

れない状態が続いていました。

これではいつまでたっても入所施設は減っていかないということを、北海道のほうに働きかけてきましたが、これを受けて北海道は「緊急整備計画」ということで17年度と18年度の2年間で、400人分のグループホームを緊急に指定しました。400人分100箇所というのは、とても大きな数字です。グループホームは全国で4,857箇所あり、約2万人の人たちがグループホームで暮らしています。最も多いのが北海道で545箇所。次が大阪で483箇所。ところが香川県のように12箇所しかないといった県もあり、100箇所以上は12しかありません。そうした中で、北海道がいったん100箇所400人分を指定したということは、まさに画期的なことだと思います。

このグループホーム指定に際しては、「指定に関する新しい視点」として、これも私たちのほうで強く言ってきたことですが、一点目は財源の問題も含めて、グループホームを指定するときは、入所施設の定員を削減するところを最優先にすることです。こうした指定の優先順位の中で、20ぐらいの施設から入所施設の定員を削減してグループホームを開設したいという申し出がありました。二点目は、これまでのグループホームは比較的障害の軽い人たちを対象にして来ましたが、これからは重い障害を持っている人たちのグループホームの開設に取り組む、そういうところを優先的に指定することです。三点目として、グループホームは必ずしも終の棲家ではない、障害の重い人たちはそういった場合もあるかと思いますが、グループホームで暮らしている人たちの中には、一人暮らしをしたい、結婚をしたいという人も多くいます。そういった面を考慮して、グループホームからさらに次の自立した生活へという取り組みをしているところを優先しようということです。

四点目として、高崎市に「国立のぞみの園」という最も障害の重い人達が入所しているコロニーがあり、積極的に地域移行を進めようとしています。この施設の開設当時、重複障害の人達は、都道府県の施設では受けとめられなくて、全国から国立コロニーに入所していったという経過があります。国立コロニーは1970年に開設されたわけですが、北海道からも11名の人たちが入所し、それ以来30年以上にわたってほとんど帰省していないという人もいます。その人たちに北海道に帰ってきてもらおう、そのためにその人たちを受け入れるグループホームを優先しようということになりました。

五点目として在宅障害者の利用ということですが、これまでは、主に施設事業者がグループホームをつくっていましたが、入所者のうち比較的手のかからない人たちからグループホームに移行していました。ケアが少なくてもよい人たちが移行して、その後に養護学校等を卒業した人たちが新たに入所する、在宅から施設に移るという形です。このような流れの中で、在宅の人たちがダイレクトにグループホームに入るということがあまりありませんでした。そうではなくて、在宅者がグループホームを利用したいということであればそれを受け入れる、そういったところを優先しようということですが、

六点目として、地域移行計画やグループホーム整備計画等の計画をたてている市町村を優先するという事です。こうした優先順位のもとで緊急に400人分のグループホームを指定したということです。オーストラリアのような本格的な動きではなくて、北海道や伊達市のマイナーな動きですが、実践について報告させていただきました。(拍手)

河東田 かけ足で発表していただきましたが、伊達、もしくは北海道での新しい動きがよく伝わってきたのではないかと思います。最後に報告をしていただいた北海道での優先順位をつけながらグループホームをつくっていく、もしくは地域生活支援のシステムをつくっていく、これはほかの自治体でもとても参考になる動きではないかと思います。

では、まだ時間がございますので、小林さんに対する質問をいただきます。まず、レスリーさんに小林さんのお話の感想を聞いてみましょう。

レスリー　大変興味深かったです。特に受け皿の重要性に着目していらっしゃるというところが大事だと思いました。すいません、日本でのケアの歴史というものを知らないものですから、最初の施設ができたのが1968年だったのでしょうか。

小林　そうではなくて、公立のコロニー(知的障害者総合援護施設)が初めて開設されたのが1968年です。それ以前に、数は多くありませんが小規模の子供の施設や大人の入所施設がありました。

河東田　日本で施設が最初にできたのは1891年、滝乃川学園というところです。

では、客席で手を挙げていらっしゃる方がいますね。ご所属とお名前をおっしゃっていただき、簡単にご質問をお願いいたします。

C　「埼玉県移送サービスネットワーク」のCと申します。小林さんの話の中で、伊達の町だけでなく、地元にも数多く帰っていくとおっしゃられました。地元に戻っても、地元のグループホームに入居するケースが多いと思いますが、そういう人たちに対する援助の仕方というのはどのようになっているのでしょうか。それぞれの地域に任せてしまっているのかどうかもお聞きしたいと思います。

河東田　小林さんよろしく願いいたします。

小林　当時のコロニーは終生保護施設として、一生涯にわたって面倒を見るというイメージが強くありました。しかし「太陽の園」はいち早く社会復帰に取り組み、社会復帰するにあたっては、それぞれの生まれ育った地域に帰っていくということを原則にしました。しかし、知的障害者の場合、アフターケアのない社会復帰は考えられません。ですから昭和48年から10年間、私はケースワーカーとして出身地に帰った人達のアフターケアのために北海道全域を駆け巡りました。出身地への戻り方は、家庭に帰った人もいますし、働ける人は地元の通勤寮等に戻った人もいます。それから当時は、住み込みのような形で職親さんをお願いしたケースもありました。さらに、地元に入所施設ができると、できる限り近くの人をそちらに移るように働きかけました。そんな形で地域移行が始まった当初の10年間は、全道を駆けずり回るのが実態でした。今は、北海道は21の障害福祉圏域に地域援助センターがあり、それぞれのエリアで支援することになっていますので、地元に戻るとそこにケアを引き継ぐという形になります。伊達市地域生活支援センターは、伊達市を中心とした西胆振6市町村をエリアとして支援活動を行っています。

河東田　基本的なご回答はいただいたと思いますが、そのほかにはいかがでしょうか。

B　浦和大学のBです。小林さんのお話は何回もお聞きしていて、いつもこれでいいのかなというのがよく自分ではわからないのです。日本の地域の中で異常に障害者の方が多い地域になっていますが、そのことをどう考えておられますか。また、結婚されている人まで支援の対象になっているようですが、結婚されれば別に支援の対象から外れてもいいのではないかと思います。

いますが、その辺はどのように整理されておられますか。

それからもう一つは、ケースファイルみたいなものがどこかにあるのでしょうか。例えば、何人の方がどこにおられるのかというのが、常に支援センターでわかっているということは、何らかの形でそういう方をファイルみたいなもので管理しているのでしょうか。その二つです。

河東田 恐らく多くの人が知りたがっている内容だと思います。じゃあ、小林さんお願いします。

小林 伊達に障害のある人たちがたくさん集まっているというのは、決してノーマルなことではないと思います。しかし、障害者を一度施設等を集めてしまいますと、10年20年とその施設に暮らしている間に、出身地に戻れなくなってしまいます。例えばここにいる方の中にも、ふるさととは田舎だけれども、若いころに東京に来て、もうずっと東京に住んでいるので、ふるさとには知り合いもないという人がたくさんいると思います。何らかの理由でふるさとに帰れなくなった人は、結果的に伊達の市民になります。こうした傾向は、善しあしの問題ではなく、現実的な対応として今後も続くと思います。

それから結婚している人までケアが必要なのかということですが、わたしは必要だと思います。私は今眼鏡をかけています。この眼鏡があることによって普通の暮らしができます。私にとって、この眼鏡が生涯必要なように、知的の障害がある人たちについては生涯にわたる人の支援が必要です。それは施設で暮らしていても、グループホームで暮らしていても、家族と暮らしていても、あるいは結婚したとしても、やはり人の支援が必要なのです。支援が要らなくなった人は、それは障害者ではない人で、当然私たちの支援から外れていきます。支援を求めてくる限り、どこに住んでも、しっかりとサービスを届けるのがわたしたちの使命だと思います。それから、支援センターには登録者全員のケース台帳があります。

河東田 本当はもっと議論をされたいのだろうと思いますが、多くの方に、もう少し最近の伊達のことを知っていただくために質問を出していただきたいと思います。その後で、レスリーさんから一言いただきます。レスリーさんも一言とおっしゃられています。ほかにどなたかいらっしゃいませんか。

はい、それでは車いすの方お願いいたします。

D さいたま市の市議会議員をしておりますDと申します。17年度、グループホームが400箇所認められたというのはすごいことだと思いますが、やはりこういうことは予算がないとできないことだと思います。これでどのくらい予算がついたのでしょうか。だいたいさいたま市は、福祉の予算を取るのがものすごい大変でなかなか認められないところがありますが、もしおわかりになりましたら、どのくらいの予算がついたのかを教えてくださいました。

小林 グループホームが400カ所認められたのではなく、北海道全体で100箇所400人分が認められたということです。

北海道では予算がないということで、これまで毎年100箇所分しかグループホームが認められていませんでした。しかし入所施設の予算をグループホームに移せばよい訳で、入所施設から地域への移行を進め、入所定員を削減したところからグループホームの開設が認められました。しかしこれには難しい問題があって、入所施設と地域支援のコストが違います。入所施設はバックで支援しますから安上がりです。しかし地域支援のほうは、バックではなくサービス

が小分けとなりますので、その分だけどうしてもコスト高となります。自立支援法の中で、「イコールフィッティング」ということが強調されていますが、入所施設も地域生活支援も、同じ要介護状態の人であればどのサービスを使ってもコストを同じにしようということです。入所施設も昼と夜を分離したサービスとなりますが、入所施設から園内の日中活動に通う人も、施設から出てグループホームから通所施設に通う人も、原則的にはコストを同じにしようという考えです。

これでは地域移行は進みません。地域に出た方が2～3割のコスト高になるからです。施設の予算よりも地域支援の方が絶対にコストが高くなります。それでも障害のある人達の願いに応えて、地域移行を進める、これはお役人の仕事でもあります、政治の世界でもあります。地域福祉が進めば進むほど予算が増大していきますが、そのことをいかに市民に理解してもらえるか、ここが重要なポイントだと思います。

河東田 埼玉県でもぜひチャレンジしていただければと思います。また、午後のディスカッションの中で取り上げていただく課題がたくさん出てきたと思います。

では、午前中を終わるにあたりましてレスリーさん、一言お願いいたします。

レスリー 伊達話を聞いていますと非常に興味深い例で、コミュニティの側の態度というものが変わってきているのではないかと思います。そういう意味では、研究結果のようなものでコミュニティの態度が変わってきていますよというものでもあれば見たいと思います。

小林 市民の意識調査を実施したことはあります。

河東田 調査結果の資料は残念ながら日本語だということです。お二人のお話からヒントを得たことがたくさんあったのではないのでしょうか。一方で疑問もたくさん出たのではないかと思います。そうしたことを、お手元のアンケート用紙に記入していただきたいと思います。今書きいただきたいと思います。では、とりあえず、午前中のお二人のお話とそれを基本にしたやりとりをこれで終了させていただきます。どうもありがとうございました。また午後お会いしたいと思います。(拍手)

●午後の部

河東田 では、午後の部を始めたいと思います。これから杉田穂子さんに私たちが行ってきた取り組みの一端を、皆さんに報告させていただきます。では、杉田さんよろしくお願いいたします。

杉田 よろしくお願ひします。『地域移行に関する調査結果から「入所施設の意義」を考える』というタイトルで発表させていただきます。

2002年度から2003年度にかけて、私たちの研究グループは2種類の調査を行いました。その一つは、地域移行、本人支援、地域生活支援について全国の知的障害者入所施設を対象に、郵送によるアンケート調査を行ったというものです。もう一つは、2003年度、日本において早くから地域移行に取り組んでいるA施設において、本人、家族、職員の方を対象にインタビュー調査を行ったというものです。さらに2004年度には、入所施設を持たない在宅からグループホームへの支援を積極的に行っているB施設においても同様の調査を行いました。

今回は、これらの結果をもとに、全国のアンケート調査からは日本の地域移行の現状をお伝えし、インタビュー調査からは、二つの施設の調査結果を比較しながら今後の入所施設の意義に焦点を当てて発表していきたいと思います。

まず、全国のアンケート調査の概要ですが、調査の期間は2004年2月から3月、調査の方法としては、郵送法を採用しました。対象となった施設は、全国の知的障害者入所施設、つまり入所の更生施設、授産施設、障害児施設、通所寮です。全対象施設は2,036施設で、そのうち回答を返してくださった施設は1,365施設で、回答率は67%でした。

次に調査の結果を示します。対象となった施設の入所者数は80,330人でしたが、調査の中で2001年度、2002年度に施設を退所された方は何名いるかと聞くと、2年間で施設を退所された方は3,867人という数字でした。しかし、この人たちの移行先はどこかということのをさらに尋ねますと、私たちが地域の住まいとして考えていますグループホーム、アパート、福祉ホーム、社員寮というようにどこかに移動した人は1,973人で、そのほかの人は家族や親戚に引き取られたり、ほかの施設や病院に移っているという人が1,894人おられました。これらの結果から、つまり1年間では入所施設から地域の住まいへ移行した人は、平均すると987人であるということがわかり、全体の入所者数80,330人のたった1.2%という結果でした。

次に地域生活を支援する事業について、グループホーム事業を行っているか、日中活動の提供をしているか、自活訓練事業を行っているかの三つについて尋ねました。その結果、グループホーム事業を行っていた施設は、46.7%でしたが、グループホーム事業を行っていないという施設は半数以上の52.4%でした。

次に、地域生活者への日中活動の提供、つまり通所授産施設や通所の更生施設などを実施していた施設は64.6%でした。実施していないという施設も30.7%でした。次に、自活訓練事業の実施状況について伺いました。自活訓練事業というのは、入所施設から地域の住まいへ移行する際に準備をするために一時的に住む生活の場です。自活訓練事業には、国の自活訓練事業と自治体の補助事業、あるいは法人が独自で行っている無認可の自活訓練事業というものがありますが、そのどちらも実施していないところが59.6%という結果でした。

日本においても長野県の「西駒郷」でありますとか、宮城県福祉事業団の「船形コロニー」、独立行政法人国立「のぞみの園」に見られるように、大型の公立、国立の施設が施設解体、定員削減といった方針を打ち出しています。しかし今見てきましたように、私たちが調査したアンケート結果の数字を見ると、施設から地域の住まいへ移行している人は1.2%で、ほぼ100人に1人という数字でした。また半数以上の施設は、グループホーム事業を行っていなかったり、自活訓練事業も行っていないでした。このようなことから、日本の地域移行の動きはまだまだ主流にはなっていないということがわかりました。

このように全国のアンケート調査の結果を見ると、現在までに地域移行を推し進めているという施設はむしろ少数派で、その意味で次の調査に協力してくださったA施設というのは、先駆的な取り組みであると考えられると思います。しかし、次に示しますように、A施設での実践というのは訓練中心、能力重視の地域移行、地域生活支援となっています。ここでは訓練中心に行った地域移行の取り組みというのは、地域生活において本人にどんな影響を与えるのかということを示していきたいと思います。そのことを明らかにするために、入所施設は経ずに在宅からグループホームへの移行を推し進めているB施設でも同じ調査をしました。その結果を示しながら話をしていきたいと思います。

二つの施設の概要ですが、運営主体はどちらも民間の社会福祉法人です。A施設は開設してからもう既に30年経っていました。地域移行をし始めてからも20年経っています。一方B施設というのは、親の会が中心になってできた通所の授産施設で、15年前に始められました。12

年前からグループホーム事業も行っており、在宅からグループホームへの移行を積極的に行っておられる施設です。

どちらの施設でも本人、それから職員、家族にインタビューを行いました。調査人数は、本人がA・12人、B・18人、職員は、A・10人、B・9人、家族は、A・10人、Bも10人でした。対象となった本人の平均年齢は、A施設では34.2歳、B施設では36.5歳でした。A施設での本人の地域に住んでからの年数は平均で11年でした。

次に、調査の結果から特徴的に見られたものをお話したいと思います。まず、グループホーム等への移行プロセスですが、A施設では非常に多くの段階が設けられていました。入所施設、施設内自立訓練棟、地域自立訓練棟、グループホームというような段階です。各段階の移行時には、説明や見学、それから体験というものが行われていて、そのことは本人の不安感をととても軽減させるのに役立っていました。しかし、だれが移行するののかという移行可能者、それからいつ移行するののかという時期、どのグループホームに移行するののかという場所、だれと生活するののかという共同入居者、そして地域移行をしてからの引っ越しの決定については、本人はほとんど関与していませんで、実質的に職員や施設の側が決定していました。

A施設のインタビューの中で、ある本人は、入所施設から出られるだけでうれしかったと語ってくれました。施設を出るのを決めたのはだれかと尋ねると、ある本人は、頑張った人から順番に出していく、自分たちで掃除やいろいろなものを努力して、それを職員が見ていて頑張った人から順番に出ていく。職員が「OK」と言ってくれたら出られると語ってくれました。このA施設では、本人が規則を守れないと罰を与えるということを行っていたり、職員が決めた本人のそれぞれの目標というのがあり、その目標の達成度を職員が評価します。そのために、自然に職員と本人の間にははっきりとした上下関係ができていました。それでも、自分のことなのにそう決められて怒っているかと言えばそうではなくて、移行可能者に選ばれたということが非常にうれしいこととしてとらえられていました。その背景には、プライバシーがない集団管理的な入所施設からとにかく抜け出したいという強い動機があったと思われます。

一方B施設のほうは非常に単純で、在宅から直接グループホームという流れだけです。通所授産施設に通っている人たちに対して、職員たちがグループホームへの移行を促すために宿泊体験をしませんかというような募集をやってらっしゃいました。ほかにはグループホーム入居者の体験談を聞くという試みもされていました。もし、本人が興味を示せば、実際にはグループホームではないようなところで宿泊の体験をして、その結果、もっとグループホームへの興味が出てくれば、実際のグループホームでの宿泊体験ということを行っており、その結果を踏まえて、本人、親、職員で話し合いがなされて、さらに本人が入居したいグループホームに既に入っているメンバーの意見、「この人が入ってきたらどうですか」という意見も聞きながら、グループホームへの入居が決定していました。このようにB施設では、グループホームに入居すること、どのグループホームに入るか、いつ入るか、だれと生活するののかということについても、宿泊体験を行いながら基本的には本人の気持ちや希望を尊重しながら対応していました。

インタビューの中で、ある本人は、長い間自宅から通所授産施設に通っていて、父親に「自立してくれ」と言われたのでグループホームの練習を始めて、2週間練習をして、その結果職員にどうするかと言われて、自分で「入ります」と答えたと言ってくれました。それから別の人は、自分から入りたいと思ってグループホームに入った。初めはホームで宿泊体験をして、「うわ、こんなことができるんだ」と思って、「入れるところはありませんか?」と尋ねたら、AというグループホームとBというグループホームがあると言われ、自分はBを選んだ。それはAというグループホームには日中活動であまり気が合わない人がいるからBを選んだと答えてくれました。また別の本人は、初めは家から日中活動の場に通っていたけれども非常に遠か

ったので、グループホームに入りたいと自分から希望をした。Cというグループホームを見ただけでも、非常に若くてにぎやかな人が多かったので、自分は静かに暮らしたいと思ったのでDというグループホームに入ったと語ってくれました。

このように、考えながら余裕を持って選択できるのは、A施設のグループホームへの移行と比べて在宅からグループホームへの移行の方でした。在宅での生活はひどいものではなくて、むしろ在宅からグループホームへの移行というのは家族からの自立という点に力点が置かれていたからではないかと思います。

次に、「あなたのグループホームでは何か決まりがありますか」という、質問をしました。A施設の本人たちは、回答が得られた10人全員が「決まりがある」と答えました。どんな決まりかというと、就寝時間、起床時間、帰宅時間、禁酒、あいさつ、人の物を取らない、仲よくする……というようにさまざまな規則が語られました。ある本人は、決まりは帰宅あいさつ、手洗い、うがい、食事準備、就寝9時、起床6時、洗面をして食事用意、しなければ世話人に怒られていた。この間自分も食べないで捨てたら職員に怒られて怖かったと語っておられました。A施設の特徴ですが、決まりについて尋ねると、回答内容も、「帰宅あいさつ、就寝9時、起床6時」というように、私たちが日ごろ生活の中で使うような言葉ではなくて、かたい言葉で語っていたのも一つの特徴であったと思います。

さらにこのA施設では、グループホームでのお酒が禁止されており、ここでも飲めればいいのか、入居時に地域サービスセンターとの約束で帰宅時間は5時になっているがもう少し遅くしてほしいと思うというように、決まりは変えたいと思っているけれども、それを言ってみたらどうかと言うと、「それは職員には絶対に言えません」というような言葉が返ってきました。私が不自然だと思ったのは、多くのグループホームでは洗濯当番というのが決まっていて、その当番の日は、グループホームの仲間の4人分、5人分の洗濯をその人が全部するというような当番を決めていたことです。このような決まりには、入所施設での日課の影響がとても色濃く見られていると思います。

一方でB施設では、決まりは「あると思う」と答えた人が4人、「ないと思う」と答えた人が7人でした。例えば、ある本人は、「起きる時間は仕事によってみんな違う、寝る時間も違う、決まりは夕食を一緒に食べることだ」と語りました。それから別の本人は、「決まりは特にない、遅くなるときや友達と遊びに行くときは前もって電話をしておけば大丈夫」と答えていました。また、私がインタビューをした日に、今朝は何を食べてきたのかと聞くと、「実は今日は寝坊をしたので、朝は何も食べていません」と、ちょっと決まり悪そうな顔をする人がいたり、インタビューのときに、グループホームを訪問したときもありましたが、「ちょっと部屋が散らかりすぎているので居間でやりましょう」と、自分の部屋に入られるのを躊躇する人がいました。あるいは休みの日にビールを飲むことが一番の楽しみと語る人もいました。このような語りは、私自身の日ごろの生活に非常に近いと感じました。

でも、グループホームですから、トイレやお風呂を共同で使っているということは、A施設もB施設も同じでした。グループホームによっては、B施設の場合は当番制を取っているグループホームもありました。どんなふうに当番を決めたかと訪ねると、ある人は、最初は順番を決めないで適当に気づいた人がやっていたら、いつも同じ人ばかり、気の利く人がいつもやることになって、それに気づいて自分がこれではおかしいから順番を決めようと言って、みんなが決めたと言ってくれました。こんなふうに、問題があれば本人たちが自分で自然に解決している様子がうかがえました。こんなふうにB施設では、一人ひとりが、制限はありますが自分の生活や仕事に合わせて比較的自由に生活している様子がうかがえました。

それから、帰省回数についても比較をしてみました。このインタビュー調査をお願いすると

きに、条件として親御さんへのインタビューもする関係で、親御さんとの関係が切れていない方、つながっている方というのをわざわざ選択していただきました。それでもA施設の場合は、毎週帰るという人はだれもいませんでした。年に4～6回という人が2人、年に1～3回という人が6人でした。入所施設というのは、地域から離れたところにあるというのが一般的で、このA施設も例外ではありません。実際に、家族との距離が離れている人が多く見られました。入所期間が非常に長期化している人たちの多くは、家族がいらっしゃっても既に関係はなくて帰省できないというのが実態でした。

一方B施設では、毎週帰省するという人が5人、4～6回という人が1人、1～3回の人が8人、帰省しないという人も1人おられました。特に毎週帰省する5人の方たちにとっては、帰省するということは生活の変化、生活の一部になっていて、例えばある本人は、土曜日はゆっくりしてグループホームにいて、日曜日に家に帰ると。家族ではテレビを見たりカラオケに行ったりして特別なことはしないけれどもすごく楽しいとか、実家でテレビを見たり、自転車に乗ってみたい、散歩や釣りに行ったり、おふろ屋さんに行ったり、犬と散歩をしたり、特別にどこかに行くということではないですが、とても楽しく生活をしているということがわかりました。

こういう結果から、一体入所施設の意義というのは何なのかということをもう一度問い直す時期に来ているのではないかと思います。A施設においてグループホームへの移行のプロセスで、自分に関する重要な決定を本人ではなくて職員が行っているという実態がありましたが、地域生活においても職員の決めたことには従わなくてはならないという上下関係をつくりだしていました。そしてそのことは、生活の決まりを変えるという、自分に関することも自分で決めたいいけないんだという考え方をくり出していったと思います。それから、地域生活においても施設の日課の影響というのが色濃く見られていました。そして最後に示しましたように、家族との関係の希薄さが見られたと思います。

なぜ入所施設がつくられてきたかという背景には、いろいろな理由があると思いますが、その一つに、知的障害を持つ人は自分の重要なことは決められないのではないかと、あるいは知的障害の人は訓練をしなければならないのではないかと、地域で生活するために訓練しなければならないのではないかと、私たちの今までの思い込みがあったのではないかと思います。

しかし、今報告してきたB施設のように、本人たちが非常によく考えてグループホームにだと住むとか、なぜ住みたいかということをも自分たちで選択していることがよくわかったと思います。それから、グループホームという共同生活ですが、初めから決まりがあるというのではなくて、生活の中で課題が出てきたらみんなの力で解決していく、そういう力もあるということがわかりました。このようなことが可能になるためには、グループホームに入る前の今の生活が、入所施設のようにとてもひどいからどこでもいいから行きたいというのではなくて、現在の生活が安定し、生活がひどくないこと、情報提供もきっちりなされていること、体験を伴って考える機会が十分に与えられていること、職員に対等に自分の意見を言えること、「これを言ったら自分はグループホームのチャンスを与えてもらえないのではないかと」かそういうことではなくて、対等に「嫌なら嫌」という意見を言える、そういう関係性が求められてくるのではないかと思います。このことは、このような配慮があれば知的障害を持つ人も十分自分に関する重要なことを決定する力を十分に持っていることを示しています。

これまでは能力のある人だけが地域で生活ができるとわれてきましたが、今はだれもが地域で当たり前のように生活できるようにしようという考え方に変わってきています。今回、本人だけではなくて、親御さんや職員の方にもインタビューをしましたが、入所施設について今後も必

要だと思うかと尋ねると、例えば自分の娘や息子が地域に移っている親御さんであっても、「やはりうちの子供は軽いけれど、重度の人のためには必要ではないか」という回答が多く見られました。しかし重度障害者のためのグループホームというのは、国の制度としては現在是不十分ですが、地方自治体の補助を受けたり、各地で地道な実践が継続されていて可能だということがわかってきていると思います。今後は、24時間体制で支援できるようなグループホームを、国の制度として整えていく必要があると思います。

この間成立しました障害者自立支援法の中のケアホームというのが、そのような範疇にあるのかもしれませんが、福祉関係者の話題の多くは利用料のことです。1割負担ということに大きな関心が向けられていますが、私自身は、入所施設というものが、まだ自立支援法の中で障害者支援施設と位置づけられているということに非常に大きな疑問を感じています。入所施設も、生活の場と日中活動の場が分けられるという決まりができましたが、その内容はまだ何も詳しく決まっています。お金が分けて配分されるというだけで、どのように離さなければいけないかということもあいまいなままだと思います。私自身は、入所施設は、今入っていらっしゃる方の希望に添いながら、地域への移行をどんどん加速させるとともに、大事なのは、新規の入所者を受け入れないことではないかと思っています。そして、その役割を終えていく必要があるのではないか、新たな地域移行者をつくりださないということも、地域移行の非常に大事な課題ではないかと思っています。

例えばB施設のように、入所施設を経ずに在宅からグループホームへの移行というのが、今後の知的障害者の地域生活の主流になっていくということが必要ではないかと思っています。また皆さんのお考えをお伺いしたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

河東田　ありがとうございました。端的に短い言葉で伝えられると、ときには刺激的な言葉に聞こえるかもしれませんが、彼女の思いも込められた調査結果を今のような形で報告していただきました。

予定よりも10分ほどオーバーしてしまいましたが、どなたか今の発表についてご質問がございましたら出していただきたいと思います。いかがでしょうか。

では、これから、3人でのやりとりを行っていきます。その後皆様にもご参加いただき、話し合いを進めていきたいと思っています。

まず小林さんに、私から質問をさせていただきたいと思います。皆様からいただいた内容ともかみ合ってくるものではないかと思いますので。

北海道・伊達での取り組みは、私たちに刺激を与えてくれました。地域移行のモデルともなっていました。例えば、三つの約束三つの条件ということで言われた内容、例えば条件で言いますと、住まいの確保、日中活動の確保、そして相談事業・相談支援の確保、つまり地域生活支援センターの確保が条件となってくるだろうと思われます。十数年の取り組みの中で、このことを証明してこられたのではないかと思います。伊達という町が障害を持つ方々を数多く受け入れながら、ほかの町とは異なる取り組みが展開されてきました。その延長線上に北海道での取り組みがあり、予算も確保しながらしっかり計画を立てようという考え方になってきたのではないのでしょうか。

そこで小林さんにお伺いします。「太陽の園」はもともと道立の施設でした。現在は事業団が運営をしていますが、北海道という行政が後ろ盾になりながらさまざまな支援をしてきたのではないかと思います。ところが、日本の福祉施設の75%もしくは80%近くが民間で成り立ってきました。そこで、「太陽の園」の取り組みがどの程度、どんなふうに今後民間施設に影響を与えていくのかをお教え下さい。

小林 伊達市に障害のある人たちがいっぱい住んでいるので、特別な町じゃないかという印象を持っている人も多いかと思いますが、全くそんなことはありません。それぞれの町の中には、たまたまお年寄りが多い田舎町もあるでしょうし、東京のように大学があって若者が多く集まっている都会もあります。そこが暮らしやすかったり、あるいはそれぞれの目的があってそこに住んでいるのだと思います。同じように伊達市は障害のある人たちが多く住んでいるというだけのことで、ほかと変わりのないごく普通の町です。もう一つの質問ですが、先ほどの杉田さんの話にもありましたが、日本の場合は、施設解体とか地域移行を進めているのは公立施設が中心です。公立施設は、法律が変わったり、その県の知事の判断で、施設を解体することは可能です。ところが日本の施設の8割は社会福祉法人が運営しています。これは民間ですから、行政指導には限界があります。「あなたのところの施設をいまずぐ解体しなさい」といった一方的な関与は難しいと思います。欧米などは、州立施設が中心ですので、地域移行がし易かったと思いますが、日本は民間施設が中心ですので、法人自らが決断しない限り、施設解体は難しいと思います。かといってノーマライゼーションを標榜しながらさらに入所施設が増えていく現状については、厚労省も、自立支援法の制定を機会にその流れを変えようとしています。今までは何事につけても入所施設にいるほうが有利でした。例えば施設にいと障害年金が使い切れなくて貯金ができ、地域に出るとお金がかかるので家族が地域移行に反対します。職員にとっても、施設に勤めると職業として成り立つけれども、グループホームの世話人さんやホームヘルパーだと独立した職業として家計を維持することができません。ですから、大学で一生懸命河東田さんが地域支援の講義をしたとしても、学生さんがそちらの方向で就職しようと思ってもなかなか自立した給料をもらえる就職先がないと思います。最近日本では福祉系の大学が増えていますが、ここに大きな矛盾があります。ですから、これまでの「施設が得で地域支援は損」ということがないよう、条件をイコールにする、イコールフィッティングが自立支援法の基本的な考え方です。こうした時代の流れの中で、民間社会福祉法人も地域支援の方向にシフトして行こうという動きが出てくるのではないかと期待しています。

河東田 ありがとうございます。もしこのことに関して皆様方から何かご意見がございましたらお受けします。いかがでしょうか。恐らく80%の民間でまかなわれているさまざまな取り組みが今後どうなっていくのか、とても不安、もしくは難しいのではないかとということも含めてご意見をいただきたいと思います。また、今後地域内格差だけでなく、施設間格差も出てくるのではないと思うのですが、いかがでしょう。これは避けては通れない論議の一つかと思いますが、まず皆様方からご意見をいただければと思います。いかがでしょうか。

小林 「太陽の園」や私が勤務している「伊達市地域生活支援センター」を運営している北海道社会福祉事業団は、大変な決断ですが、来年4月から完全民営化します。このことによって、予算を5年間で4割削減し、10年後には、正職員と臨時職員の比率を半々にします。また今年度勸奨退職制度を導入し、42名が勸奨退職に応じています。「太陽の園」は地域移行を進め、入所定員を80名削減しましたが、その裏返しとして職員の勸奨退職があったり、当分は新職員を全く採用できなくなったり、今までもらっていた給料が6割になったりといった大きな犠牲を伴うことになります。

河東田 今おっしゃられたことは、東京都でも起こっております。間もなく同じような動きが出てくるはずで、このような動きはほかの自治体にも確実に広がっていくと思われます。

これから大変な時代がやってくるわけですが、それぐらいの大きな動きをしていかないと地域移行は進んでいかないのでしょうか。なかなか解決困難な問題ですが、状況は時々刻々動いているということの認識だけはお互いにしておきたいと思います。

もう一つ、小林さんにお伺いしたいと思います。伊達の町に多くの利用者がやってこられました。さまざまな人たちによって多くの取り組みがなされていくわけですが、「地域に移り住みながら地域の方たちと生活をともにしていくためには意識の啓発が必要なのではないでしょうか。特に、反対している親御さん、地域住民、職員、こうした人たちの価値観が変わっていかないといけないだろうと思います。そのためには、どうしたらいいと思いますか。おっしゃっていただけますが、このことについてはいかがでしょう。もし変わってきたとしたら、変わってきた力は何だったのか、それをお教えいただきたい」と思います。

小林 先ほどの杉田さんの発表の中で、A施設の地域移行は訓練中心にかたよっているという批判的な意見がありました。私は23年間入所施設に勤務しましたが、そのときは明らかに訓練中心の考え方でした。昭和61年に障害基礎年金制度ができるまでは、働いてお給料をもらえる人だけが地域に住むことができました。グループホームなどの制度もありませんでした。ですから働いてお給料をもらって、そのお金で家賃を払い御飯を食べていく、これが自立だ、だから頑張れなさいと、頑張れコールを送り続けました。そのために体力づくり、生活自立プログラム、職業自立プログラムをトレーニングの3本柱として、徹底して訓練に取り組みしました。多くの入所施設の地域移行は、そういったところからスタートしました。

そんな時代の施設から地域への移行は、職場開拓から始まります。日本は、欧米と比べて知的障害のある人たちの一般企業での就労率は高いと思います。伊達市でも、今は200人近い人が60カ所の企業で働いています。しかし最初はなかなか障害者を雇ってくれるところはありませんでした。ですから、障害のある人たちが働けそうな豆腐屋さんとか、木工場、お菓子屋さんなどを電話帳で調べて一軒一軒回りました。その時に、ほとんどの企業から、「大丈夫か?」と言われました。それは働けるのかという意味もありましたが、もっときかれたのは「火をつけないか」とか、「盗まないか」とか、「子供に悪さしないか」といったことでした。ですから最初は「私たち職員も一緒に働きます」、「実習という形で賃金は要りません」というところから始まりました。何しろ30年以上も前のことです。ですから私たちも若かったし、本人たちもよく頑張ってくれました。そうした中で、「もう職員はついて来なくていいよ」ということになり、また「雇ってもいいよ」という風に変わって来ました。障害者が実際に働いている様子を見て他の企業でも徐々に採用が増えていき、だんだんと障害者の雇用が拡大していきました。

「住まい」についても同じで、最初はだれも家を貸してくれませんでした。手頃な物件があって貸してほしいというと、必ず「火事を出さないか」といわれます。ですから最初は職員と一緒に住み込みました。それから町内会にも事情を説明にいきました。それでも、なかなか貸してくれなくて、たまたまお花のボランティアに来ていた春木さんという方が、ボロボロの下2戸、上2戸のアパートを持っていて、下の1戸が空いたから貸してあげると言ってくれたのが、伊達の地域住居の始まりでした。ところが隣の人が引っ越してしまいました。障害者の隣に住むということが不安だったのではないかと思います。「これ幸い」と思って隣も借りたら、二階の人もいなくなってしまい、アパート全部を借りることになりました。その家はボロでもうなくなっていますが、伊達の地域生活支援はそういうところから始まりました。

今は逆に障害のある人たちが借りてくれるなら、新たに借家を建ててもいいよという人が多くいます。家賃を取りっぱぐれることはないし、何かあったら私たち支援者が飛んでいきます。最初によく言われことは、「障害者はよく知らないけれども、あんたたちを信用して貸すよ」と

言うことでした。ケアする側を信頼できるかどうかということが、市民や家族の理解を得るための原点だと思います。デンマークのことわざに、「見えなければ思うことがない」というのがあるそうです。伊達の町には300人以上の知的障害のある人たちが住んでいますから、隣に住んでいたり、一緒に会社で働く場面が日常的にあります。朝出勤するとき、障害のない人たちは車で移動しますが、子供と障害者は歩くか自転車です。だから町に障害者が歩いていたり、暮らしていることが当たり前風景なのです。いつも障害者が見えるようになると、市民の方々はあっという間に障害者になれていき、どうして障害者を疎外するのか、そのほうが不思議だと思うようになります。

私たちは最初必死になって訓練により障害者が町に適応できるように努力しました。しかしこれには限界があります。そうではなくて、あくまでも町のほうに、市民のほうに障害者に慣れてもらう、理解を深めてもらうということが、とても大事なことなのではないかと思っています。

河東田 ありがとうございます。質問をくださった方、とりあえずそれでよろしいでしょうか。今、お話を伺っていて私なりに感じたことが二つございます。一つは日本の特徴かと思う部分と、もう一つは外国ではどうだろうということです。そこで、次にレスリーさんに質問してみたいと思います。小林さんのお話を伺いますと、約20年ぐらいものすごい努力の積み重ねがなされながら、ようやく今新たな法制度ができて、国がかりで動かそうとしている。そういう地道な積み重ねの後に法制度ができるという動きが、欧米にはたくさんあります。オーストラリアではいかがでしょうか。

レスリー まさにおっしゃったとおりだと思います。いろいろな政府に働きかけるというようなロビー活動とか懸命な努力が必要ですが、小林さんのおやりになったこと、大変私は感銘を受けながら聞いておりました。町に出て一つひとつやっていくというやり方、これは非常に重要だろうと思っています。70年代にオーストラリアでも状況が変わり始めたのですが、法律的枠組みを作るのに1986年まで待たなければなりませんでした。

河東田 ありがとうございます。国という枠を越えて同じようなプロセスをたどりながら努力の結果として法律や制度が整えられていっているようです。

先ほど小林さんがケアをする人を信用してもらえるかどうかだとおっしゃいました。苦勞の多い実践が地域には数多くあるわけですが、そうしますと、私たちが信用されるようにするために苦勞を厭わない仲間がたくさん増えてこないといけないわけです。そうしますと、当然のごとく職員の研修、彼らにかかわるスタッフやヘルパーの研修が求められてくると思います。レスリーさん、オーストラリアではどのような職員研修をなさっておられるのか、をお教え下さい。

レスリー 技術面でのトレーニングも必要ですし、大学教育といったものが必要になってくる場合もあります。しかし、直接的にケアをするということになりますと、コミュニティで生活をする人に対する支援をするための訓練を受けてその種の資格を得なければなりません。そういう意味では、多くの組織が行っている職員研修の中に、価値観の変容を迫るような訓練が行われなければならないと思います。

河東田 ありがとうございます。しかし抽象的でわかりにくかったかもしれませんので、次の質問に答えていただいて、もっと具体的にしていきたいと思います。「レスリーさんのご発言

の中で、施設スタッフが持っている支援技術は、地域生活支援には役に立たないと言われておりました。具体的にどういうところがだめなのか、変容のための研修とはどんなものなのかをお教え下さい。」レスリーさん、いかがでしょうか。

レスリー　変わりたいと思っているけれども、施設で覚えた価値観をそのままコミュニティ生活の中に持ち込むような職員もいらっしゃいます。また、全然自分の考え方を変える必要はないと思っているような人もいます。そういう人は、もはや障害に関わる仕事には向いていないと思います。自然にやめていくということになります。では訓練の中でどうやっていくのかということになります。従来のものとは違ったものの考え方をするにはどうすればいいのかといったトレーニングをしますが、その際、やはりお手本になるような人がいて、その人が従来型の枠にはまった考え方ではない、よりしなやかな考え方、しなやかな仕事のやり方といったものを示す、お手本になるような人がトレーニングの場に来て話をしたりお手本を示したりすることが必要になります。

河東田　ありがとうございます。

小林さんのところで、さまざまな地域移行の取り組みをされてこられました。恐らく同じような悩みや課題を持っていらしたのではないかと思います。地域生活を支援をするにあたって今までどのような職員研修を行ってこられましたか。

小林　格別なことはしていません。ただ、私どものスタンスとしてとても大事にしているのは、職員間の共通認識を図ることです。ですから、朝の打ち合わせ、夕の打ち合わせ、夜の打ち合わせと毎日3回の職員ミーティングをやっています。あとは毎週行っている職員会議等の中で、研修的な要素を取り入れ、理念や支援技術の共通化を図っています。

河東田　ありがとうございます。

では、杉田さんに伺います。先ほどの報告の中で、職員研修についても触れておられました。地域に出ていっても、また施設化が再現されてしまう危険性があるため、職員研修がとても大切なのではないかと聞かれましたが、杉田さんならどのように答えられますか。

杉田　実際に職員に研修をしたこともありませんし、何が言えるというわけではないのですが、調査をしていて驚いたのは、先ほどレスリーさんが言われたように、入所施設に長くおられた職員の方は地域に出られても、同じかわりをしてしているということです。それが職員のすることだと思ってらっしゃるようです。つまり何でも決めてあげる。そうすることがサービス提供だと考えておられる方が多いように思いました。

小林さんのお話をうかがっておりますと、地域の人にわかってもらうという発想ではなくて、ボランティアをしたり、何かいいことをして気に入ってもらおうというかわりのように思います。真実を隠すと言ったらおかしいですが、とにかく適応しないといけない、そのままではいけないというような発想のように思えてなりません。

お話を聞いていいなと思ったスタッフが、Aという施設におりました。在宅からグループホームに来られた方がおられて、「寝る時間が決まっているのはおかしいじゃないか」と言われたそうです。そのスタッフの方は、「ああ、自分たちはおかしいんだ」と気づかれました。伊達の職員の方にも同じような気づきをされた方がおられました。昔は施設でいちいち今日は何をやるかという報告のミーティングをやっていたけれども、地域でグループホームに分かれて

住むようになると、ミーティングは物理的にできなくなってしまう、「今まで自分たちは不自然なことをやっていたんだ」ということに気づかれたそうです。「そんなものはむだだからやめてしまおう」ということになったそうです。そういう気づきから新しい動きが生まれてくるのではないかと考えています。

河東田 ありがとうございます。職員研修につきましても皆さんからご意見をいただければと思っているのですが、もう少しやりとりをさせていただいた上で、1、2ご意見をいただきたいと思っています。

先ほど小林さんは、「のぞみの園」のことを例に出して、北海道出身の方については何とか受け入れの枠をつくろうとしているとおっしゃいました。東京都にも同じように都外施設がたくさんあります。同じような動きになればいいのですが、なかなかそうはならない。いろいろな理由をつけて渋っているのが実態です。そのことについて小林さんはいかがお考えでしょうか。

小林 都外施設の問題は、受け皿ができて東京に戻ってこれればそれに越したことはないと思います。都外施設に入所している人は4,000だったか6,000だったか、そのぐらいの数がいいると思いますが、果たしてその受け皿をつくっていけるのかどうかというとはなはだ疑問です。

望んで秋田や青森の施設に行った人は少ないと思いますが、住めば都で20年、30年と暮らしてしまうと、東京よりそこのほうが居心地がよくなっている人もいるかもしれません。例えば私の子供のころ集団就職という言葉がありまして、北海道の田舎では就職先がないから、わたしの同級生も中学や高校卒業と同時に東京に就職した人がたくさんいます。そして長年東京に住んでしまうと、もうほとんど田舎に戻る人はいないと思います。来るときは泣く泣く来たかもしれないけれど、長く住むと、そこに親しい人間関係ができて、いつの間にか一番居心地のよい場所になってしまうということもあります。同じように、障害のある人たちも何が何でも生まれ育った所に戻らなければならないと言うふうに考える必要はないと思います。最終的には、本人がどこで暮らしたいのか、現住所か出身地か、選べるのが大切です。東京に帰りたいという人を「あなたは東京には戻れない、だから都外施設で暮らしなさい」という状態にしてしまうのは、とても不幸なことだと思います。

河東田 私は今、東京の国立（くにたち）というところで、地域保健福祉計画の策定にかかわっているのですが、障害者関係の計画の章で、脱施設、脱病院を打ち出し、その受け皿をしっかりつくっていけるような取り組みに入っていこうという計画を立てました。行政もその考えを受け入れてくださいましたので、その方向で進んでいくと思いますが、この問題は、ご本人のこともさることながら、私たちの問題でもあるのではないかと考えています。私たちはこういう場所をこのように用意し、今後こうしていきますという計画を作り、提示していく必要があると思います。

では、次の質問に移っていきます。多くの方から、障害を持っている方々の終の棲家はどこになるのかという質問をいただきました。入所施設は困る、じゃあグループホームなのか、グループホームも終の棲家としては困ると思っていられっしゃる方が多くいらっしゃると思います。それでは、ケア付きの自立アパートなのだろうか等々いろいろな考えが浮かんでくると思います。3人の方々がどう考えているのかを伺ってみたいと思います。いかがでしょうか、では杉田さんからお願いいたします。

杉田 地域移行プロセスをお示ししたときに、入所施設や在宅があって、いろいろな訓練が

あって、グループホームやアパートがあって、夫婦生活があつてと、だんだんレベルアップしているように示してしまったのですが、私自身はそうでなくてもいいのではないかと考えています。入所施設は私たちの間違いだったと思いますが、グループホームで住んでいる人たちを見てみると、仲間と楽しそうに暮らしているようすが見られます。個人的にはこのような暮らしがあつてもいいのではないかと考えています。ただ、今のグループホームは、だれと住むかは本人たちが選べていないという実態があつたり、だれと住むのかについても選べるようにはなっていないなどの問題点があります。

問題点は改善していく必要があります。ただ、普通の人も家をルームシェアしながら暮らしている人もおりますので、大好きな人と、異性でなくても友達と一緒に住めるような環境と方法があつてもいいのではないかと考えています。

レスリー 私も同じ意見です。施設というところは終の棲家になってはいけないと思います。オーストラリアの状況はどうかといいますと、グループホームに住む人もいれば、アパートに住む人もいれば、田舎のような遠く離れたところに住む人もいます。ふるさとへ帰る人もいますし、ふるさとには帰らない人もいます。ですから、暮らしの形態や暮らし方はそれぞれさまざまということだと思います。

だれと一緒に住むかということですが、これも選択肢があつて、だれと住みたいかを決められるようにすべきではないかと思っています。ただ、その施設に長く住んでいた人にとっては、一番一緒に住みたいと思っている人は一緒に長く施設にいた人ということになるかもしれませんけれど。

河東田 小林さん、ちょっと違う質問をさせてください。多くの方から、重度の方や身体的に重度というだけではなくコミュニケーションもなかなか取れない、医学的な対応を必要としている方々の地域移行や地域生活をどう考えておられるのか伺いたいと思います。

小林 これまで、障害の重い人や高齢の人は、施設で暮らすしかないと考えられて来ました。それは逆で、むしろ障害の重い人や高齢の人達の方が施設は向かないのではないかと、グループホームなどのような少人数の生活が必要なのではないかと思っています。しかしこれらの人たちの地域生活を実現するためにはお金がかかります。また多くの人手も必要です。しかし今の日本の現状では制度がそこまで進んでいなくて、結局は施設での集団生活を余儀なくされているのです。

伊達では、12月に、行動障害のある人と重症心身障害の人たちを対象としたグループホームを開設する予定です。これには伊達市もお金を出してくれています。今度の自立支援法の中で障害の重い人達を対象としたケアホームや重度包括払いの制度がスタートしますが、それを先取りしたものです。伊達では毎年270人ぐらいの赤ちゃんが生まれてきます。そのうち知的障害や身体障害、難病を持ったハイリスクの子供が1.5%から2%、年間4、5人ぐらいの割合で生まれて来ますが、年間たった4、5人ぐらいですから生涯にわたって支えることができるはずだと考えています。ですから本人や家族が望むのであれば、どんなに障害が重くても地域生活を続けられるよう、グループホームづくりを進めて来ました。そんな運動の積み重ねの中で、重症の人達のケアホームを実現することができましたが、今の日本の現状では、よほど支援者や家族、そして市町村の協力がなければ、行動障害のある人や極めて重い障害のある人たちの地域生活は難しいと思います。

河東田 ありがとうございます。もう終了の時間が迫っておりますので、どなたかお一人だけご意見をいただけませんでしょうか。今日午前中からずっと聞いていただいて、感じたこと、それからまだ伝えたくて伝えられなかったことがございましたらおっしゃって下さい。いかがでしょうか。

E 私は現在埼玉に住んでおりまして、小林さんの伊達市、あるいは宮城県にも見学に行かせていただきました。事業団に所属しておりまして、先ほど小林さんがおっしゃられたとおり、リストラされて退職をいたしました。現在は専門学校で教えておりますが、これから私もいろいろ勉強していきたいと思います。ところで、地域生活を送っていくには、経済的な基盤が必要になるわけです。そこでお伺いしたいのは、現在1級、2級という年金がございます。その年金と今回の「障害者自立支援法」の中で言われている一割負担でどう自立ができるのか、収入の確保ができるのかをお伺いしたいと思います。本人も家族も経済的な基盤の弱さを感じて足踏みをしてしまうのではないのでしょうか。オーストラリアではどうなのかも知りたいところです。

河東田 終了時間になってしまいましたので、Eさんからはご意見をいただいたという扱いにさせていただきます。さて最後に、ご援助をいただいた日本障害者リハビリテーション協会の関係者に今日1日の評価につながるご感想ないしご意見をいただければ幸いです。

B 私は、リハビリテーション協会の参与をしておりまして、それで来ておりますが、本来の仕事は大学の教員をしております。私はもともと身体障害の分野の出身でして、身体障害の方ですと一定期間の訓練が終わったらそれでも我々の役割はなくなります。そのために、伊達のように一生涯ずっとかわり続けていることに若干違和感がありました。それに関して小林さんのお話や皆さんのお話を聞いていく中で、一生涯かわることの必要性もあるのかなという感じを持ちました。また、そうではないという意見があることもわかりました。このことについては今後関係者の皆様が結論を出していけるのだらうと思いました。私にとっては勉強させていただき、とても有意義でした。どうもありがとうございました。

河東田 シンポジウムと言いますと意見がかみ合わなかったり、不消化の状態で終わることが多いのではないかと思います。しかし、今日は私のまとめが必要ないぐらい、レスリーさんからは具体的な状況の整理をしていただきました。小林さんからは、全国的にもとても参考になるような新たな北海道での取り組みが紹介されました。今日いただいたものを各地に持ち帰り、実践に役立てたり、調査研究を行っていききたいと思います。

私どもの関係で言いますと、杉田さんを中心にしながら、地域移行に関する個別支援プログラムを作成しているところです。この個別支援プログラムを盛り込んだ報告書を4月末までに厚生労働省に提出することになっていることをご承知おき下さい。

では今日は、長時間にわたりまして、私どもの発表やら報告を聞いていただきまして本当にありがとうございました。まだまだ課題が多い取り組みですが、皆さんと一緒にぜひ前に進めていきたいと思います。今日ご参加いただいた小林さん、レスリーさん、杉田さん、そして通訳をして下さった荒木さんに感謝を申し上げます。ありがとうございました。(拍手)

では、この後、オランダからの報告をいただきます。オランダからもスウェーデンに劣らない報告をいただけるものと思います。ぜひご参加いただきたいと思います。

それでは第4分科会はこれで終了いたします。どうもありがとうございました。(拍手)

●

記念講演 2

「オランダにおける本人活動と地域生活支援」

(オランダ) オンダリングシュタルク (L F B)
所長 ウィリアム・ヴェステヴェル
北部地区所長 ヴィレム・クワッケル

ウィリアム 皆様、ようこそ私たちの講演においでいただきました。ありがとうございます。私の名前はウィリアム・ヴェステヴェル、LFBの所長です。そして隣にいるのがサンタクロース…ではなくて、ヴィレム・クワッケル、LFBの北部地区所長です。

それでは、LFBについてご紹介いたします。

私たちの組織は、知的障害者のための知的障害者による全国組織です。ちょっとほかの講演とは違ってまして、私とともにこの壇上にいますヴィレム・クワッケルは英語は話せませんので、通常は彼のコーチがやってくれますが、今日は私が彼の言葉を英語にして、その英語になったものを通訳が訳すという形で行わせていただきます。

私たちの組織の成り立ちについて簡単に説明いたします。

1985年、最初のピープル・ファースト・グループ「共に強くなろう」ができました。私もこのピープル・ファースト運動にかかわった1人で、立ち上げを手伝いました。1995年、私たちは独立した団体になりたいということで独立し、全国をカバーする全国組織となりました。2000年には、地方事務所をオープンさせました。そしてさらに広い範囲で展開を続けています。私たちの組織は、非常にユニークな組織形態を持っています。親の会とか、あるいはそのほかの団体とは全く異なる独立した組織で、障害者自身がコーチなどの支援を得て、本人たちだけで運営している組織です。2003年には県の事務所も開設しました。2005年の今年は10周年を迎えています。

本部には、サービス事務所があります。そこで仕事をしているのは本人たちです。そして、その本人たちからいろいろ学んでいる人たちがいます。私たちは、仲間や社会を育成・開発する機関でありたいと思っています。いろいろな組織と協力をしながら人を育てるということをやっていますし、政策提言や政治についても発言をしていく活動を行っています。

私たちの組織構成は少し複雑です。本部の中核機関としてサービス事務所を置いています。私はその責任者として仕事をしています。四つの地方事務所があって、今、私の右側に座っているヴィレムさんが地方事務所の一つで仕事をしています。その下に12の県単位の事務所があります。それから40のピープル・ファースト・グループ「共に強くなろう」があります。各組織には、監査、理事も置いています。

今度はヴィレムさんが、自分の地方事務所では何をやっているかを説明してくれますので、彼が言うことを私が英語に訳します。

ヴィレム では、地方事務所の活動を紹介します。テーマカフェを組織をつくってやっています。私たちは、地方事務所の下部組織である県の事務所の開発と発展のための支援をしています。県の事務所に出かけ、当局に情報提供をしたり、意見交換をしたりします。介護支援者、ケアの提供者との連絡・調整も行います。県当局者との連絡も行います。地方事務所相互の連絡・調整も行います。

ピープル・ファースト・グループ「共に強くなろう」の中で、自己主張し、自分自身を強くするために具体的な取り組みを行っています。いろいろな社会的な接触、何を変えたらいいのかということについての話し合いもします。何をやりたいかということについての話もします。親からは独立した形でやっています。あるいは施設からは独立した形で、介護者からは独立した形でやっています。

テーマカフェでやっているのは、「人と一緒に」いられるようにするための取り組みです。

ウィリアム ネットワークは非常に大事です。いろいろな省庁とやりとりをします。そのために、関係諸団体と一緒に活動することがあります。そのうちの 하나가、「M e e (メイ)」と

いうものです。四つのLFBの地方事務所と一緒に活動します。それから脱施設化を進めていきたい施設や介護者たちとも協力し合ってやっていきます。

LFBには、40のピープル・ファースト・グループ「共に強くなろう」があります。理事会の中でいろいろな組織の状況について話し合いをします。地方事務所からのメンバーの代表が4人、理事会に参加しています。それから1人の独立した議長がいます。組織活動の運営を任せられている事務所の代表である私もこの理事会に参加しています。理事会は、サービス事務所、地方事務所を監視し、支援も行います。

さて地域生活のためのアドバイスということでお話ししますとまず、学校の場合において障害を持つ人たちも新しい友人に出会うことができます。仕事という面では、知的障害を持つ人たちが雇われることによって、社会の中でのインテグレーションが可能になります。そして一番大事なことは、友人を見つけ、サポートを見つけ、そしてあなたが一緒に仕事をしたいと考えるスタッフを見つけて、自分がやりたいという仕事をやっていく。そして支援が必要なときには求めていくということです。

また、本人の周りの人たちへのアドバイスとしては、親や介護の支援者、提供者は、その本人の資質というものをもっとよく見るべきです。そして本人の希望や願いにしっかり耳を傾けるべきです。そしてその夢がかなうように一緒に進んでいくのが良いと思います。

また知的障害の人たちは、普通の学校の環境の中でこそよりよく成長・発達・自己実現を遂げることができます。また知的障害者の人たちが、お互いに会うことのできる場が必要です。おしゃべりをしたり、ダンスをしたり、ゲームをしたり、そして楽しいときを過ごすことができるそういう場が必要だと思います。

ありがとうございました。(拍手)



LFB Service Bureau

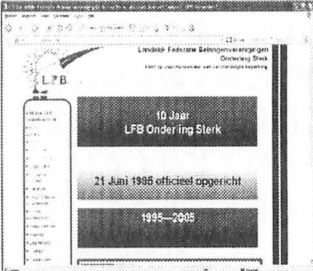
Welcome!

Welcome to a presentation from the LFB.
We are an organisation FOR and BY
people with a learning disability.

Presentation William Westveer en Willem Kwakkel LFB Holland



LFB Together Strong



- 1985 First 'Together Strong' group
- 1995 Independent organization
- 2000 Regional Offices started
- 2003 Provincial Offices started
- 2005 10 year Anniversary



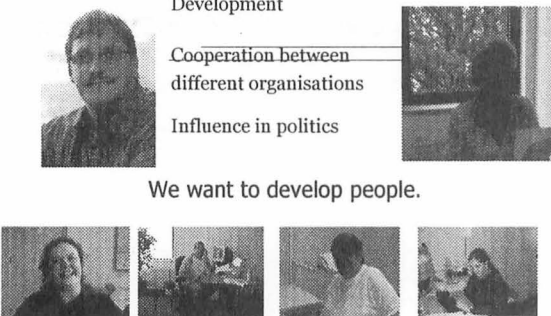
LFB a Unique organisation!

Development

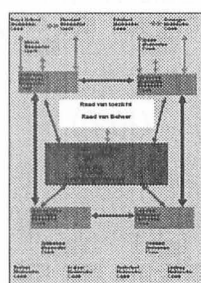
Cooperation between different organisations

Influence in politics

We want to develop people.




Our network



- Service bureau
- 4 Regional Offices
- 12 Provincial Offices
- 40 Together Strong Groups
- Inspection (Council)
- Management (Council)



Regional Offices

Ground Together Strong Groups

Organize 'Theme café's'

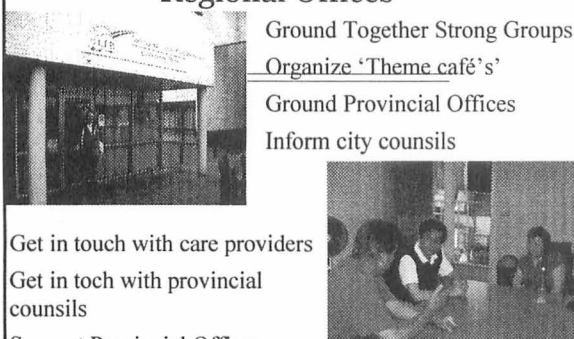
Ground Provincial Offices

Inform city councils

Get in touch with care providers

Get in touch with provincial councils

Support Provincial Offices




Together Strong Groups

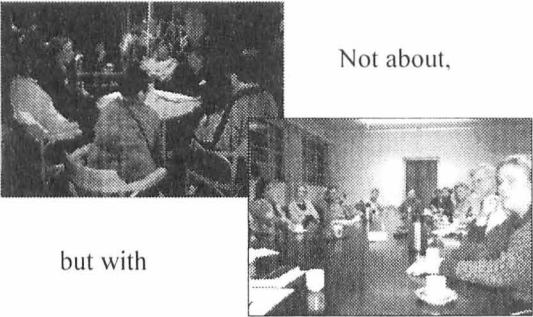
'Make yourself strong!'

Talk about what should change,
What you like,
What you want,
Independent of what
parents want, caretakers and care providers want, as well as what institutions want.

Social contacts



Theme café



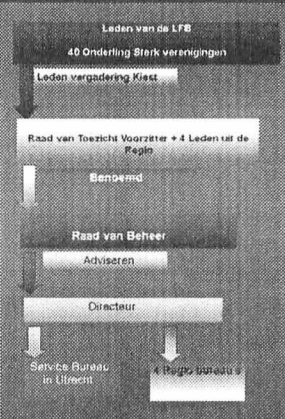
Not about,

but with

Network

Network is very important!

- Ministry
- Partner Organisation
- MEE
- 4 LFB regional Offices
- Care Provides/ institutions that want to work on emancipation



Tips

- School > there you can let people with a learning disability meet new friends
- Businesses > there you can hire people with a learning disability to integrate them into the society
- People with a learning disability should try harder to get into the society.
- Find mates, find support, find stuff you want to do, jobs you want to do etc...
- Ask for help...

More Tips

- Parents and care takers should look more at the quality of the person,
- Listen better to the wishes

And work towards that.

People with a learning disability can develop better in a normal school environment.

There should be meeting places for people with a learning disability, where they can chat, dance, play games and have fun.

Thanx
for listening!

閉会のあいさつ

河東田 博

国際フォーラムの終わりの時が近づいてきました。

皆さん、いかがでしたでしょうか。(拍手)

今回の国際フォーラムは研究発表の場として設定をさせていただきましたが、何かちょっと雰囲気違っていましたよね。大勢の障害をお持ちの仲間たちが参加してくれたからです。私たちの取り組みに、障害を持っている本人にぜひかかわっていただきたいと思ひまして、「かえる会」の皆さんや「わらじの会」の皆さんに協力をしていただきました。もし皆様に何らかの感動が伝えられたとしたら、この2つの団体のおかげです。本当にありがとうございました。第3分科会のコーディネートを下さった花崎さんにも感謝を申し上げます。

そして、スウェーデンのグルンデン協会の皆さん、オランダのオランダリングシュタルク連盟の皆さん、皆さんの貴重な生活体験、活動体験、組織づくり、すばらしい提言に本当に感動しました。心から感謝申し上げます。今後とも皆さんからたくさんことを学び、活動の場を共有し、共に社会の変革を求めていきたいと思ひます。そのために、これからも力を貸して下さい。これからも協力し合っていきましょう。

その他、日本障害者リハビリテーション協会、立教大学等、協力をして下さった全ての団体、方々に感謝を申し上げ、国際フォーラムを閉じたいと思ひます。

ありがとうございました。(拍手)

(本報告書のためのテープおこし原稿の手直しと編集を立教大学地域移行研究センターの青木良さんをお願いしました。心より感謝申し上げます。)

平成１７年度 障害保健福祉総合研究成果発表会報告書

平成１８年３月 発行

発 行 財団法人 日本障害者リハビリテーション協会
〒162-0052 東京都新宿区戸山１丁目２２番１号
(戸山サンライズ内)
電 話 (03) 5273-0601
FAX (03) 5273-1523

